



## 第3章

---

# 大学生の進路選択過程

## 3 . 大学生の進路選択過程

---

本章では、大学生の進路選択の過程について詳細にみていくことを目的とする。具体的には、文系 - 理系、大学での専門分野、進学する大学、職業などを、大学生はどの段階で意識しているのか。そうしたことを意識する時期は、性、文系 - 理系、専攻する専門領域などによって異なるのだろうか。さらに、大学生は、文系 - 理系の選択や学部・学科の選択をどれくらいの時期に行うのがよいと考えているのだろうか。こうした進路選択に対する意識と実態を検証していきたい。

これに加えて、ここでは、大学卒業後の進路希望や職業に対する意識についても検討を行う。それらが性、文系 - 理系、在籍する学部系統、COE採択回数などによってどのように異なるのかを考察する。これにより、大学生が文系 - 理系の選択から就職までの進路選択をどうとらえているのかを明らかにし、円滑な進路選択を促進する要因や阻害する要因を明らかにしていきたい。

### 1 . 大学入学までの進路選択過程

#### (1) 文系 - 理系の意識

最初に、今回の調査の対象となった大学生が、文系 - 理系をどの段階から意識したのかについて確認しよう。全体の集計結果を、**図3 - 1 - 1** に示した。もっとも多い回答は、「中学生のころ」(40.0%)で、次いで「高校1年生」(30.2%)となっている。小・中学生までの段階で、すでに半数が文系 - 理系を意識していることがわかる。さらに、「高校1年生」までを含めると、約8割が文系 - 理系の適性を意識し終えている。

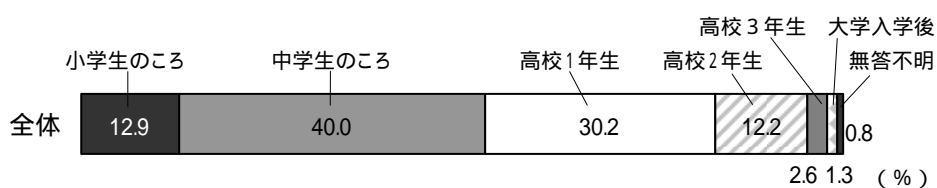
これを性別に示したのが、**図3 - 1 - 1** である。これをみると、女子の方が「中学生のころ」までに意識する比率がやや高く、比較的早期である。男子は、「高校2年生」以降に意識する比率がやや高かった。

続けて、文理別に違いを示したのが、**図3 - 1 - 1** である。ここからは、理系学生のほうが「中学生のころ」までに意識する比率がやや多いことがわかる。

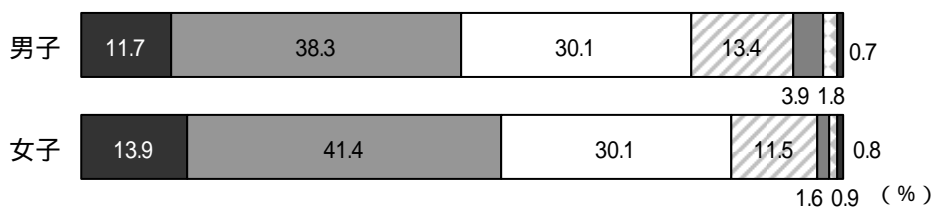
そこで、それぞれの性ごとに文理の違いを示したのが、**図3 - 1 - 1** である。文系 - 理系の適性を比較的早期に意識するのは、男子の理系学生と女子の文系学生である。「小学生のころ」と「中学生のころ」の合計は、男子の理系学生 57.4%、女子の文系学生 57.6%となっている。それに対して、遅い段階で意識する傾向が表れているのは男子の文系学生で、「小学生のころ」と「中学生のころ」の合計は 43.3%となっている。

図3-1-1 文系・理系を意識した時期

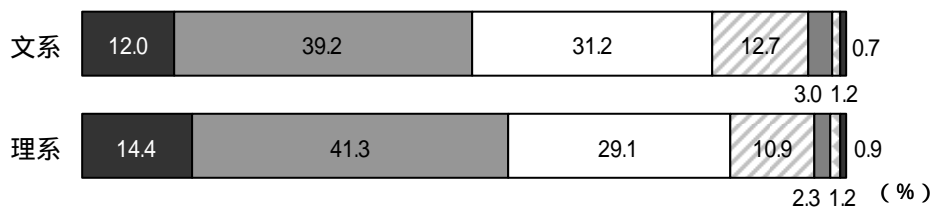
全体



性別

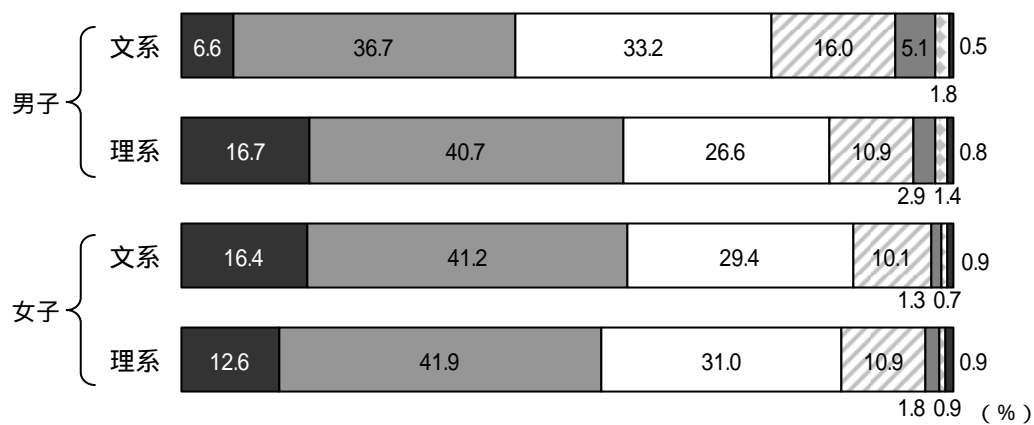


文理別



\* 専攻の文理別について、「文系と理系の間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

性別・文理別



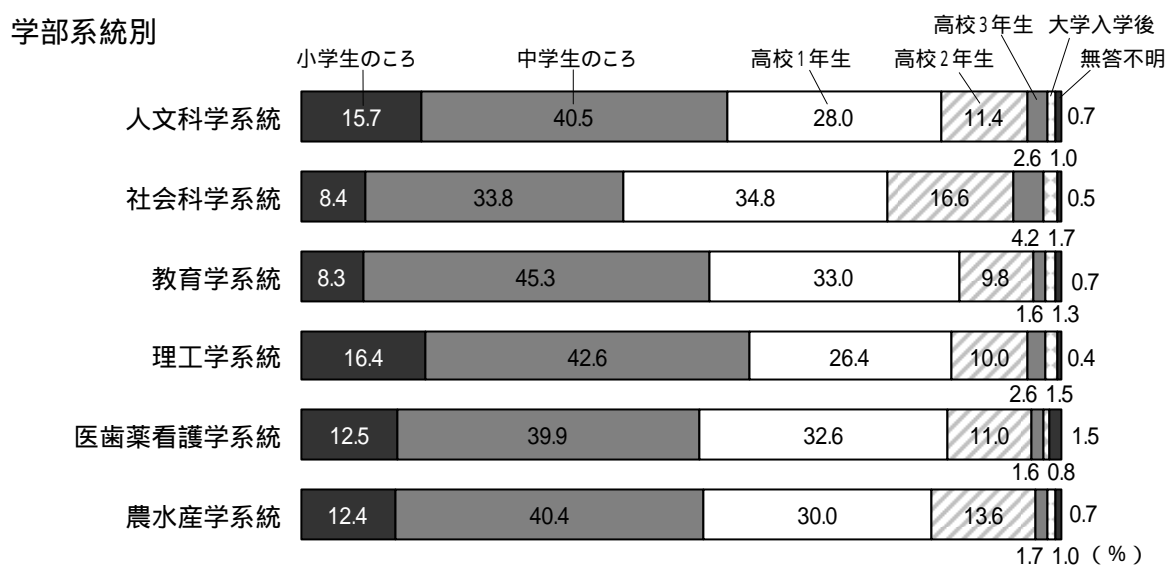
\* 専攻の文理別について、「文系と理系の間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

では、学部系統ごとにみたとき、文系 - 理系を意識する時期は異なるのだろうか。図 3 - 1 - 1 をみると、とくに理工学系統で「中学生のころ」までに意識した比率が高く(59.0%、「小学生のころ」と「中学生のころ」の合計、以下同様)、人文科学系統(56.2%)も同様の傾向を示している。この2つの系統は、典型的な理系学部、文系学部であり、早期に文系 - 理系を意識した者が多いのだろう。反対に、「中学生のころ」までの比率が低いのは社会科学系統(42.2%)で、「高校1年生」「高校2年生」「高校3年生」の比率がいずれも他の学部系統より高い。その結果、社会科学系統に進んだ学生は、55.6%が高校時代に文系 - 理系を意識したと回答している。

さらに性による違いを考慮すると、図 3 - 1 - 1 のようになる。これをみると、文系 - 理系の選択が比較的早期であった人文学部系統は、男女で傾向が異なることがわかる。「小学生のころ」と「中学生のころ」の合計は、男子46.1%に対して、女子61.0%となっている。理系の学部系統では、理工学系統は男女ともに比較的早期に文理の適性を意識している。また、医歯薬看護学系統では、女子にくらべて男子に「中学生のころ」までの比率が高くなっている。その比率は、医歯薬看護学系統に進学した男子(62.4%)がもっとも高い。

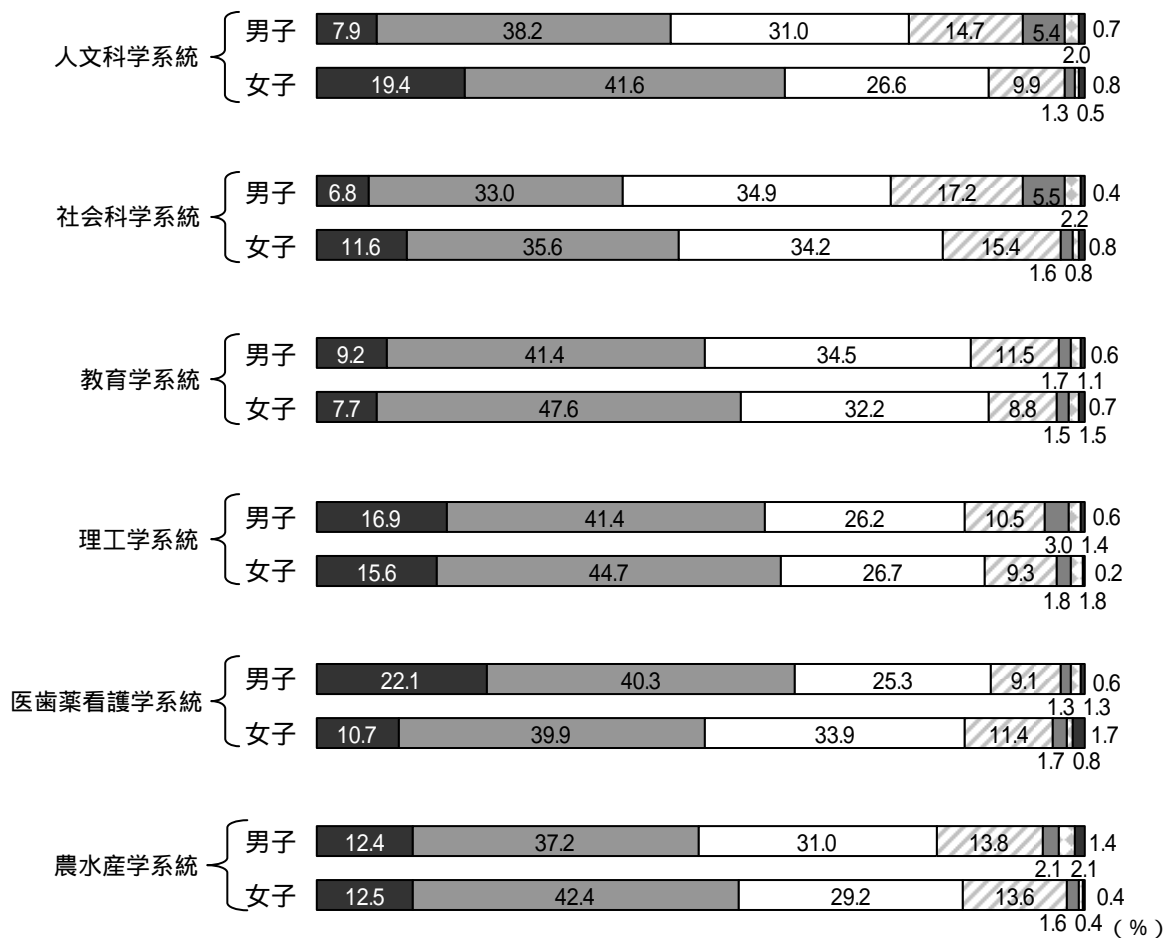
これらのことから、文系 - 理系を意識する時期は、性や学部系統によって表れ方が異なることがわかる。

図3-1-1 文系・理系を意識した時期（続き）



\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

学部系統別・性別

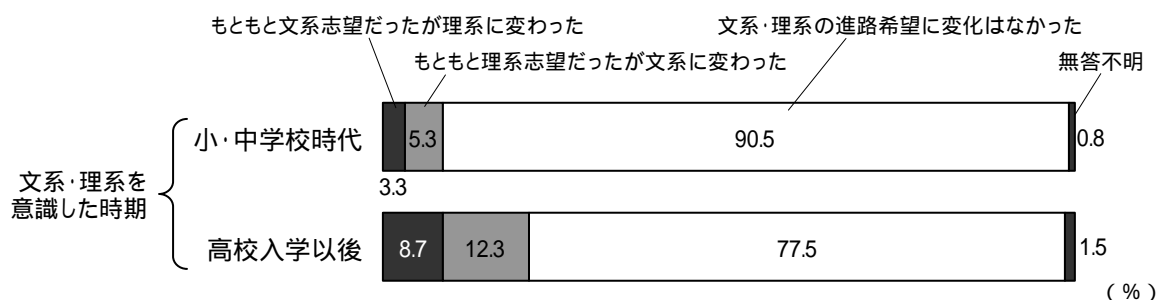


\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

次に、文系 - 理系を意識した時期と高校時代の進路変更の有無には、どのような関係があるのだろうか。図 3 - 1 - 2 は、文系 - 理系を意識した時期を「小・中学校時代」と「高校入学以後」にわけ、それぞれについて進路変更の有無をみたものである。ここからは、文系 - 理系を意識した時期が早い者ほど高校時代の進路変更が少なく、遅い者は進路変更した者が多いという傾向がみてとれる。文系 - 理系の意識が遅かった者は、高校時代にも自分の適性の判断に揺らぎがあるのだろう。

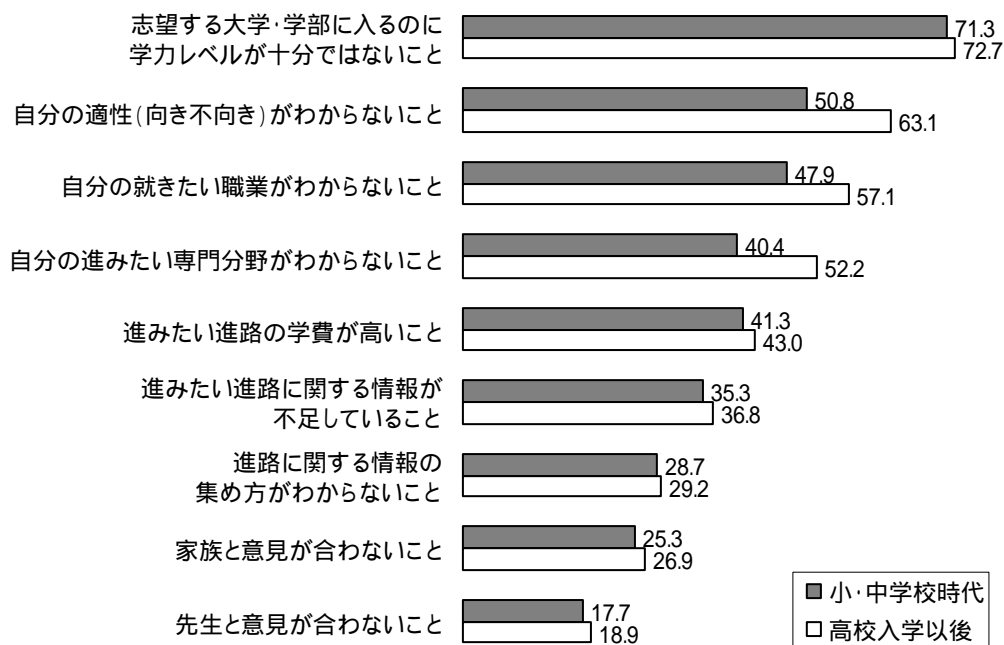
このことを詳しく検証するために、文系 - 理系を意識した時期の違いによって「進路を選択するときの悩み」がどのように異なるのかをみた(図 3 - 1 - 3)。全体的に「高校入学以後」に文系 - 理系を意識した学生で肯定率が高く、進路選択上の悩みが多いことがわかる。とくに、「自分の適性(向き不向き)がわからないこと」「自分の就きたい職業がわからないこと」「自分の進みたい専門分野がわからないこと」といった適性や進路観に関する項目で 10 ポイント前後の格差がみられた。こうした傾向が、図 1 - 3 - 2 で示したような進路変更の多さにつながっているのだろう。

図3-1-2 高校時代の進路変更（文理を意識した時期別）



\* 「小・中学校時代」は、「小学生のころ」と「中学生のころ」、「高校入学以後」は「高校1年生」、「高校2年生」、「高校3年生」と「大学入学後」と回答した者の数値。

図3-1-3 進路を選択するときの悩み（文理を意識した時期別）



\* 「よくあった」と「時々あった」の合計 (%)

それでは、文系 - 理系を意識した時期と「高校時代の教科の好き嫌い」はどのような関係にあるのだろうか。文系進学者と理系進学者にわけて、**図3 - 1 - 4**に示した。この結果からは、「小・中学校時代」に文系 - 理系を意識した学生のほうが「高校入学以後」に意識した学生よりも、教科・科目による好き嫌いが顕著である様子がうかがえる。

たとえば、「文系進学者」についてみると、「小・中学校時代」に文系 - 理系を意識した学生は、「高校入学以後」に意識した学生に比べて、「現代文」「日本史」「世界史」などの文系科目で「好き」の比率が高い結果になっている。その一方で、「数学」は「好き」と回答する比率がきわめて低く、「物理」「化学」についても同様の傾向を示している。すなわち、早期に文系を意識した文系進学者は、いわゆる文系科目に対する「好き」という思い、理系科目に対する「嫌い」という思いが強い。遅い時期に文系を意識した文系進学者も、文系科目が「好き」で理系科目が「嫌い」という傾向はあるが、その程度は早期に意識した学生より弱い。

同じような結果は、「理系進学者」にも現れている。「小・中学校時代」に文系 - 理系を意識した学生は、「高校入学以後」に意識した学生に比べて、「数学」「物理」「化学」などの科目で「好き」と回答する比率が高く、「現代文」「日本史」「世界史」などでは低い。早期に理系を意識した者は、いわゆる理系科目を好み、文系科目を嫌う思いが強い。もちろん、遅い時期に理系を意識した理系進学者も、同様の傾向はあるが、その程度はゆるやかである。

こうした結果から、文系 - 理系を意識する時期について2つの課題が考えられる。

第一に、文系 - 理系を遅く意識した学生の課題である。遅く意識した学生は、進路選択上の悩みが多く、高校時代に進路変更を経験している割合が高かった。また、遅く意識した学生は、相対的にみて教科・科目の好き嫌いが明確ではない。これは早く意識した学生に比べると、専門の学習に必要となる教科・科目が十分に好きではないまま進学している可能性もある。いずれにせよ、文系 - 理系を早期に意識することは、一定の利点があるといえよう。

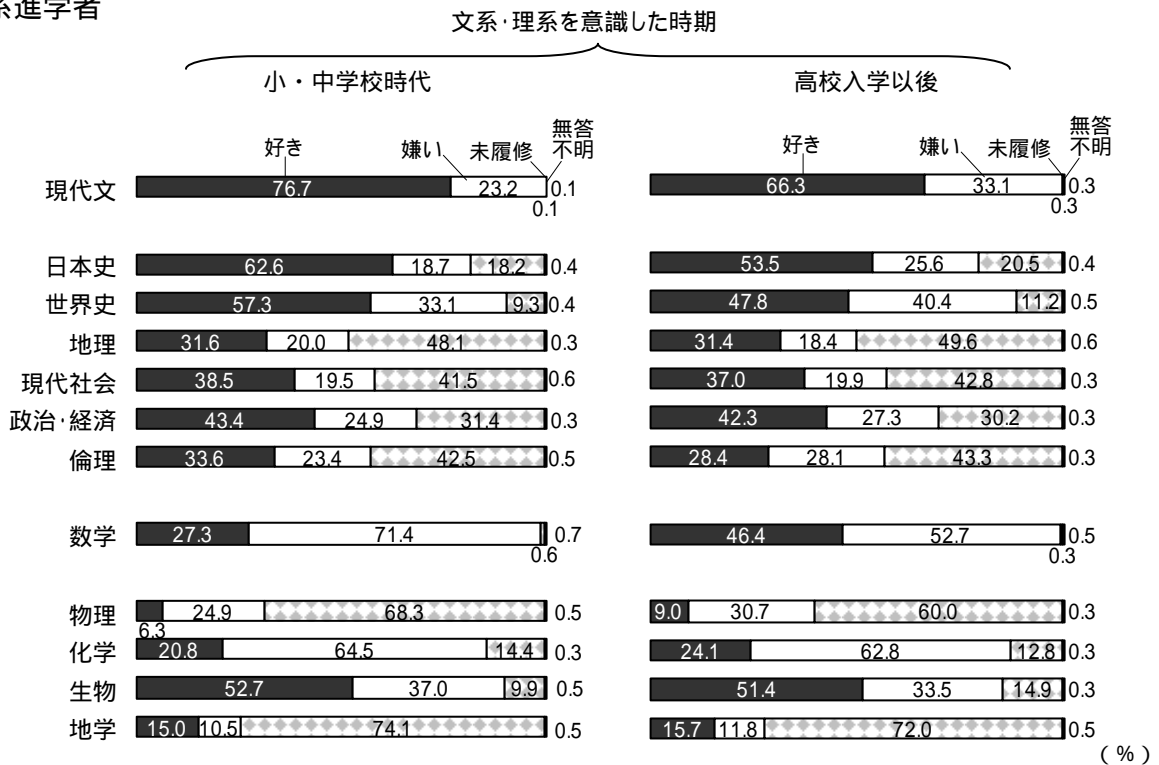
しかし、第二に、文系 - 理系を早く意識することの課題も考えられるだろう。早く意識した学生は、教科の好き嫌いが明確なために進路選択の幅を狭めている可能性もある。たとえば、「小・中学校時代」に文系を意識した学生は「数学」嫌いが顕著だが、こうした理系教科に対する忌避感情が理系への進学を妨げているとみることもできる。また、特定の教科に対する忌避感情の強さが、高校時代までに必要となる幅広い教養の形成を妨げる可能性も否定できない。

文系 - 理系を早期に意識すること自体は悪くはないのかもしれない。しかし、それにより将来を限定的にとらえてしまうとすれば問題である。文系 - 理系の意識というよりは、自らの適性やさまざまな可能性について、比較的早い段階から考える機会をもつことが重要ではないかと考える。

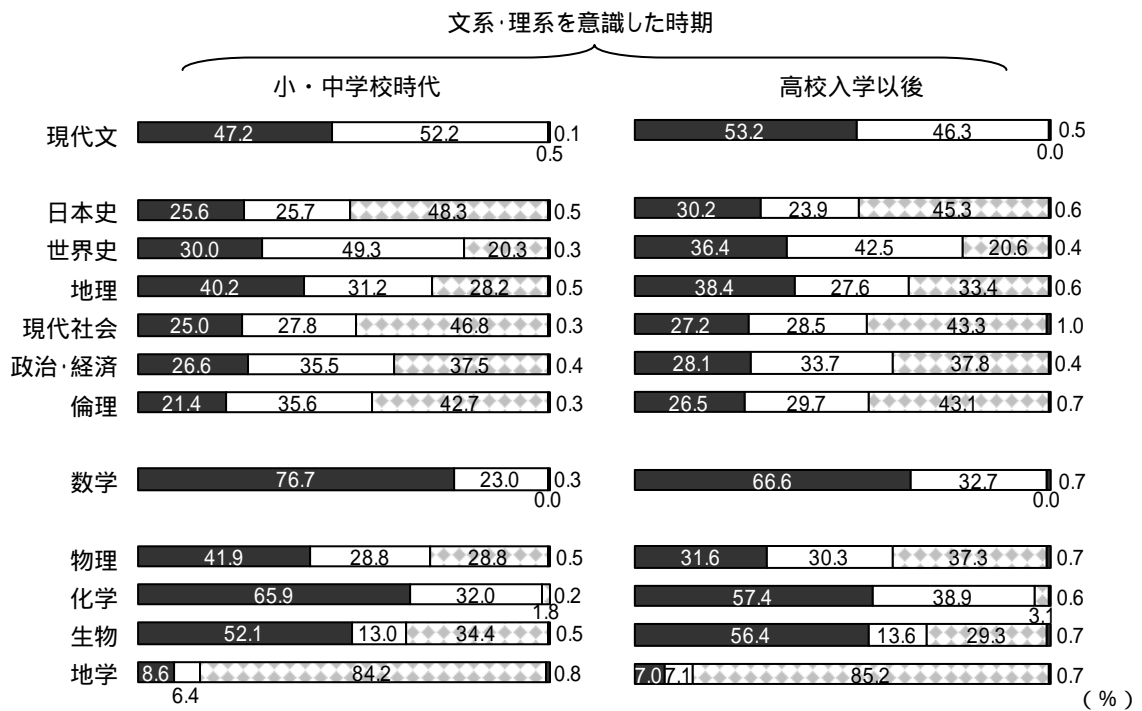


図3-1-4 高校時代の教科の好き嫌い(文理別・文理を意識した時期別)

文系進学者



理系進学者



\* 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。  
 \* 「未履修」は「履修していない」の数値。

## (2) 大学の専攻分野の意識

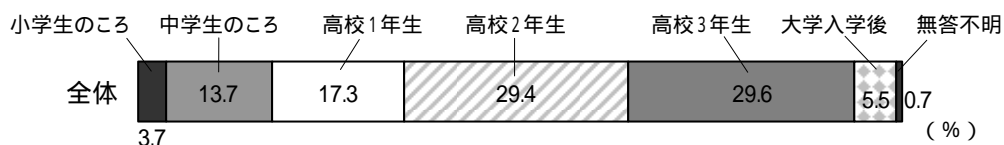
文系 - 理系の意識に続いて、ここからは、大学の専攻分野を意識した時期について確認していこう。**図3 - 1 - 5** は、全体の数値を示したものである。これをみると、「高校2年生」(29.4%)、「高校3年生」(29.6%)といった回答が多く、「中学生のころ」までに専攻分野を意識したのは2割にも満たない結果となった。高校の進路学習の取り組みをみると、1年生で職業・学問調べ、2年生で学部・学科調べをする学校が多い。このことから、高校時代に段階的な進路学習を通じて、専攻分野を意識したことが示唆される。

さらに、**図3 - 1 - 5** で性による違いを示したが、女子は男子に比べて、「中学生のころ」から「高校2年生」までに専攻分野を意識する比率が高い。一方の男子は、「高校3年生」以降に意識する割合が42.2%を占めており、専攻を意識する時期はやや遅めであるといえよう。**図3 - 1 - 5** で文系と理系の違いを示したが、理系学生で「高校2年生」までに専攻を意識する比率がやや高くなる傾向がみられた。

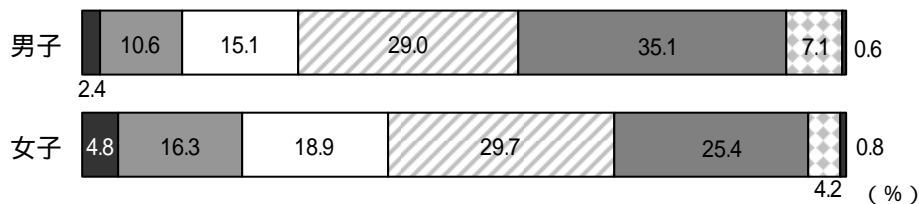
そこで、性別に文系と理系の違いをみたのが、**図3 - 1 - 5** である。これをみると、大学での専攻分野を意識した時期は、男子の文系学生がもっとも遅く、女子の理系学生が最も早い結果になっている。全体として「女子の理系学生 > 女子の文系学生 > 男子の理系学生 > 男子の文系学生」の順で意識する時期が段階的に早い様子がみられ、女子の理系学生は「高校1年生」までに43.3%が専攻分野を意識している。

図3-1-5 大学での専攻分野を意識した時期

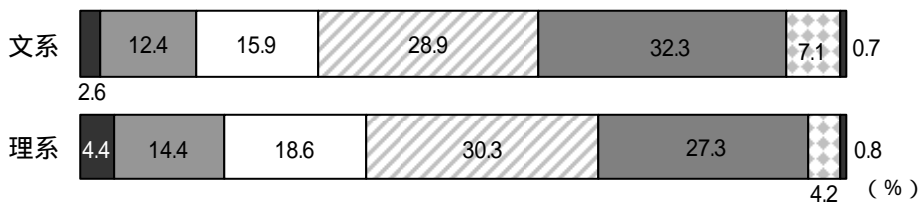
全体



性別

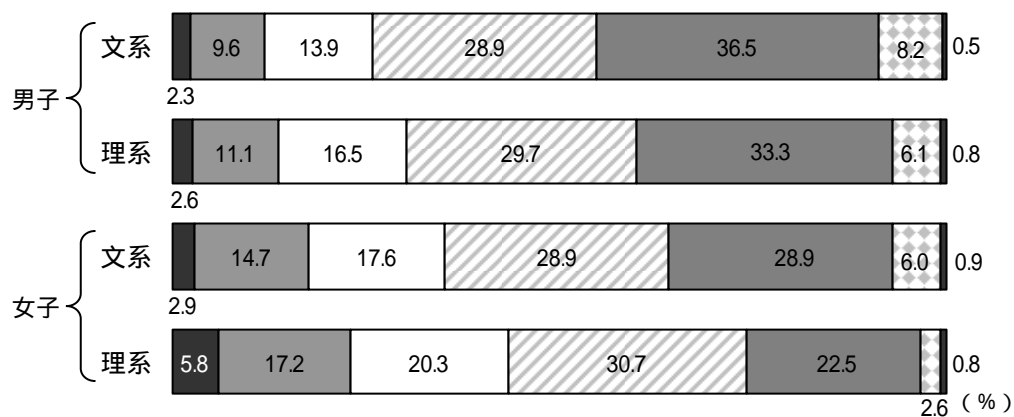


文理別



\* 専攻の文理別について、「文系と理系の間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

性別・文理別



\* 専攻の文理別について、「文系と理系の間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

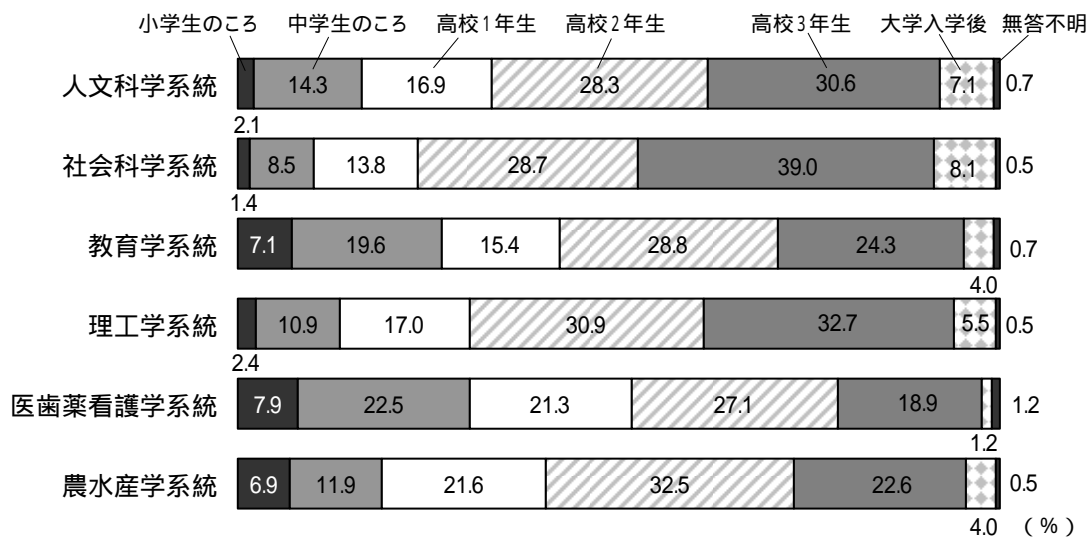
次に、学部系統ごとに専攻分野を意識した時期を、**図3-1-5** に示した。これを見ると、専攻分野を意識した時期は、学部系統によるばらつきが大きいことがわかる。

「高校1年生」までという比較的早期に専攻分野を意識している比率が高いのは、教育学系統（42.1%）と医歯薬看護学系統（51.7%）である。後述するが、この2つの系統は、他の学部比べてかなり早期に職業を意識しており、こうした傾向が専攻分野への意識を早める結果になっていると推察される。一方、専攻分野への意識が遅いのは、社会科学系統（23.7%）と理工学系統（30.3%）であり、この2つの系統は「高校3年生」という回答が他の系統よりも多くなっている。

さらに、学部系統ごとに性による違いをみてみた（**図3-1-5**）。**図3-1-5** で確認したように、性別では女子のほうが早期に専攻分野を意識していたが、こうした傾向は、人文科学系統、理工学系統、医歯薬看護学系統、農水産学系統に顕著である。なかでももっとも早期に専攻分野を意識しているのは、医歯薬看護学系統に進学した女子で、「中学生のころ」（24.0%）の比率が高く、「高校1年生」までには半数以上が意識している。

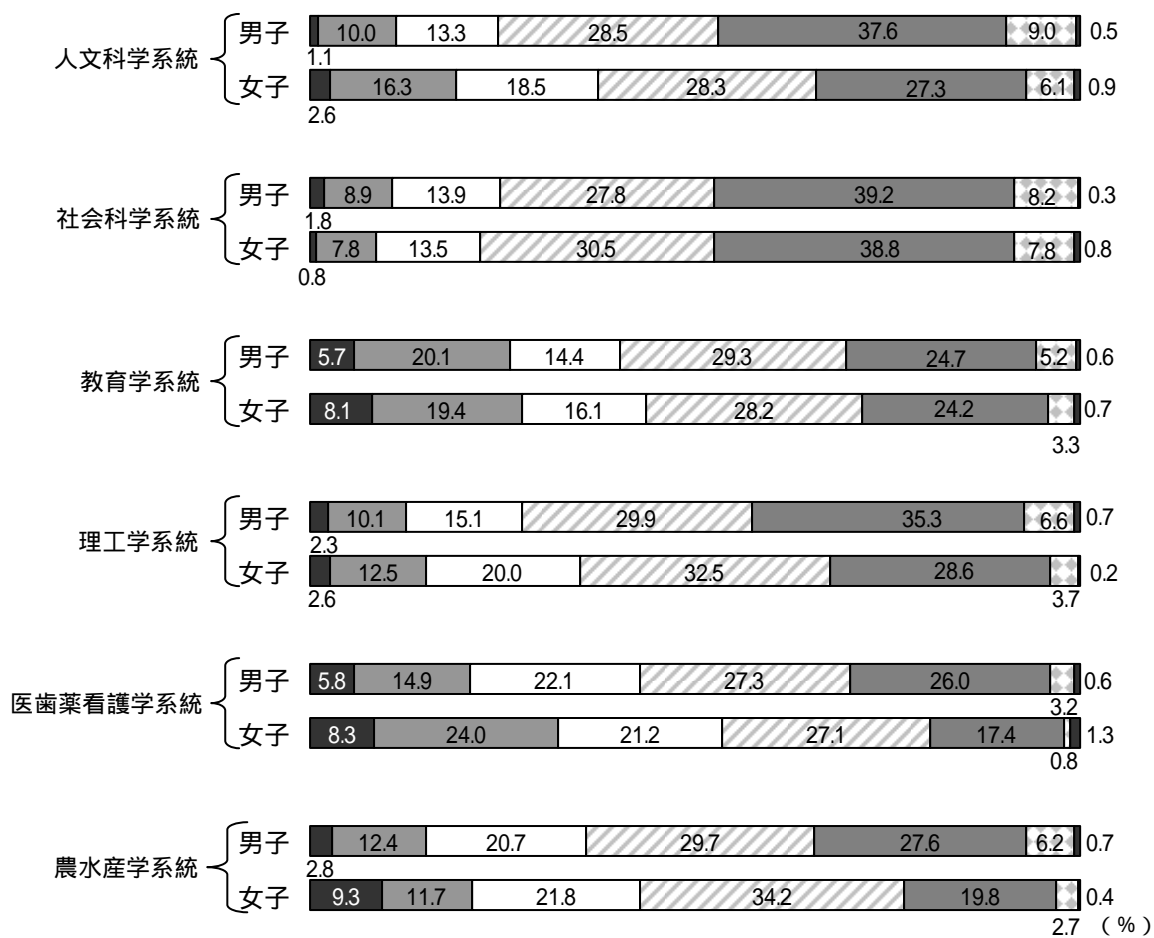
図3-1-5 大学での専攻分野を意識した時期（続き）

学部系統別



\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

学部系統別・性別



\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

次に、大学での専攻分野を意識した時期と高校時代の進路変更の有無には、どのような関係があるのだろうか。図3 - 1 - 6は、専攻分野を意識した時期を「小・中学校時代」「高校1～2年生」「高校3年生以後」にわけ、それぞれについて進路変更の有無をみたものである。ここからは、専攻分野を意識した時期が早い者ほど高校時代の進路変更が少なく、遅い者は進路変更したケースが多いという傾向がみてとれる。早期に専攻分野を考えていたほうが、進路選択に迷うことが少ない様子が見えてくる。

さらに、専攻を意識した時期の違いにより「進路を選択するときの悩み」がどのように異なるかを、図3 - 1 - 7に示した。これをみると、「志望する大学・学部に入るのに学力レベルが十分ではないこと」「進みたい進路の学費が高いこと」といった学力不足や経済面の悩みには格差がないものの、「自分の適性（向き不向き）がわからないこと」「自分の就きたい職業がわからないこと」「自分の進みたい専門分野がわからないこと」の3項目で大きな差が開いている。専攻を意識した時期が早いほど、とくに適性や進路についての悩みは小さいようである。

図3-1-6 高校時代の進路変更（専攻分野を意識した時期別）

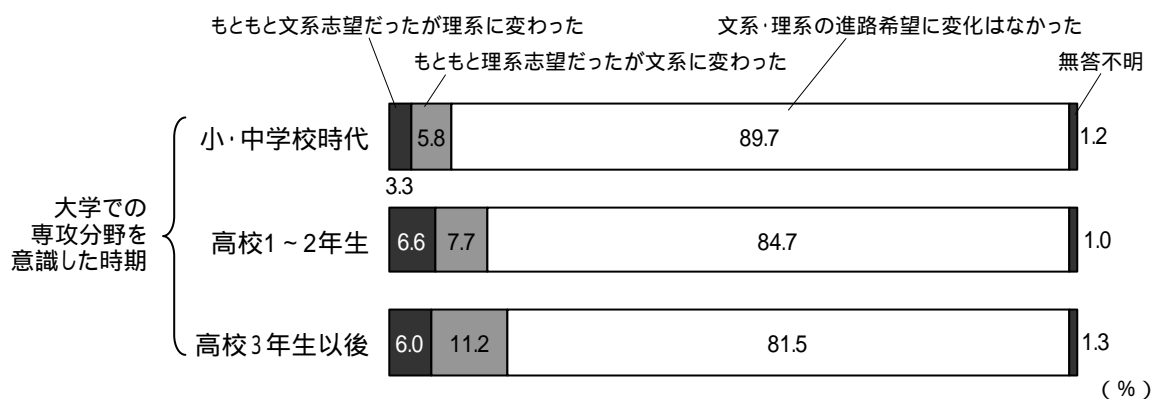
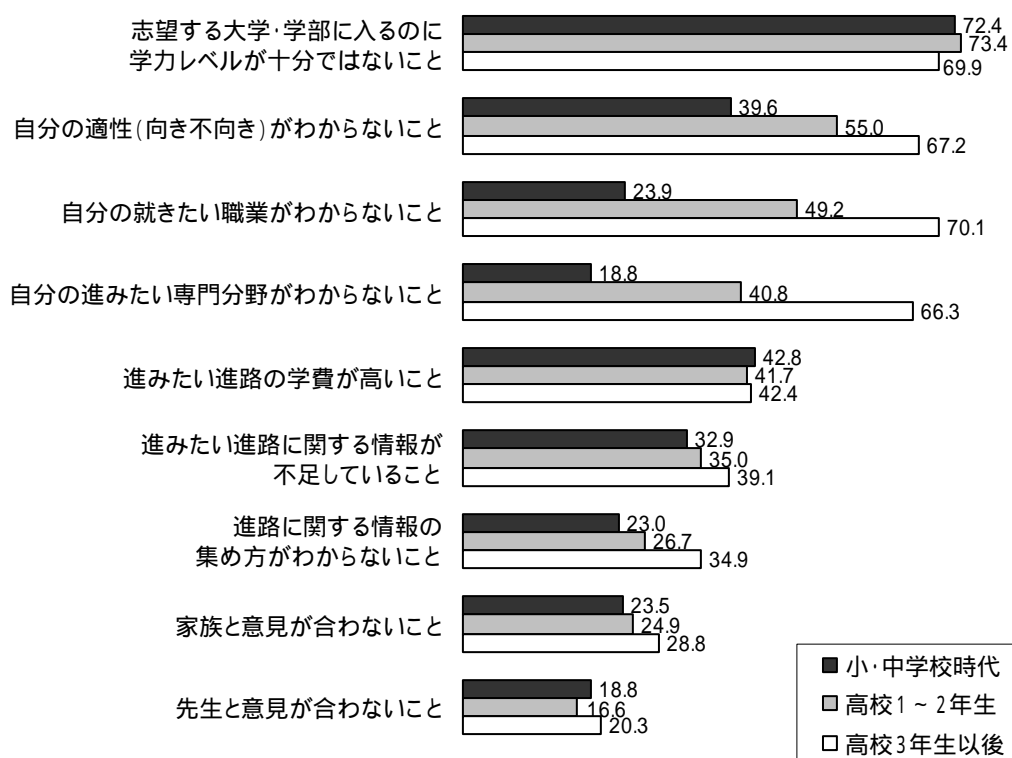


図3-1-7 進路を選択するときの悩み（専攻分野を意識した時期別）

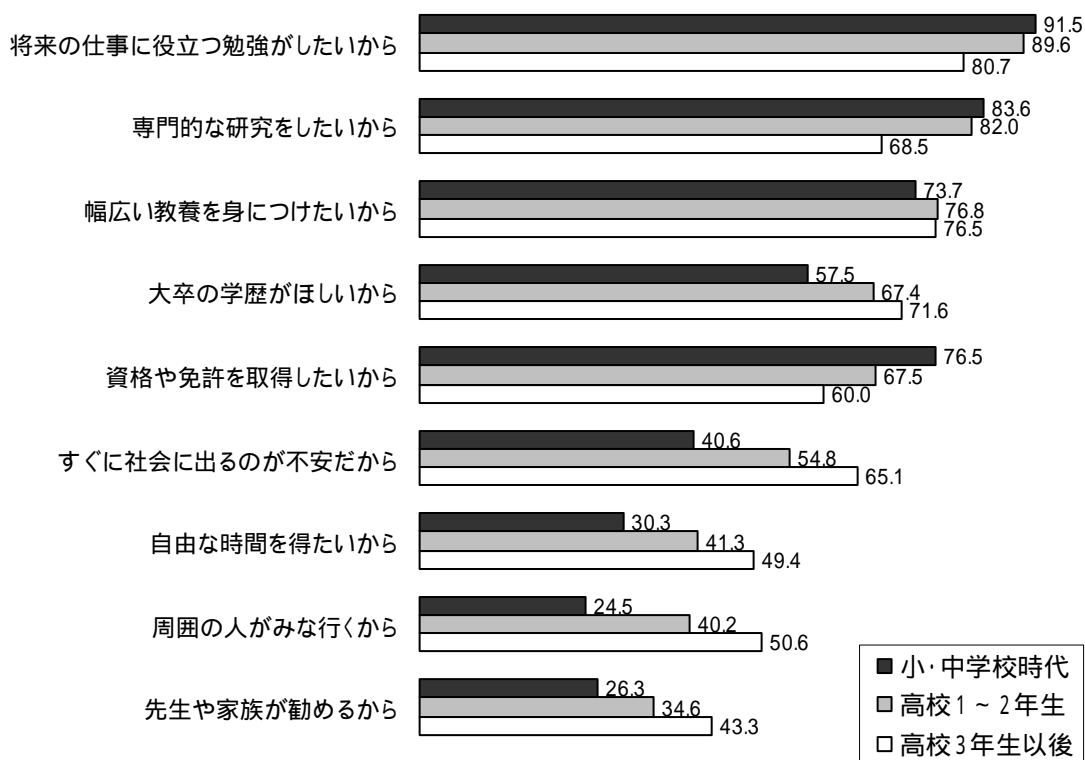


\* 「よくあった」と「時々あった」の合計 (%)

また、図3-1-8では、専攻を意識した時期の違いごとに大学進学理由を示した。これを見ると、意識した時期が早いほど「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」「専門的な研究をしたいから」「資格や免許を取得したいから」での肯定率が高い。専攻を早期に意識している者は、職業との関連や研究を意識して大学に進学している傾向が強く表れている。

その一方で、意識した時期が遅い学生は、「大卒の学歴がほしいから」「すぐに社会に出るのが不安だから」「自由な時間を得たいから」「周囲の人がみな行くから」「先生や家族が勧めるから」などの肯定率が高くなっている。こうした学生は、他律的に大学進学を決めている様子がうかがえ、総じてモラトリアム的な理由が強く表れる傾向がみられた。

図3-1-8 大学進学理由（専攻分野を意識した時期別）



\* 「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計 (%)。



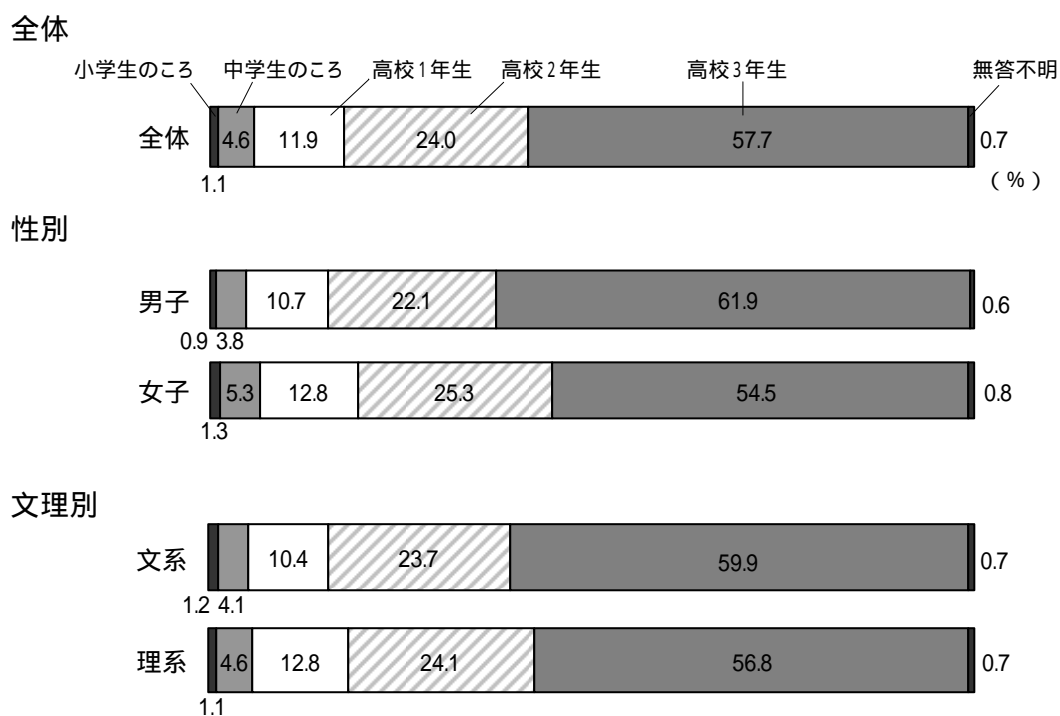
(3) 進学する大学の意識

ここからは、進学する大学を意識した時期について検証していこう。

図3-1-9は、対象者全体での集計結果を示している。これをみると、進学する大学を意識した時期としてもっとも多いのは「高校3年生」(57.7%)、次いで「高校2年生」(24.0%)であり、ほぼ8割が高校2年生以降に進学する大学を具体的に考えることがわかる。

図3-1-9には性による違いを示したが、女子が比較的早期に意識しており、「高校2年生」までの比率がやや高くなっている。なお、図3-1-9に、文系と理系の差を示したが、違いはほとんどみられなかった。

図3-1-9 進学する大学を意識した時期



\* 専攻の文理別について、「文系と理系の間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

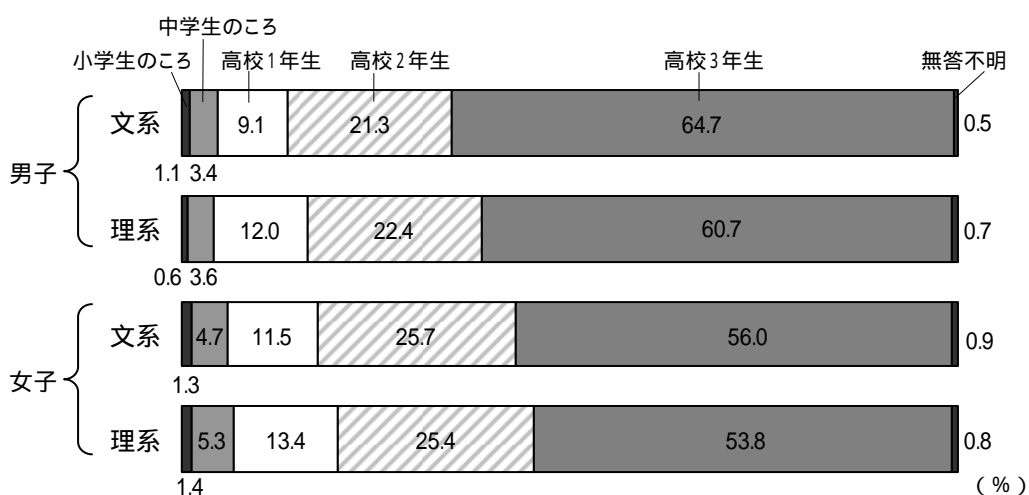
それでは、性ごとに文系と理系の違いをみた場合、どうなるのであろうか。その結果を図3-1-9に示したが、女子の理系学生で進学する大学を意識する時期が早く、男子の文系学生で遅いという結果になっている。この傾向は、図3-1-5で確認した専攻分野を意識した時期と同様である。女子の理系学生は、大学の専攻分野も進学する大学も、比較的早期に意識しているようである。

次に、学部系統別ごとに進学する大学を意識した時期を、図3-1-9に示した。いずれの学部系統も「高校3年生」の回答がもっとも多く、半数以上を占めている。比較的早い段階で意識しているのは、教育学系統と医歯薬看護学系統で、「高校1年生」までに意識した比率がやや高い。この傾向は、図3-1-5で確認した専攻分野を意識した時期と同様である。教育学系統と医歯薬看護学系統は、職業と関連した実学的な傾向が強く、専攻分野も大学も早期に意識する学生が多いことがわかる。

さらに、学部系統ごとに男女の違いをみたのが、図3-1-9である。これをみると、どの学部系統も女子のほうが早い時期に大学を意識する傾向があるが、その特徴は人文科学系統、教育学系統、医歯薬看護学系統に顕著である。とくに、教育学系統、医歯薬看護学系統に進学した女子は、約半数が「高校2年生」までの時期に大学を意識している。

図3-1-9 進学する大学を意識した時期（続き）

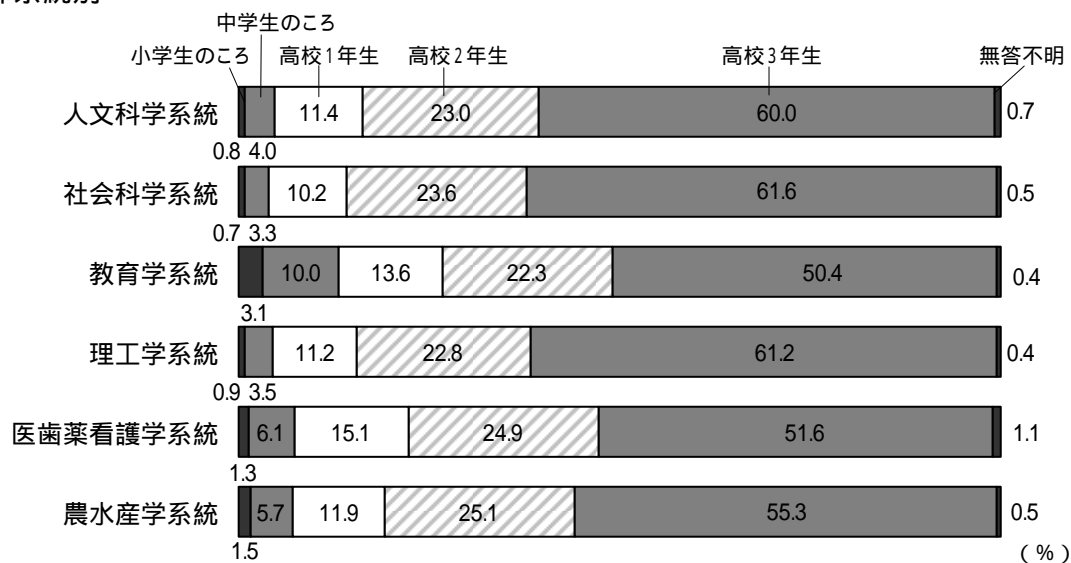
性別・文理別



\* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

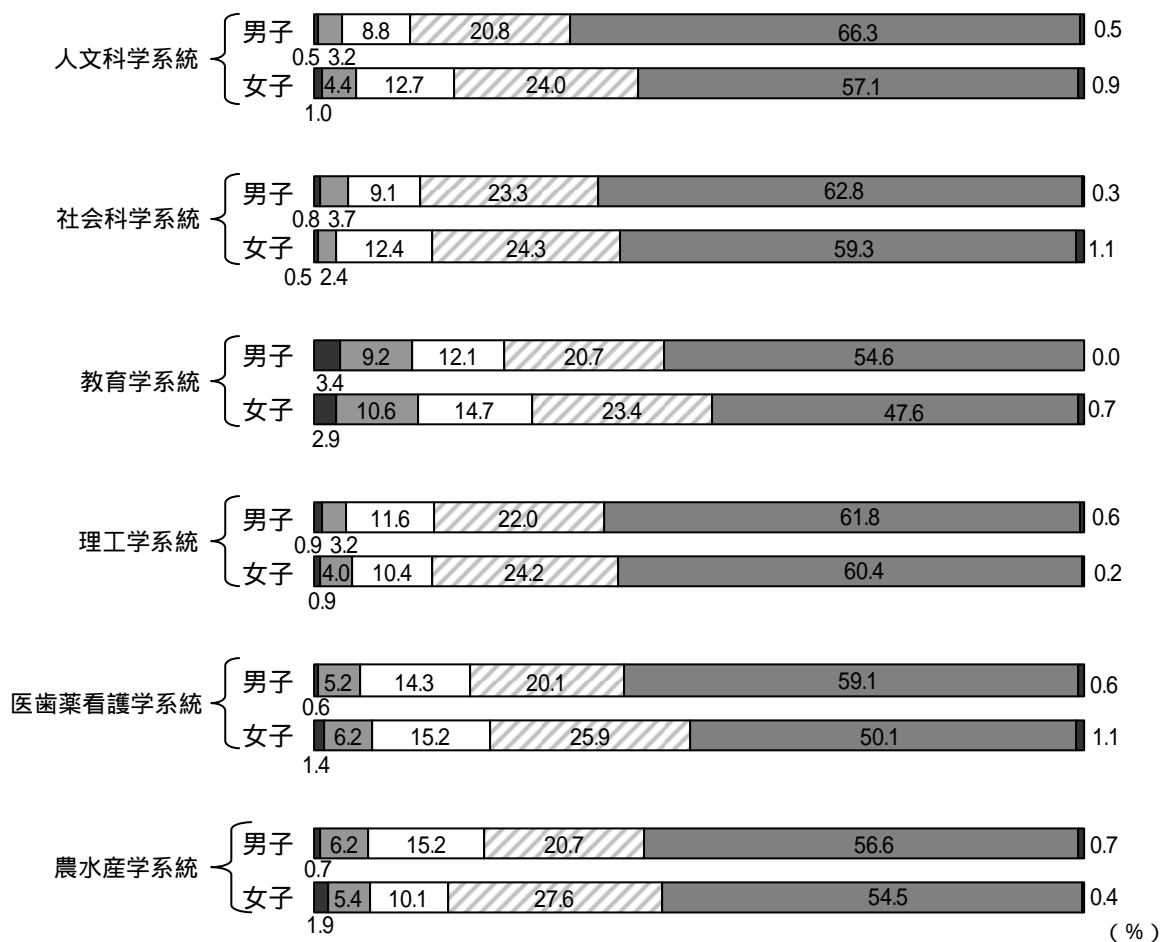
図3-1-9 進学する大学を意識した時期（続き）

学部系統別



\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

学部系統別・性別



\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

次に、進学する大学を意識した時期と高校時代の進路変更の有無には、どのような関係があるのだろうか。図3-1-10は、大学を意識した時期を「小・中学校時代」「高校1～2年生」「高校3年生以後」にわけ、それぞれについて進路変更の有無をみたものである。ここからは、両者にほとんど関連がないことがわかる。先にみたように、文系・理系や大学の専攻分野は、早く意識するほど進路変更が少なく、遅い者は進路変更したケースが多いという傾向がみられた。しかし、大学を意識した時期については同じ傾向は表れていない。

それでは、進学する大学を意識した時期が遅い者は、進路選択の悩みをあまりもっていないのだろうか。この点を確認するために、大学を意識した時期の違いにより「進路を選択するときの悩み」がどのように異なるかを、図3-1-11に示した。これをみると、やはり「自分の適性（向き不向き）がわからないこと」「自分の就きたい職業がわからないこと」「自分の進みたい専門分野がわからないこと」の3項目で大きな差が開いている。大学を意識した時期が早いほど、とくに適性や進路についての悩みは小さいようである。ただし、図3-1-7でみたような専攻を意識した時期別ほどの顕著な差ではなかった。

また、図3-1-12では進学する大学を意識した時期ごとに大学進学理由を示したが、「すぐに社会に出るのが不安だから」「周囲の人がみな行くから」などで意識した時期が遅いほど肯定率が高くなる傾向がみられ、逆に「資格や免許を取得したいから」は低くなる傾向がみられた。専攻分野を意識した時期と同様に（図3-1-8参照）大学を意識した時期も遅い者ほど、モラトリアム的な傾向が強いことがわかる。

図3-1-10 高校時代の進路変更（進学する大学を意識した時期別）

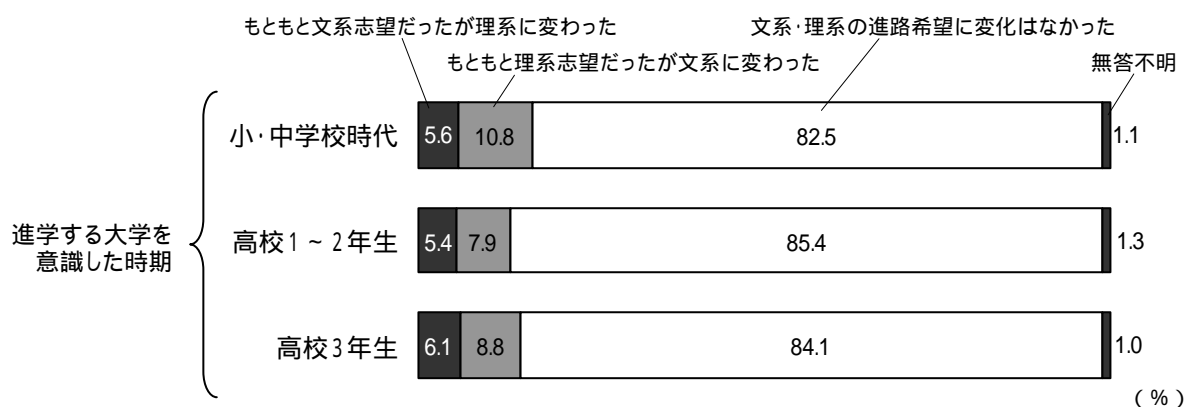


図3 - 1 - 11 進路を選択するときの悩み（進学する大学を意識した時期別）

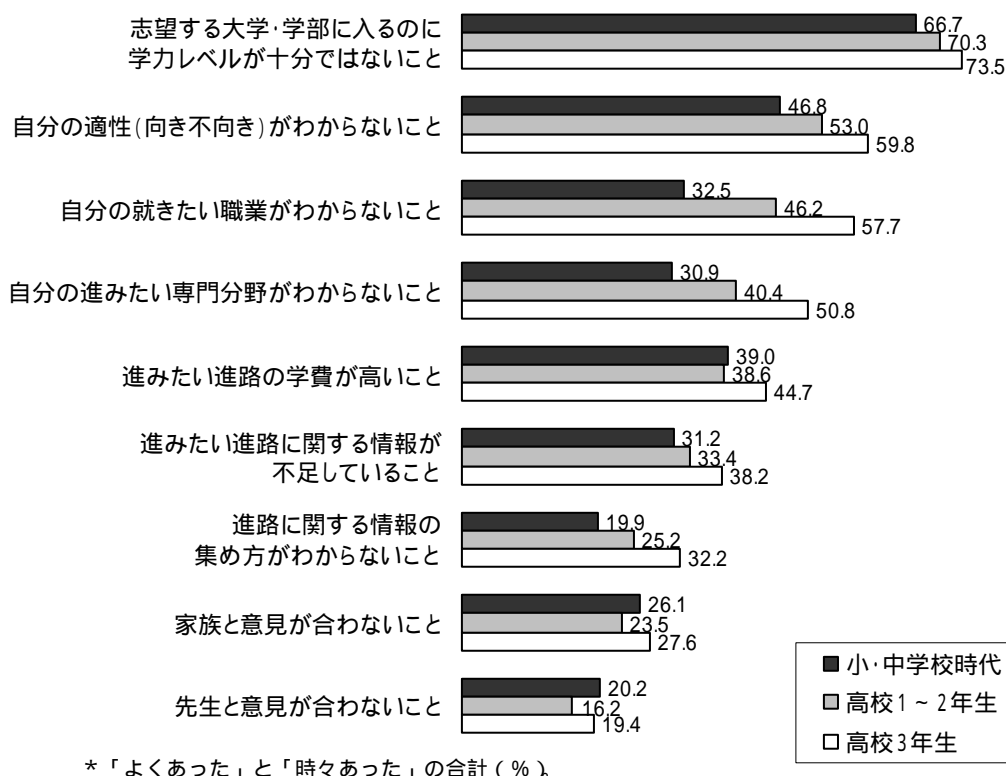
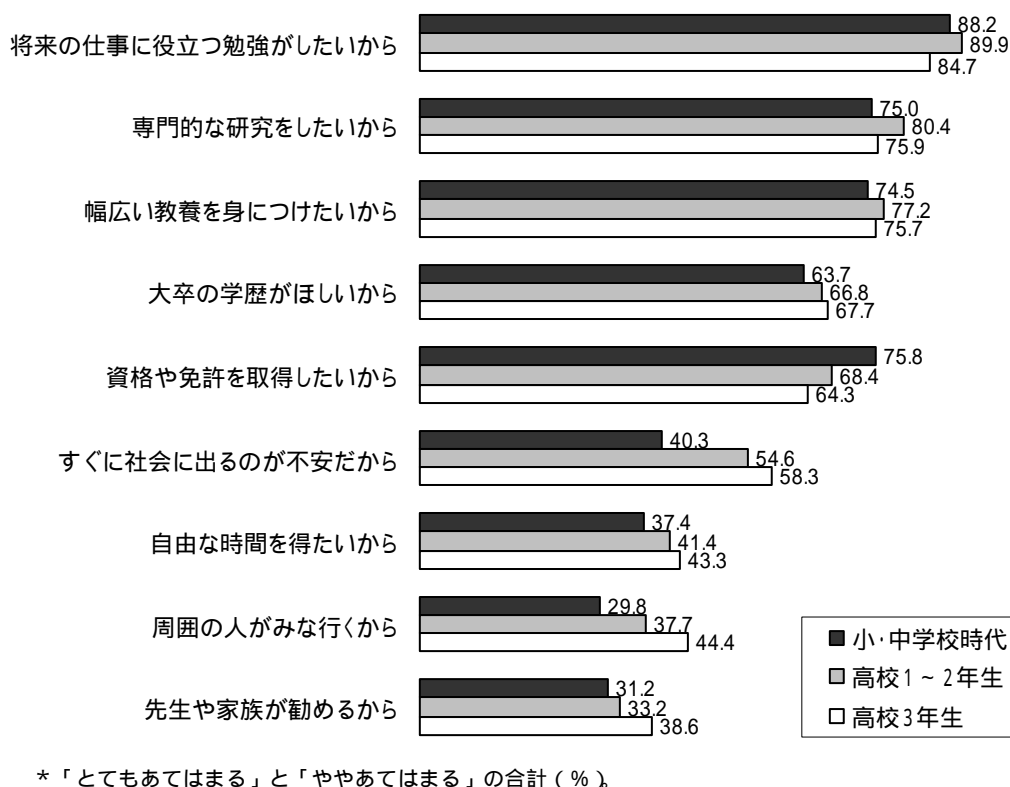


図3 - 1 - 12 大学進学理由（進学する大学を意識した時期別）



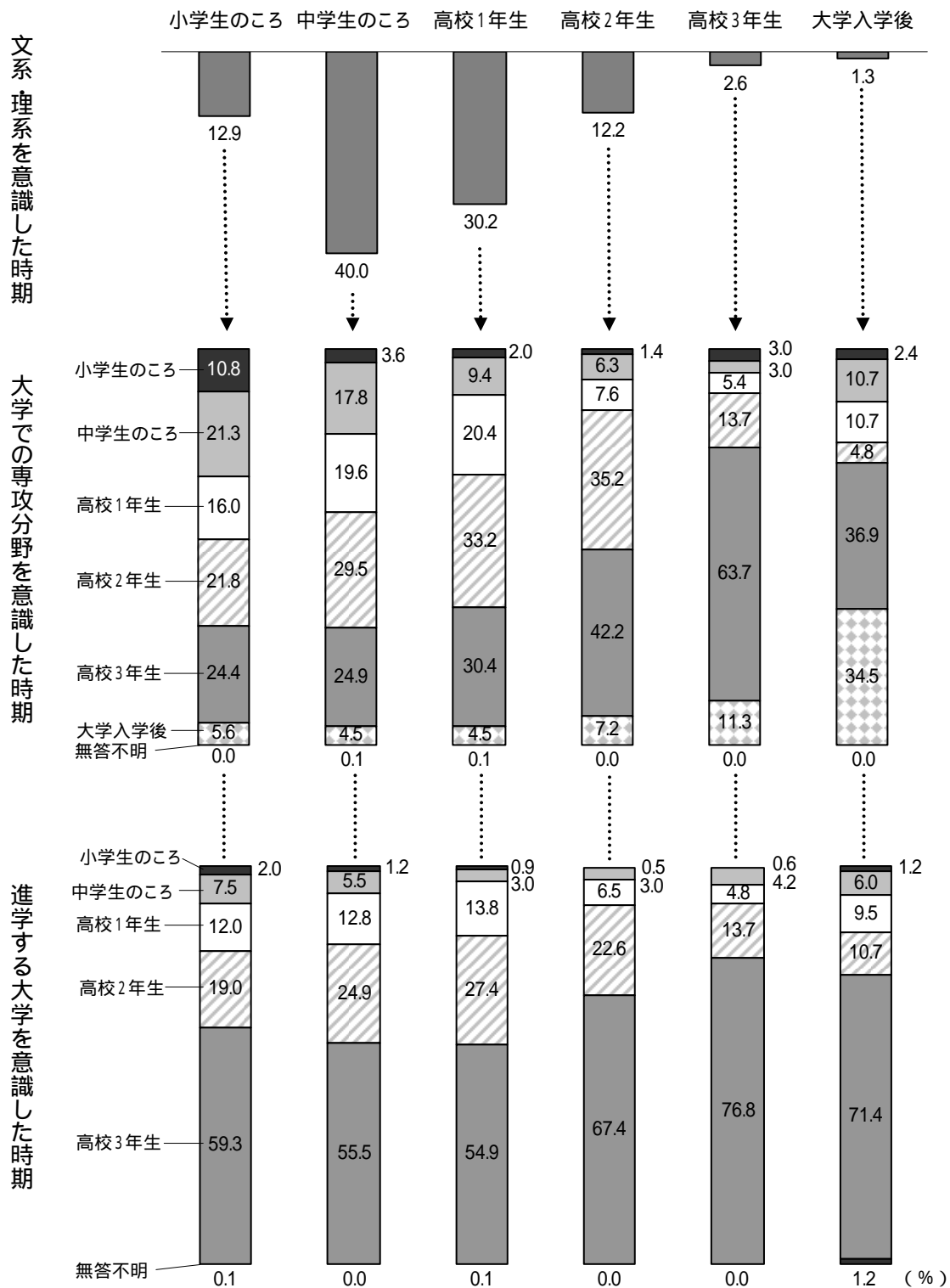
#### (4) 文系 - 理系の意識、専攻分野の意識、大学の意識の関係

以上のように、文系 - 理系を意識した時期、大学での専攻分野を意識した時期、進学する大学を意識した時期ともに、それらが遅い者ほど自分の適性や進路に対して悩みを抱えており、ときとしてそれが進路変更につながっていることが示唆された。それでは、この3つの進路選択の時期は、それぞれどのように関係しているのだろうか。その点を確認するために、文系 - 理系を意識した時期ごとに、大学で専攻分野や進学する大学を意識した時期についてまとめたものを、**図3 - 1 - 13**に示した。

図をみると、3つの進路選択の時期には、関連があることがわかる。文系 - 理系を意識した時期が早い者は、大学での専攻分野を意識した時期も、進学する大学を意識する時期もともに早期であり、遅い者はその後の進路選択も相対的に遅い。これは、進路選択の各段階において比較的早期に意識する学生と、さまざまな決定を先延ばしにしやすい学生が存在することが示唆する。

先にみたように、進路を意識する時期が遅い者は、自分の適性や進みたい専門分野、職業などに関する悩みが多くなりがちであった。こうしたことは、本人の適性・能力と進路に不適合を起こす可能性にもつながり、それは高校時代の進路変更の多さにも表れていた。したがって、進路に関する意識が遅くなりがちな生徒を生まないように、適切な時期に自らの適性や進路（大学での専攻や職業など）を意識させる機会を提供する仕組みづくりが必要になると考えられる。

図3 - 1 - 13 進路選択の時期



\* 文系・理系を意識した時期で「無答不明」の者は、図から省略した。

### (5) 職業についての意識

これまで大学の決定までの選択過程を概観してきたが、それでは大学卒業後の職業についてはどの時期に意識しているのだろうか。

図3-1-14 では対象者全体の数値を示しているが、選択肢のなかでもっとも回答が多かったのは「まだ考えていない」(19.1%)であった。小・中学校時代(「小学生のころ」「中学生のころ」の合計)が24.8%、高校時代(「高校1年生」「高校2年生」「高校3年生」の合計)が29.9%、大学入学後(「大学1年生」「大学2年生」「大学3年生」「大学4年生」の合計)が25.0%となっており、回答がほぼ四分される結果となっている。

図3-1-14 では、性別による違いを示した。これによると、女子のほうが職業を意識した時期が早い傾向がみられた。とくに、小・中学校時代(「小学生のころ」「中学生のころ」の合計)に差があり、男子19.3%に対して女子29.1%となっている。

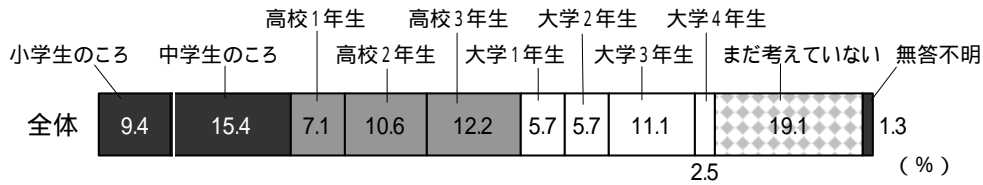
続けて、図3-1-14 では、文系と理系の違いを示した。これをみると、理系のほうが職業を早く意識している様子が表れている。差が大きいのは高校時代(「高校1年生」「高校2年生」「高校3年生」の合計)を選択する比率で、文系学生25.5%に対して理系学生32.8%となっている。文系学生は、大学時代に意識する比率が高い。

この状況を詳しくみるために、性ごとに文系と理系の違いを示した(図3-1-14)。ここからは、女子の理系学生がもっとも早期に職業を意識している様子がみてとれる。女子の理系学生は、3割以上が小・中学校時代に職業を意識している。これに対して、男子は意識する時期が総じて遅い。とくに、男子の理系学生は「まだ考えていない」(25.8%)という回答が多く、職業の選択を先延ばしにしている傾向が表れている。これは、男子の理系学生が、大学卒業後に大学院に進学する比率が高いためかもしれない。

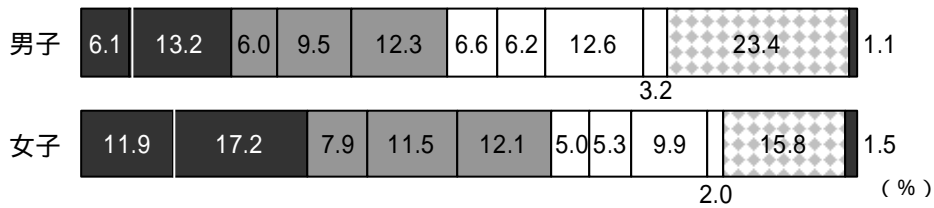


図3 - 1 - 14 職業を意識した時期

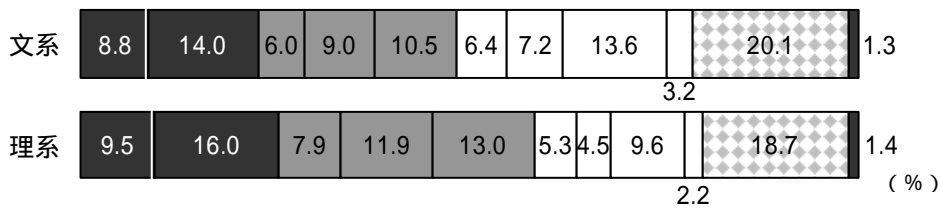
全体



性別

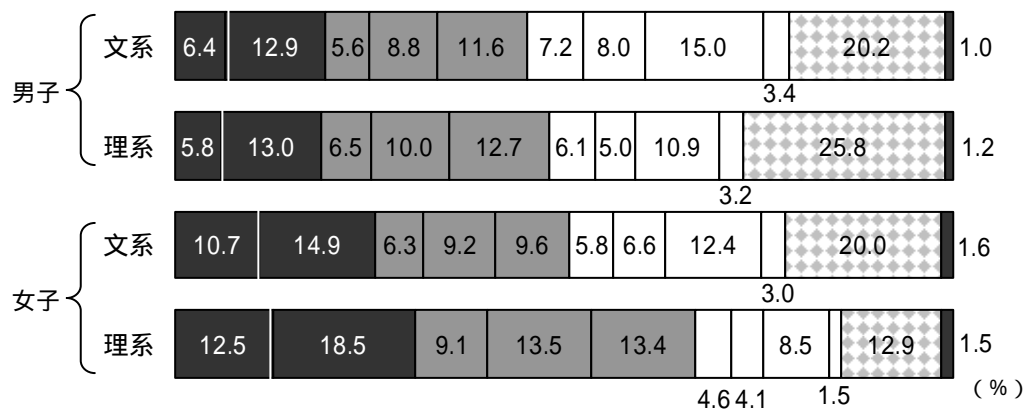


文理別



\* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

性別・文理別



\* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

それでは、職業を意識した時期は、進学した学部系統によって異なるのだろうか。図3 - 1 - 14 に示したとおり、学部系統によってかなり顕著な特徴が表れた。職業を早期に意識するのは、教育学系統と医歯薬看護学系統で、この2系統は他の学部系統とは様相が異なる。「小・中学校時代」に意識した比率（「小学生のころ」「中学生のころ」の合計）は4割程度、「高校時代」を含めると教育学系統で75.9%（「小学生のころ」から「高校3年生」までの合計）、医歯薬看護学系統では87.7%となっている。この2系統に進学した学生の7～8割は、大学入学前に職業を意識していることがわかる。これらの学部系統は、具体的な職業を意識しやすく実学的な教育課程であるためだと考えられる。

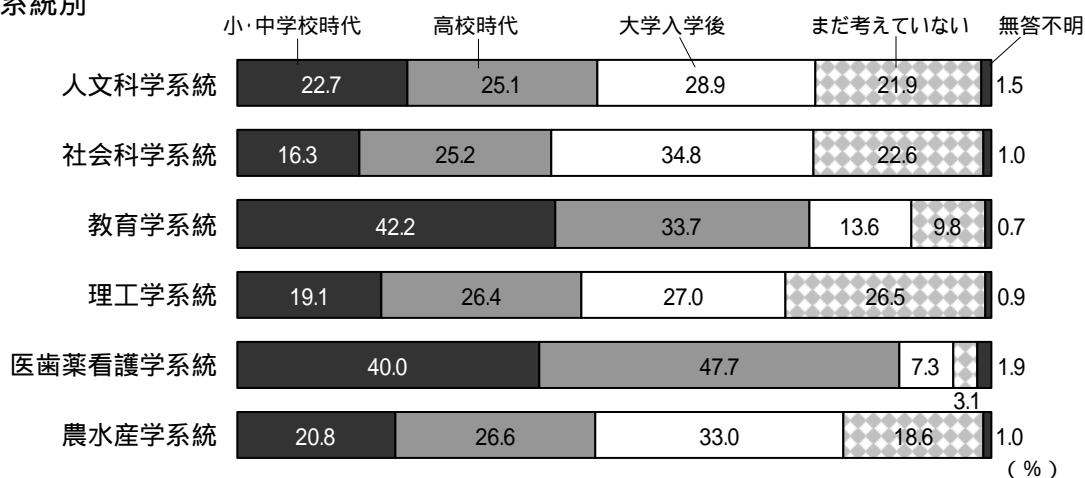
反対に、これ以外の学部系統では、「大学入学後」や「まだ考えていない」を選択する者が多い。人文科学系統、社会科学系統、理工学系統、農水産学系統では、大学在学中に具体的な職業を決定する学生が多いことがわかる。その意味では、この4学部系統の学生に対してはとくに、職業選択を円滑に進めるための支援が欠かせないといえる。

こうした状況をさらに詳しくみるために、図3 - 1 - 14 で学部系統ごとに性による違いも表した。これをみると、性差が顕著なのは医歯薬看護学系統で、この系統では「小・中学校時代」を選択する比率が、男子23.4%に対して女子43.3%と20ポイント近く開いている。この学部系統には、昔から女子に人気の職業である看護師や近年人気が高まっている薬剤師などの資格・免許が取得できる学部が含まれており、こうした職業を早い段階で意識した女子が初志を貫いて入学している様子が示されている。

これ以外の学部系統でも女子が早く職業を意識する傾向が示されているものの、差の程度は医歯薬看護学系統ほどではない。

図3-1-14 職業を意識した時期（続き）

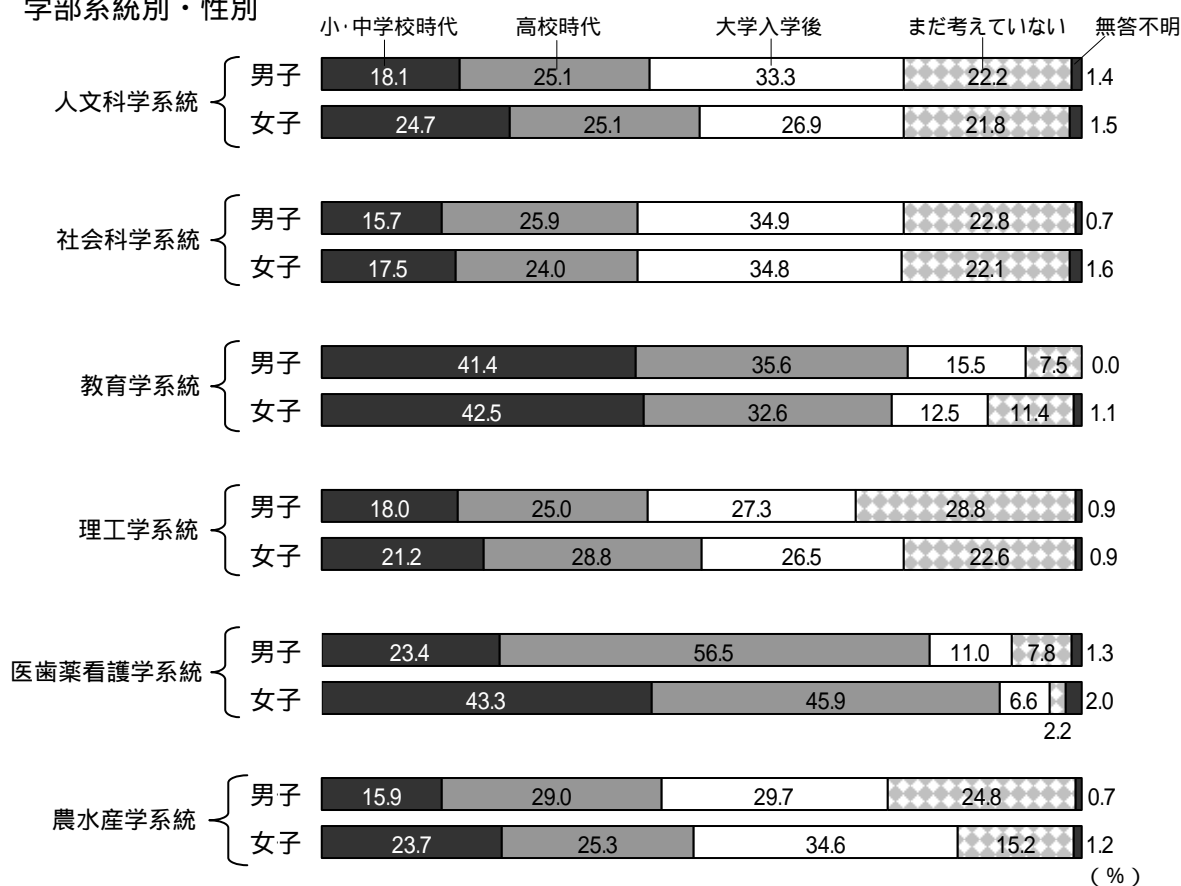
学部系統別



\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

\* 「小・中学校時代」は「小学生のころ」「中学生のころ」を、「高校時代」は「高校1年生」「高校2年生」「高校3年生」を、「大学入学後」は「大学1年生」「大学2年生」「大学3年生」「大学4年生」を選択した者を示す。

学部系統別・性別



\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

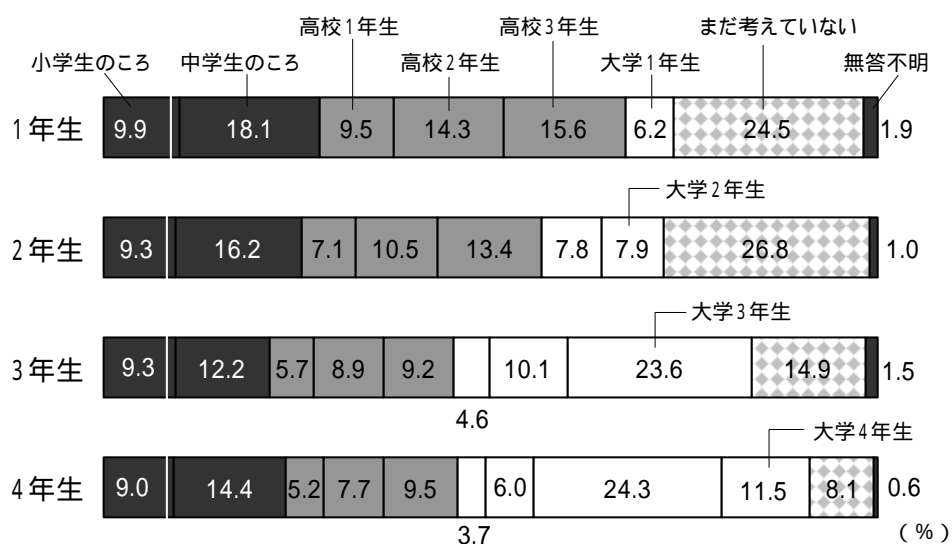
\* 「小・中学校時代」は「小学生のころ」「中学生のころ」を、「高校時代」は「高校1年生」「高校2年生」「高校3年生」を、「大学入学後」は「大学1年生」「大学2年生」「大学3年生」「大学4年生」を選択した者を示す。

さらに、いつ職業を意識したかについて、**図3 - 1 - 15**で学年別の推移を示した。これを見ると、大学1年生は高校時代（「高校1年生」「高校2年生」「高校3年生」）を選択する比率が高い。「高校3年生」までの累積比率は67.4%になっており、7割弱が大学入学前に職業を意識したと回答している。大学2年生は、「大学2年生」を選択する学生がいる分だけ「高校3年生」までの累積比率が低くなっているが、傾向としては同様である。いずれにしても、大学入学前の段階で職業について意識する機会をもつ学生は、半数以上いることが確認できる。

ところが、大学3年生と4年生は異なる特徴を示す。大学3年生以上は、およそ4人に1人の割合で「大学3年生」を選択している。その結果、大学入学以前に職業を意識したとする回答が相対的に低下する傾向がみられた。同時に、「まだ考えていない」とする回答も大学3年生、4年生では低い比率となり、大学時代を選択する学生が多数を占める結果となった。

大学3年生以上の学生は、就職を本格的に考えることで、大学入学までに抱いていた理想と現実的な職業選択の間にギャップを感じ、職業について再考するケースが多いことを示唆している。専門教育を受けたあとに適性や進路を考え直したり、就職活動を通して希望する業種や職種を変更したりといったことが多いのだろうと推察される。

図3 - 1 - 15 職業を意識した時期（学年別）



ここでも、職業を意識した時期と高校時代の進路変更の有無には、どのような関係があるのかを確認しよう。図3-1-16は、職業を意識した時期を「小・中学校時代」「高校時代」「大学入学後」「まだ考えていない」にわけ、それぞれについて進路変更の有無をみたものである。ここからは、小・中学校時代に職業を意識した学生に、わずかに進路変更者が少ない様子がみられるが、両者にはほとんど関連がないといってもいいだろう。

それでは、職業を意識した時期が遅い者は、高校時代に進路選択の悩みをあまり経験しなかったのだろうか。この点を確認するために、職業を意識した時期の違いにより「進路を選択するときの悩み」がどのように異なるかを、図3-1-17に示した。これをみると、「自分の適性（向き不向き）がわからないこと」「自分の就きたい職業がわからないこと」「自分の進みたい専門分野がわからないこと」の3項目で大きな差が開いている。この傾向は、文系・理系、大学での専攻分野、進学する大学などを意識した時期が早いかどうかによって生じていた傾向と同じである。進路の決定に迷い、決断が遅れているものほど、自分の適性理解が十分でなく、大学での専攻分野や職業についての理解も得られていないということだろう。

また、図3-1-18では職業を意識した時期ごとに大学進学理由を示したが、職業についてじっくり考えることを先延ばししている学生ほど、「すぐに社会に出るのが不安だから」「自由な時間を得たいから」「周囲の人がみな行くから」「先生や家族が勧めるから」といった項目に対して「あてはまる」「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計。）と回答している。職業を意識したうえでの大学進学でない場合、他律的な動機による進学が多くなり、モラトリアム的な傾向を強めるためであろう。

図3-1-16 高校時代の進路変更（職業を意識した時期別）

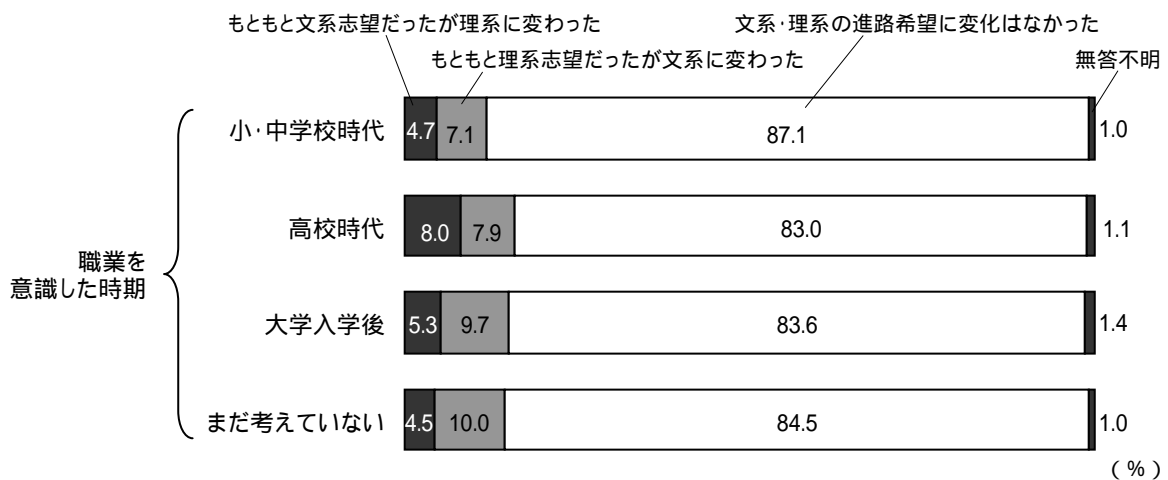
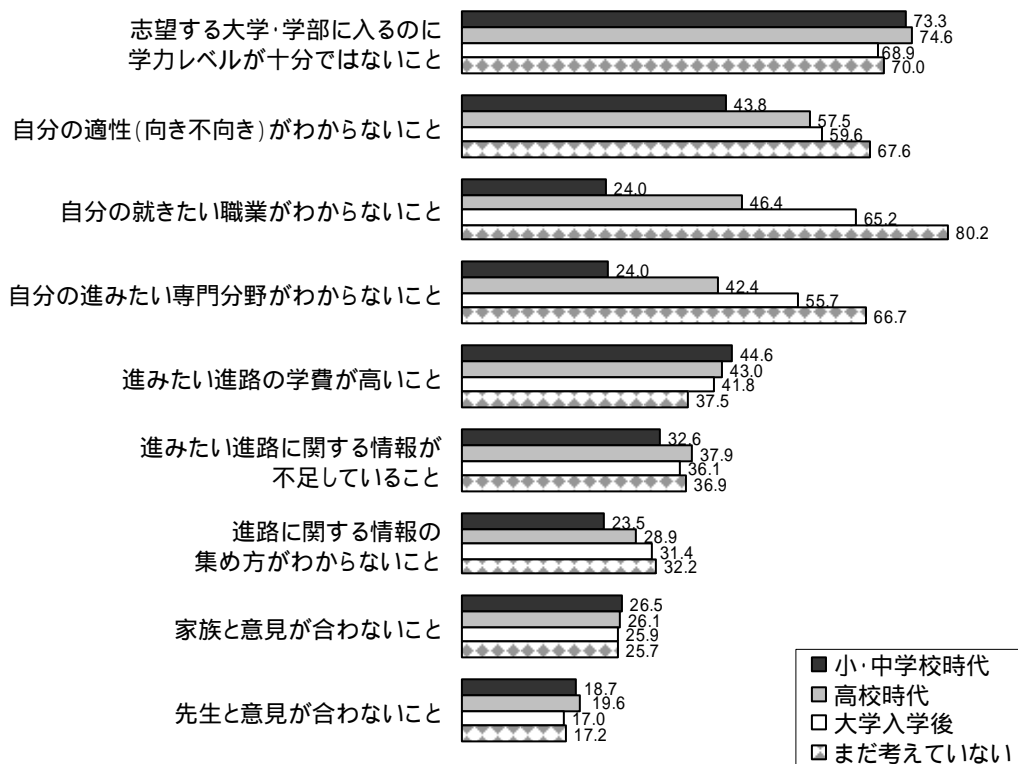
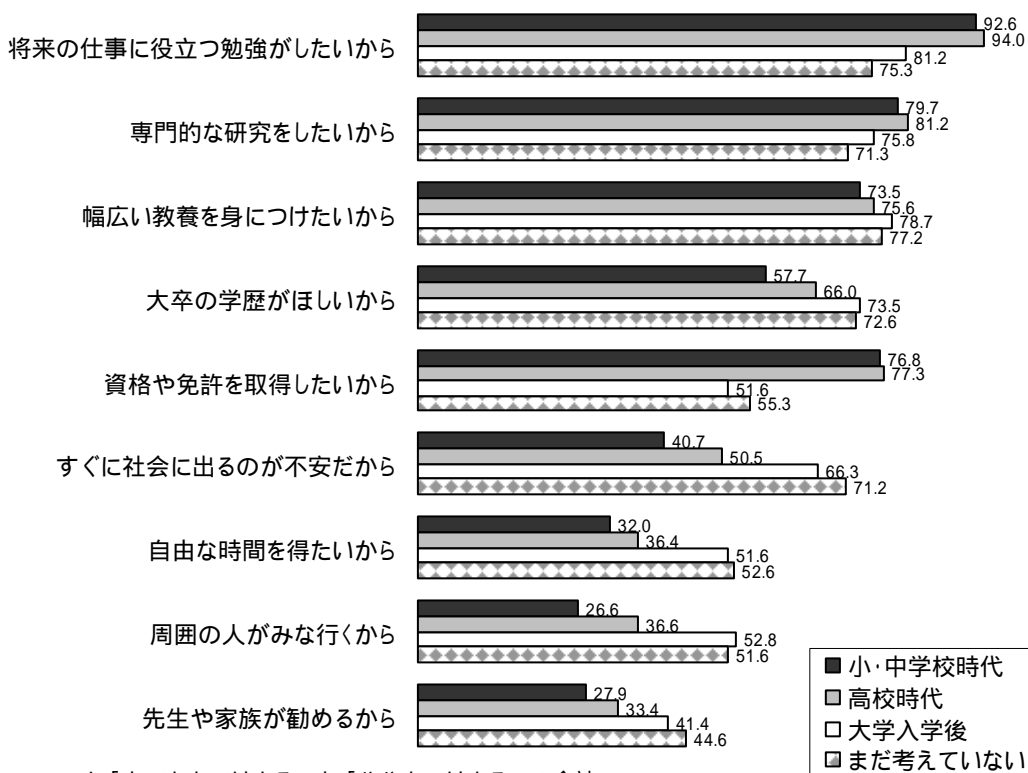


図3 - 1 - 17 進路を選択するときの悩み（職業を意識した時期別）



\* 「よくあった」と「時々あった」の合計(%)。

図3 - 1 - 18 大学進学理由（職業を意識した時期別）

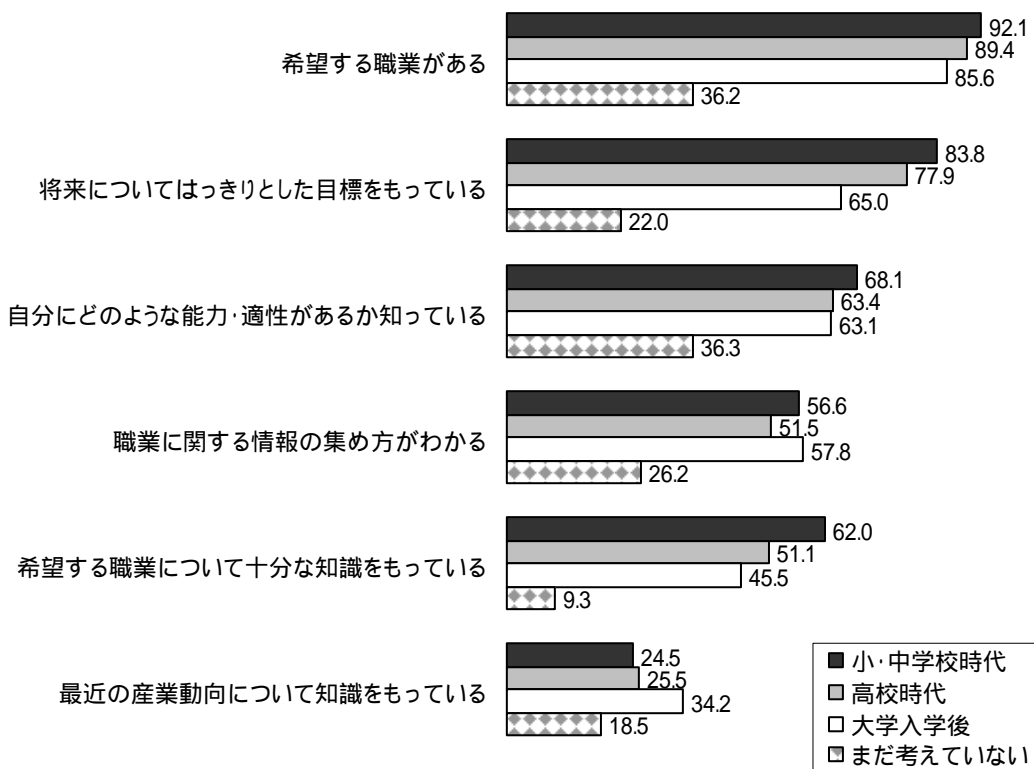


\* 「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計。

さらにここでは、職業について意識した時期と現在の「職業に関する意識」の関連をみてみよう。なお、職業に関する意識については本章の3節で扱うので、詳細については図3-3-11以降を参照していただきたい。

さて、図3-1-19に示したように、職業に関する意識は、職業について「まだ考えていない」と回答した学生がいずれの項目でも低い結果を示している。先に述べたように、「まだ考えていない」学生は大学1～2年生に多いので、その点を考慮しなければならないが、その点を差し引いてもはっきりした格差が開いている。続けて、「小・中学校時代」「高校時代」「大学入学後」の違いをみると、「将来についてはっきりとした目標をもっている」「希望する職業について十分な知識をもっている」の2項目で差が開いており、いずれも早期に職業を意識した学生のほうが「あてはまる」と回答している。ただし、これらの学生はいずれも、「まだ考えていない」と回答した学生よりも高い肯定率になっていて、職業について考えることで目標設定や自己理解、情報収集活動などが促進されるものと考えられる。

図3-1-19 職業に関する意識（職業を意識した時期別）



\* 「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計(%)。

## (6) 進路選択の時期のパターン

本節の最後に、進路選択の時期をパターン化してまとめよう。文系 - 理系を意識した時期、大学での専攻分野を意識した時期、どの大学に進学するかを意識した時期、どのような職業に就くかを意識した時期のそれぞれについて、学部系統別・性別に平均値を算出した。なお、ここでは、大部分の学生が就職までの進路選択を終えている4年生に限って分析の対象とした。

その結果が、**図3 - 1 - 20**(次頁)である。ここからは、大きく分けて2つのパターンがみられた。

一つ目は、「文系 - 理系 職業 専攻分野 進学する大学」の順で意識し、かつ、文系 - 理系を意識しはじめてから大学を意識するまでの期間が3か年以内に終了するパターンである。職業に対する意識が14~15歳という早期に出現し、その後に大学進学について考えるという流れになっている。このパターンは、教育学系統(男子・女子)と女子の医歯薬看護学系統でみられた。これらの学部系統は、教員、医師、看護師などの具体的な職業と結びつきやすいため、共通する傾向になったと考えられる。これらの学部では、先行して意識された職業に必要な能力や適性をいかに身につけていくかが、学生にとって大きな課題となる。

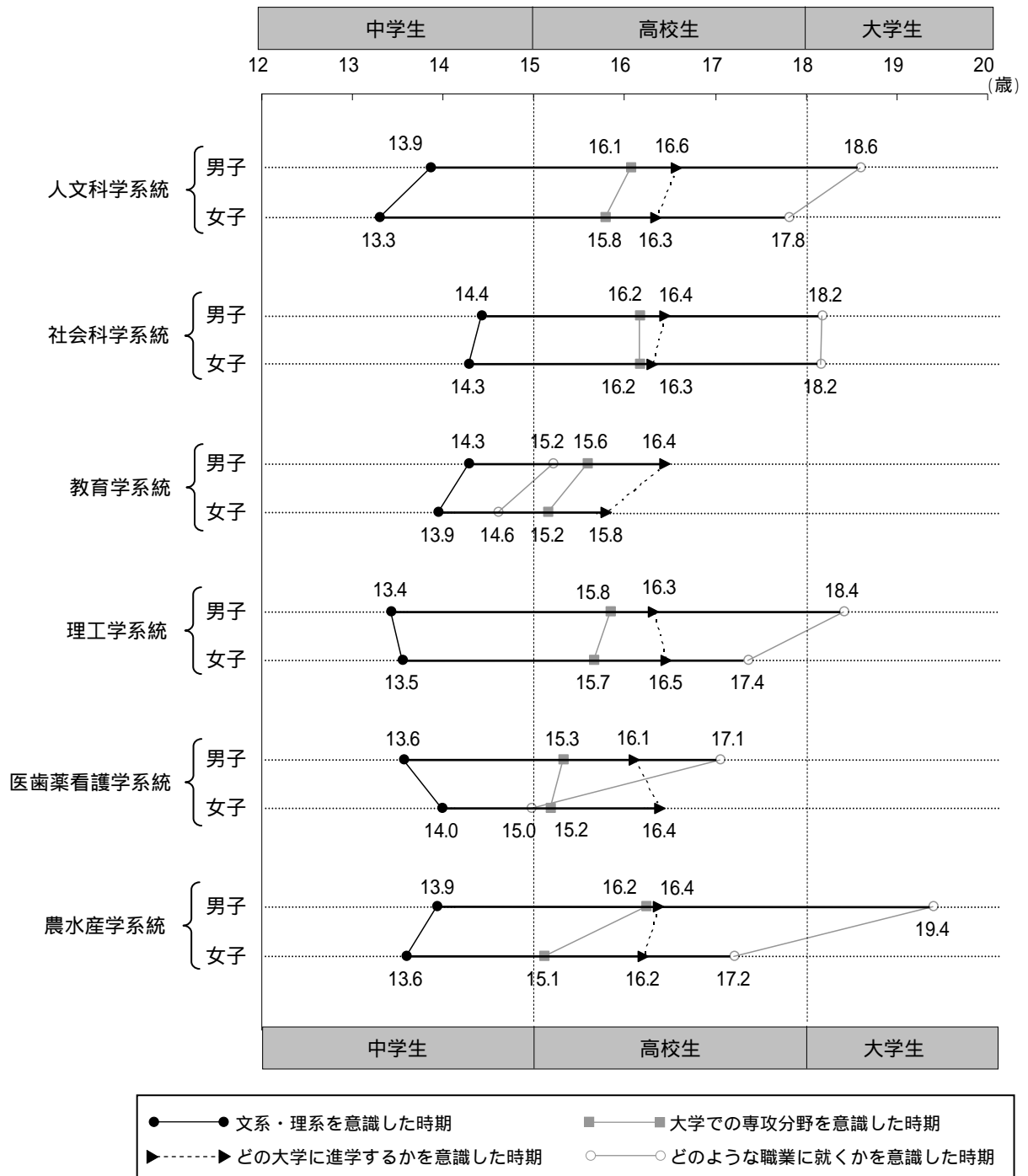
もう一つは「文系 - 理系 専攻分野 進学する大学 職業」の順で意識し、文系 - 理系を意識しはじめてから職業を意識するまでの期間が3~5か年程度と、比較的長期にわたるパターンである。文系 - 理系や専攻したい学問といった自分の好みや適性が先に意識され、その後に大学進学や就職を考えるという流れになっている。人文科学系統、社会科学系統、理工学系統、農水産学系統の男子・女子、および医歯薬看護学系統の男子がこれに該当する。これらの学部では、先行して意識された好みや適性をどのように職業と結びつけていくかが、学生にとっての課題となろう。

さらに詳しく選択時期の特徴をみていくと、文系 - 理系の意識は多くの学部系統で中学2年生(13~14歳の間)ごろが平均値となっているが、社会科学系統はやや遅めであった。また専攻分野や進学する大学は、いずれの学部系統でも高校1~2年生(15~17歳の間)ごろが平均値になっている。しかし、職業を意識する時期は学部系統によって違いがみられ、とくに人文科学系統(男子)、社会科学系統(男子・女子)、理工学系統(男子)、農水産学系統(男子)で遅い傾向があった。

また、それぞれを意識した期間に注目すると、農水産学系統に進学した男子が5.5年と長く、次いで理工学系統の男子が5.0年となっている。この両学部は比較的早い段階で文系 - 理系を意識しているが、職業に就く時期を意識するのは遅い。本節で確認してきたように、早期に進路に関する意識を持たせることは、その後の進路への適応を考えると望ましいと考えられる。学生のなかには、比較的長い期間をかけて進路を意識し、具体的な決定をしていく者もあり、中学校から大学にかけての長い視点でキャリア形成を支援できる体制が望まれよう。



図3 - 1 - 20 進路選択の時期（4年生、学部系統別・性別）



\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。  
 \* 年齢の平均値は、「小学生のころ」を10歳、「中学生のころ」を13歳、「高校1年生」を15歳のように数値を割り当てて計算した。「文系・理系を意識した時期」および「大学での専攻分野を意識した時期」の「大学入学以後」は19歳、「どのような職業につくかを意識した時期」の「まだ考えていない」は23歳とした。  
 \* 数値は、4年生のものである。

## 2. 適切だと思う進路選択の時期

前節までは、大学生自身の経験に基づいた進路選択の時期を確認した。この節では、大学生がこれまでに経験してきた進路選択を踏まえて、文系 - 理系の選択や学部・学科の選択をどれくらいの時期に行うのが適切だと考えているのかについて検証する。

### (1) 文系 - 理系の選択時期

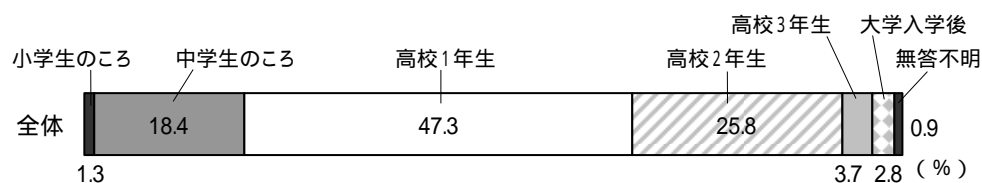
では最初に、大学生は、文系 - 理系の選択をどの段階で行うのがよいと考えているのかという点を確認していこう。**図3 - 2 - 1** は、対象者全体の数値を示した結果である。これを見ると、「高校1年生」(47.3%)という回答がもっとも多く、半数弱がこれを選択している。次に多いのが「高校2年生」(25.8%)であり、あわせると7割が高校1～2年生の段階での選択が望ましいと考えている。小・中学校時代を選択している学生が2割弱いるが、「高校3年生」や「大学入学後」といった回答は少ない。現在行われている高校の進路指導でも、多くの学校が高校1年生において文理選択を指導している。この背景を勘案すると、大学生は現在の文理選択の時期にほぼ納得できていると解釈できる。

また、**図3 - 2 - 1** では男女の意識の違い、**図3 - 2 - 1** では文系学生と理系学生の意識の違いをみたが、それぞれに大きな差はみられなかった。

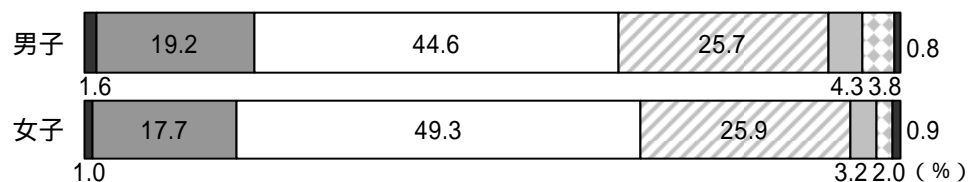
さらに、学部系統による違いを**図3 - 2 - 1** に示した。「高校2年生」以降の回答比率に注目すると、社会科学系統、教育学系統、農水産学系統の比率がやや高い結果となった。しかし、全体に大きな差ではなく、いずれの学部系統も「高校1年生」を中心にして、その前後が選択されている。

図3-2-1 適切だと思う文系・理系選択の時期

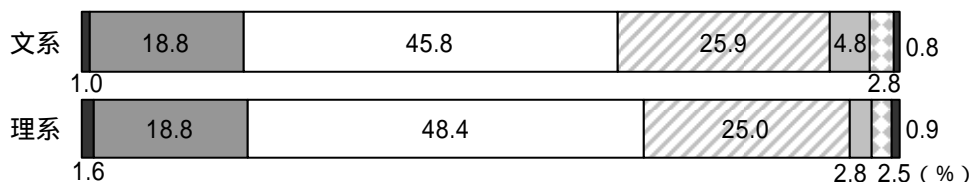
全体



性別

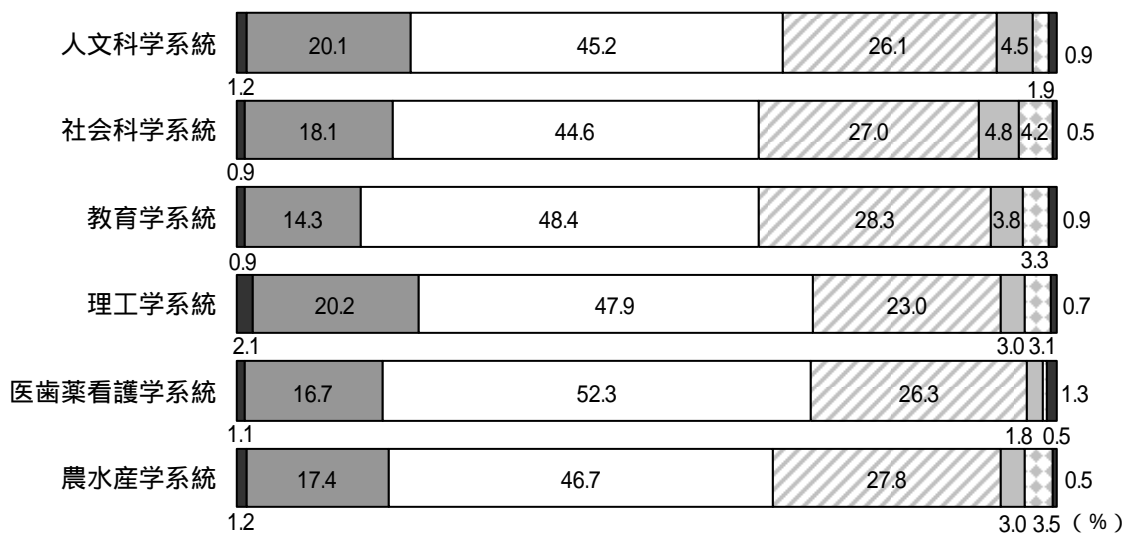


文理別



\* 専攻の文理別について、「文系と理系の間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

学部系統別



\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

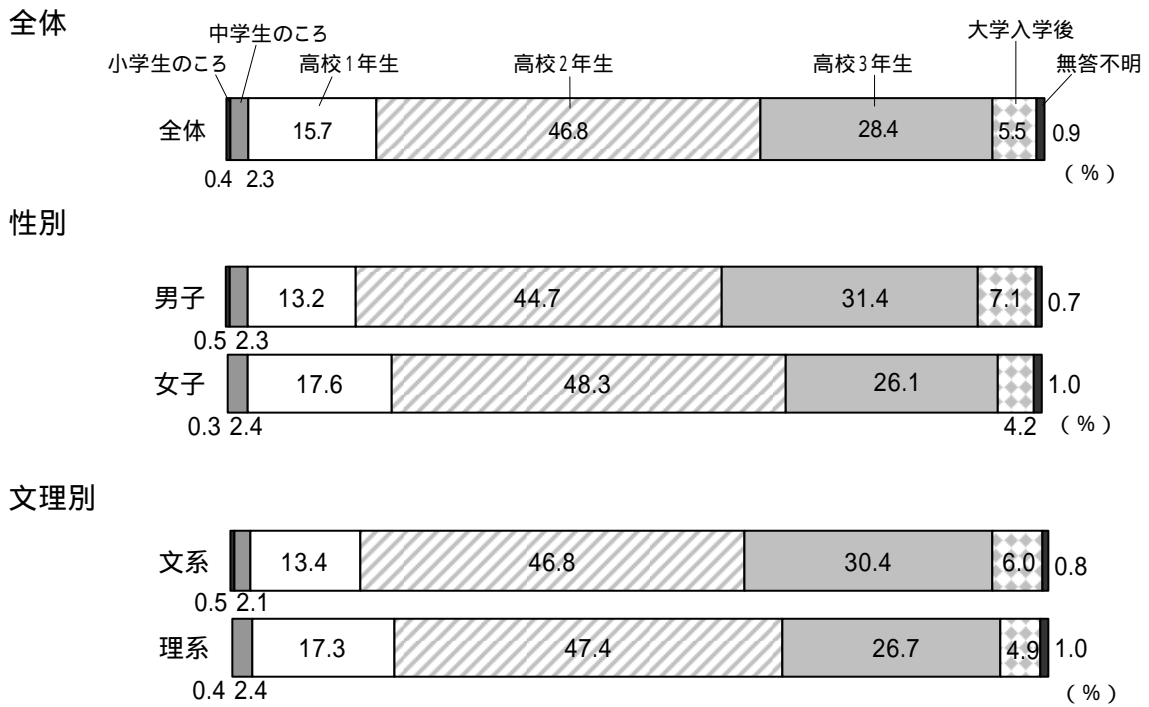
## (2) 学部・学科の選択時期

続いて、学部・学科の選択をどれくらいの時期に行うのがよいと考えるかについてたずねた結果をみていこう。図3-2-2では、調査対象者全体の回答を示している。ここからは、半数近くの学生が「高校2年生」(46.8%)を選択していることがわかる。次に多いのが、「高校3年生」(28.4%)という回答であり、四人に三人の大学生が高校2～3年のころの選択が適切だと考えている。小・中学校時代を選択した学生は少数であり、「高校1年生」(15.7%)という回答もそれほど多くない。「大学入学後」を支持する学生も、5.5%と少ない。多くの高校で学部・学科調べを行うのが「高校2年生」の前後であり、時期が合致していることから、多くの学生は現状を肯定的にとらえている様子がうかがえる。

図3-2-2では、性別での集計結果を示した。これをみると、女子のほうが「高校1年生」「高校2年生」を選択する比率が高い。また、図3-2-2で文系と理系の違いを示したように、理系学生のほうが「高校1年生」を選択する比率が高かった。このように、女子や理系学生は、比較的早期に学部・学科選択を行うのが適切と考える傾向にあるが、これは学部系統ごとの結果から解釈できる。

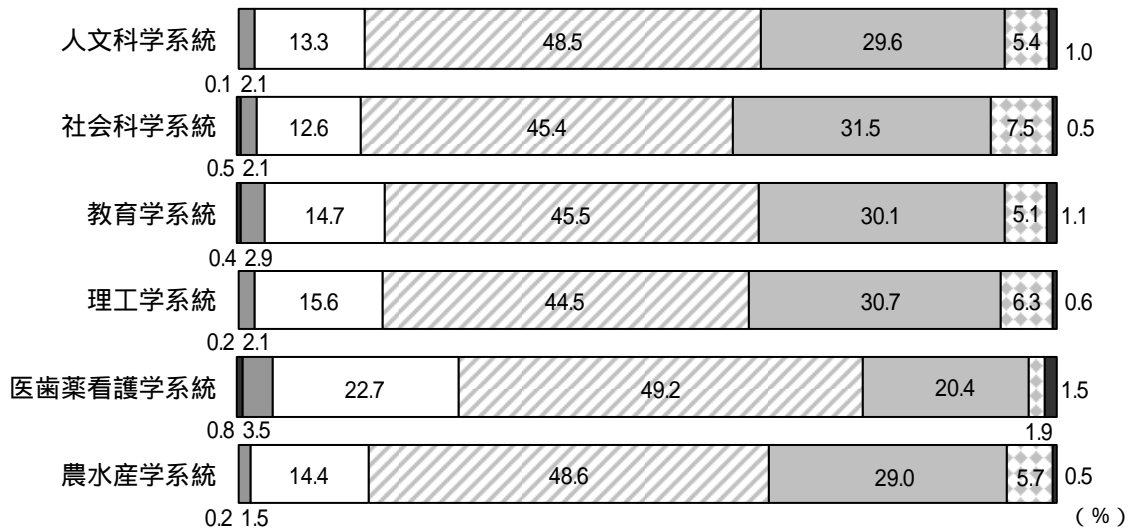
図3-2-2に学部系統ごとの集計結果を示したが、医歯薬看護学系統に進学した学生は、相対的に「高校1年生」「高校2年生」を選択する比率が高く、「高校3年生」が低くなっている。この学部系統には、女子の理系学生が多いため、上述したような性別、文理別の特徴が現れたのだろう。なお、これ以外の学部系統では、いずれもほぼ同様の結果を示している。

図3 - 2 - 2 適切だと思う学部・学科選択の時期



\* 専攻の文理別について、「文系と理系の間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

学部系統別



\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

次に、高校時代の進路選択の揺らぎが、適切だと思う文系 - 理系の選択時期や学部・学科の選択時期に影響を与えるのかを検証しよう。ここでは、高校時代に進路変更を経験した学生（「もともと文系志望だったが理系に変わった」「もともと理系志望だったが文系に変わった」と回答した者）と進路変更をしなかった学生とで、数値を比較した。

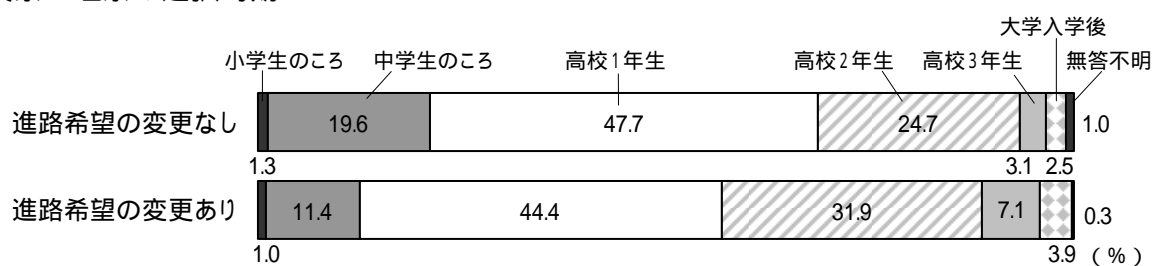
図3 - 2 - 3をみると、「文系 - 理系の選択時期」では、「進路希望の変更あり」に「高校2年生」(31.9%)の回答比率が高い。総じて、進路変更を経験していると、適切だと考える時期が遅くなる傾向がみられるが、進路変更することによって、自分の適性はじっくり考えるべき、決定は先に延ばしたほうがよいといった意識が生じるためだと推察される。

続けて、「学部・学科の選択時期」をみると、こちらも「進路希望の変更あり」の者のほうが、「高校3年生」以降の比率が高まる傾向が読み取れる。ただし、「文系 - 理系の選択時期」で表れていた傾向ほど、顕著な差ではない。

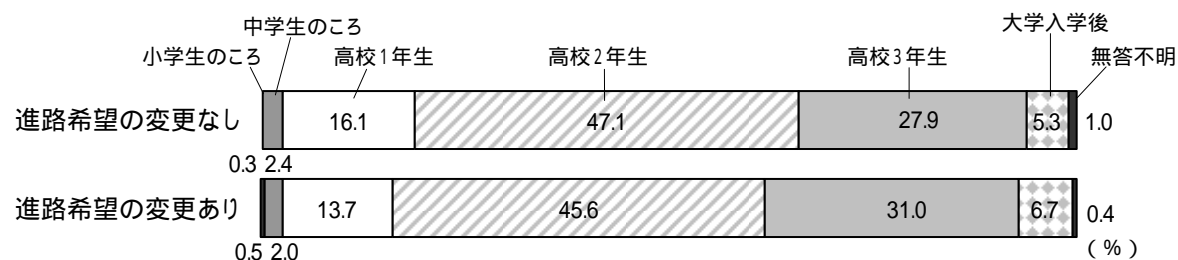
進路変更の有無にかかわらず、文系 - 理系の選択時期は「高校1年生」、学部・学科の選択時期は「高校2年生」を選択する比率が高い。この点を踏まえると、多くの学生は高校1～2年の段階で具体的な決定をしていくのがよいと考えているようである。とはいえ、進路変更を経験した者が適切だと考える進路選択の時期が、やや遅いことも事実である。教育課程や入試制度などシステム面の問題があるため一概には言えないが、高校2年生以降でも無理なく進路選択や進路変更ができる仕組みづくりも重要だと考える。

図3 - 2 - 3 適切だと思う進路選択の時期（高校時代の進路変更別）

#### 文系 - 理系の選択時期



#### 学部・学科の選択時期



\* 「進路希望の変更なし」は高校生生のときの進路変更について「文系・理系の進路希望に変化はなかった」と回答した者、「進路希望の変更あり」は「もともと文系志望だったが理系に変わった」「もともと理系志望だったが文系に変わった」と回答した者を指す。

(3) 大学入学後の専攻分野の変更

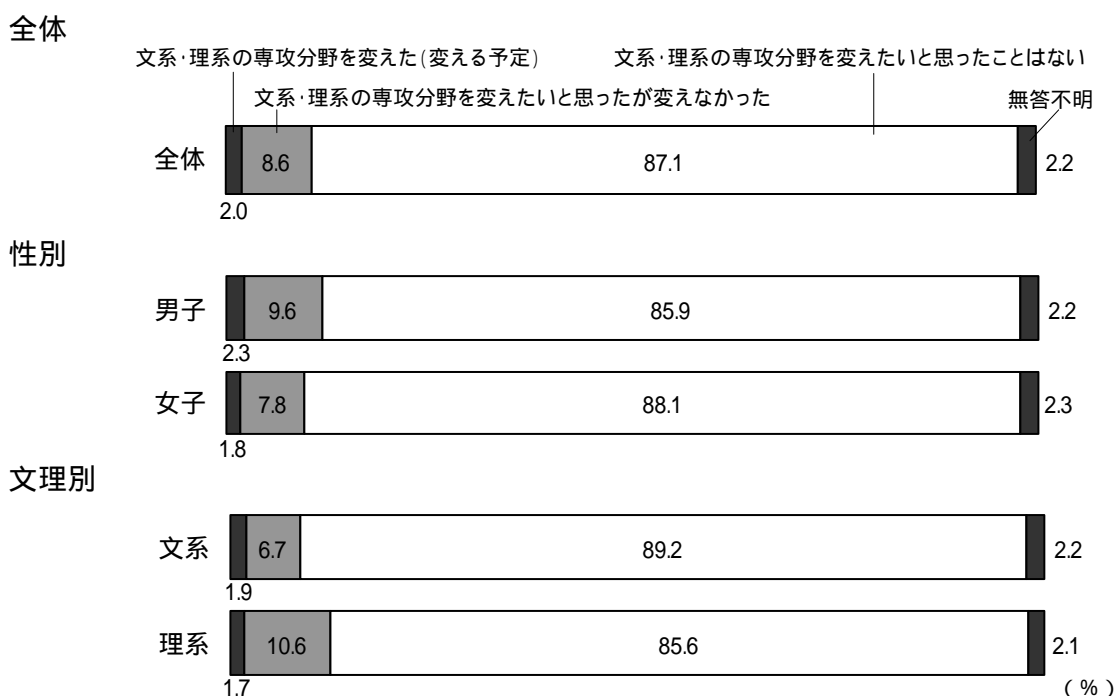
最後に、大学入学後の専攻分野の変更について確認しよう。

大学に進学しようという高校生は、自らの好みや適性、将来の目標などを考慮して文系・理系や専攻分野、進学する大学などを選択している。すでに大学に在学する学生は、それらを相応に考えて進学しているはずである。しかし、そうした彼らにも、専攻分野を変えたいという希望があるのだろうか。第1章では、高校時代の進路変更について詳述したが、ここでは大学入学後の進路変更について検討しよう。

まず、対象者全体の結果(図3-2-4)をみてみよう。ここからは、87.1%と大部分の学生が「文系・理系の専攻分野を変えたいと思ったことはない」と回答している。調査対象者のほとんどが、文系・理系に適応しているようである。「文系・理系の専攻分野を変えた(変える予定)」という回答は2.0%に過ぎず、実際に文転・理転を経験する者はかなり少ない。ただし、「文系・理系の専攻分野を変えたいと思ったが変えなかった」という進路変更希望者は1割弱存在し、全体の1割程度は入学後に専攻分野の変更を考えていたことがわかる。

続けて、性別(図3-2-4)による差であるが、男女に大きな差はみられなかった。また、文系・理系の違い(図3-2-4)では、「文系・理系の専攻分野を変えたいと思ったが変えなかった」という回答が、理系学生に若干多かった。

図3-2-4 大学入学後の専攻分野の変更



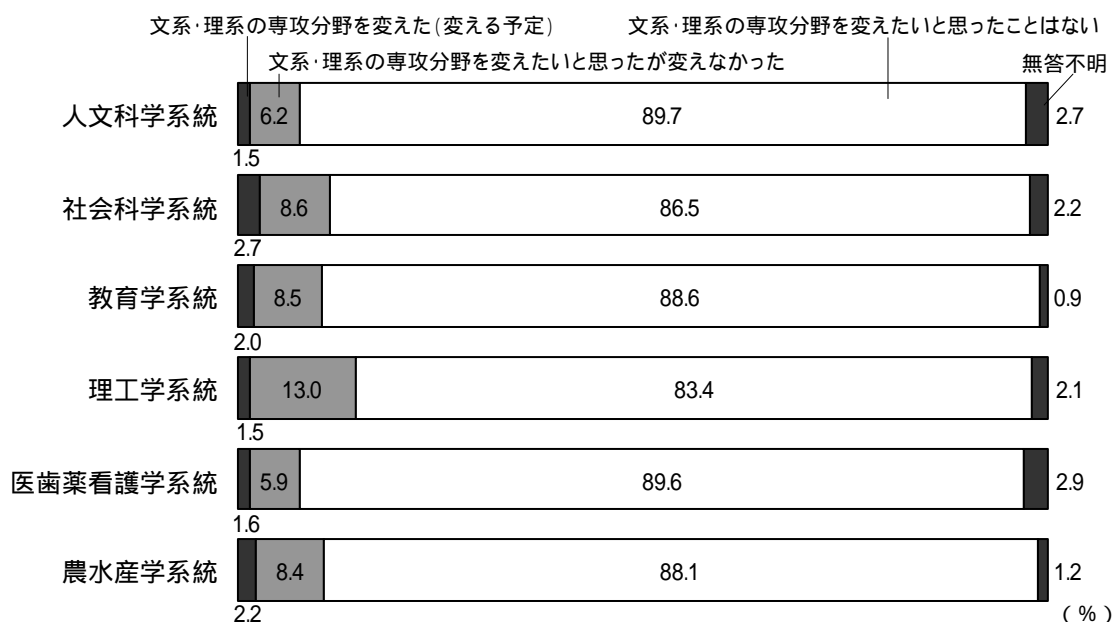
\* 専攻の文理別について、「文系と理系の間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。  
 \* 図 ~ について、「文系・理系の専攻分野を変えた(変える予定)」は「もともと文系だったが理系に変えた(変える予定)」「もともと理系だったが文系に変えた(変える予定)」を選択した者を指す。

さらに、**図3 - 2 - 4** で学部系統別での違いを示したが、ここでは、「文系・理系の専攻分野を変えたいと思ったが変えなかった」という回答が、理工学系統で多いという特徴が現れた。理工学系統には、潜在的な進路変更希望者がわずかに多いようである。

では、高校時代の進路変更と大学での専攻分野の変更はどのような関係にあるのだろうか。この点を確認するために、高校時代の進路変更の有無による差をみたのが、**図3 - 2 - 4** である。ここからは、高校時代に進路変更を経験した者のほうが、大学でも専攻の変更や変更希望が多いことがわかる。進路選択に揺らいでいる学生は、高校、大学を通じて決定しきれない悩みを抱えている可能性がある。

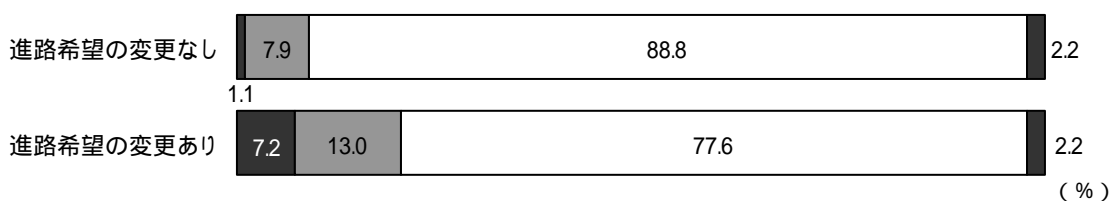
図3 - 2 - 4 大学入学後の専攻分野の変更（続き）

### 学部系統別



\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

### 高校時代の進路変更別



\* 「進路希望の変更なし」は高校生のときの進路変更について「文系・理系の進路希望に変化はなかった」と回答した者、「進路希望の変更あり」は「もともと文系志望だったが理系に変わった」「もともと理系志望だったが文系に変わった」と回答した者を指す。

\* 図 ~ について、「文系・理系の専攻分野を変えた(変える予定)」は「もともと文系だったが理系に変えた(変える予定)」、「もともと理系だったが文系に変えた(変える予定)」を選択した者を指す。



## (4) 専攻分野の変更にあって困難なこと - 自由記述分析

今回の調査では、大学入学後の専攻分野の変更についての質問で、「もともと文系だったが理系に変えた(変える予定)」「もともと理系だったが文系に変えた(変える予定)」「文系・理系の専攻分野を変えようと思ったが変えなかった」のいずれかを選択した学生に対して、専攻を変えたり、変えようと思ったりしたとき、どのようなことが大変だったかを、具体的に書いてもらった。ここでは、その自由記述に対する回答を手がかりにして、大学入学後に進路変更する際の課題や困難について検討したい。

記述があったのは約700件である。これらのうち比較的似ている回答をグループにして、10に類型化した。ただし、自由記述の回答は、通常、複合的な要因が記入されていることが多い。たとえば、理工学系統(3年生、男子)の学生は、大学での進路変更をあきらめた事情について、次のように記述している。

「大学入学前は生物に興味があったが、入学してみると自分の考えていたこと(内容)とは違いショックだった。公務員試験を受けるつもりだったし、また法律に興味があったので専攻を変えようとしたが、学費、生活面、就職、親への負担を考えてあきらめた。」

ここには、進路変更を断念した要因として、経済、生活、就職や親への配慮などが記述されている。このように複数記述されているものについても、ある程度恣意的に分類したことを付言したい。また、明らかな誤字・脱字を除いて、記述は原文を生かした。

それでは、大学入学後の進路変更を困難にする要因として、どのようなことが指摘されているのだろうか。

## 苦手教科の克服、学力不足

まず、回答数としてもっとも多いのは、苦手教科の克服が困難であることや編入試験を受けるに際して学力が不足しているという認識である。この回答は、人文科学系統、社会科学系統などの文系に進んだ学生に多く、理転するにあたって「数学」「化学」「物理」などの学力が不足していることを進路変更が困難な理由としてあげている。このパターンの回答は、理系学生にもみられ、「英語」「国語」や社会の諸科目についての苦手記述されているケースがある。ただし、回答数としては少ない。

また、特定の苦手教科について触れられていなくても、大学を再受験しなければならないことや編入試験を受けなければならないことに対する困難さを記述している学生は、非常に多かった。

- ・理系にしようとする、苦手な物理・数学などをしなければならなかったため。(人文科学系統、女子1年生)
- ・文系から理系に変えたいと思った(文系教科が自分に合わない)けど、化学の勉強が間に合わないという点が大変。(人文科学系統、女子、1年生)
- ・地学、化学が得意で地学分野に進みたかったのだが苦手な数学がどうしても足をひっぱるので断念

せざるをえなかった。(人文科学系統、女子、3年生)

- ・もう一度、受験勉強以上の勉強をしなければいけないこと。(社会科学系統、男子、1年生)
- ・文系から理系に変えて天文学を学びたいと思ったが、数学・Cをしなくてはいけなかった。だから変えない。(社会科学系統、男子、1年生)
- ・法学部 理学部数学科は受験科目・方法から全て異なっている。そもそも受験し直すのが嫌。(社会科学系統、男子、2年生)
- ・実際問題として、理系科目(ex.化学・物理など)の教養・知識がほぼゼロだったので、それを得るために長い期間がかかってしまうから。(社会科学系統、男子、2年生)
- ・理系の方が職業に直結する学問が多く、専門知識が身につくと思ったが、改めて学習しようとしてもどうやっていいか、教科書だけでは難しく、やめざるをえなかった。(社会科学系統、女子、3年生)
- ・理系の専攻分野を勉強した方が、明らかに就職に有利だと思ったから、変えられるものなら変えたいけど、学力的に無理(理系の科目が全然できない)。(社会科学系統、女子、3年生)
- ・数学、物理、化学の考え方を学ぶことに困難を感じた。(社会科学系統、男子、4年生)
- ・理系でやっていたので、文系科目を全くやっていなかったため追いつくのが大変だと思ったのでやめた。(理工学系統、男子、1年生)
- ・理系だったので国語や社会の部門を勉強するのが大変だと思った。(理工学系統、男子、1年生)
- ・理系から文系へは英語力で差があり変えるのが難しいと聞いたから。(理工学系統、女子、2年生)
- ・センター試験で文系は社会2つだったが、自分は公民を1つ選択したので、地歴をそのときからやる余裕がなかった。(農水産学系統、女子、1年生)

### 高校時代の履修科目の問題

以上の記述からは、特定の教科に対する苦手が進路変更を妨げる要因になっている様子が見えてくるが、そうした状況を生み出す背景として高校時代の履修科目の問題がある。関心の対象が変わったり、就職のことを考えたりして、いざ進路変更をしようと思ったとき、必要となる科目を高校時代に履修していないという問題である。これも、人文科学系統などの文系に多くみられた回答である。高校時代の明確な文理分けは、柔軟な進路変更を妨げる大きな要因になっていると考えられる。

- ・文系 理系は高校時代の履修科目の関係もあり、ほぼ100%現段階では無理。(人文科学系統、男子、1年生)
- ・文系と理系では、とっている科目がちがったので先生に相談したが変えられなかった。(人文科学系統、女子、1年生)
- ・高校の時に文系を選択していたので、理系科目で勉強してないものが多く、無理だと思った(数、数Cなど)。(人文科学系統、女子、2年生)
- ・高校で物理や化学を履修していなかったこと。(人文科学系統、男子、3年生)
- ・高校の入学段階で、文理選択をしなければならなかった。物理・生物をやりたかったが、カリキュラム上不可能だった。そのため変更できなかった。(人文科学系統、女子、4年生)
- ・高校での履修科目の不足、理解の不十分さ。(教育学系統、女子、3年生)
- ・文系科目をやるには受験まで期間がなかった。学校で文系クラスに変えてもらえなかった。(理工学系統、男子、1年生)

### 制度の不備

さらに多い回答として、進路変更の制度がきちんと整っていないという指摘がある。そもそも編入試験が整備されていない、定員の空きがない、手続きが複雑でわかりにくい、転出学科と転入学科の双方の了解を得なければ実現できない、相談機関がない、推薦入学なので認められないなど、仮に能力と意欲が備わっていても制度的に実現が難しいケースが多く存在する。大学側はまだ、入学後の進路変更を柔軟に認めようとする姿勢はもっていないようである。

- ・大学自体を変えなければならない。あるいは、すべて履修しなおさなければならない。(人文科学系統、男子、2年生)
- ・実際には制度がなかったため、どうすることもできなかった。転部についての情報不足。(人文科学系統、男子、3年生)
- ・変えたいと思った学科の定員数があり、人員の空きがなかったこと。(人文科学系統、男子、4年生)
- ・専攻を変更することは大学の制度には原則として組みこまれていない。極めて、例外的な措置であるため、手続きが大変。(社会科学系統、男子、2年生)
- ・他の学部につづる際に、その学部に入部のワケがなかったため、そこに入るにはもう一度入学試験をうけなければならなかった。(社会科学系統、男子、2年生)
- ・自分はなぜ今の学部に入ってしまったのかと後悔し、大学に行くことがとてもつらかった。行きたい学部には転部制度がなかったのであきらめた。(教育学系統、女子、1年生)
- ・変える体制が広く確立されていない。手続きが複雑で非常に困難。(教育学系統、女子、2年生)
- ・編入試験の時期が、ちょうど教育実習と重なっていたこと。(教育学系統、女子、3年生)
- ・転学という制度は名前だけで実際にはなかったため、一度学校を辞めて受験しなおさなければならなかったため変えるのをやめた。(理工学系統、男子、1年生)
- ・転科試験を受けなければいけないので、大変だった(転科試験は、必修科目を全てパスして、今の学科と入りたい学科の教授の了承があるため)。(理工学系統、女子、2年生)
- ・推薦で入学したため、学科変更は認められなかった。興味のない分野の専門的な講義が多くなってきて勉強についていけない。全くやる気が出ない。就職希望先は全く学科と関係がない所となる。(理工学系統、女子、3年生)
- ・もともと行きたい分野の学科ではなかったため、入学後どうしたら希望専攻分野へ行けるのか悩みました。しかし誰に相談すればいいのか分からず、時間だけが過ぎてしまい、結局変われずじまいで、入学時と同分野を専攻しています。(理工学系統、男子、4年生)

### 情報の不足

制度の不備に類する回答として、進路変更に関する情報が少ないことを指摘する学生もいる。情報が不足しているために最終的な決断が下せなかったという回答もみられる。入学後に進路変更に関心する学生も一定の割合で存在することから、大学として転部・転科に関する情報を広く公開することが望ましいだろう。

- ・転学科や、他大学編入試験の情報不足と自分の意欲不足。(人文科学系統、女子、1年生)
- ・情報集めから実際に転入試験を受けるまで、あまりにもやるが多すぎるから。(人文科学系統、

女子、2年生)

- ・理系学部へ編入したかったが、情報が少ない上に文系からの編入の例の少なさも心配だった。編入試験を実施している大学もそれほど多くないようである。(人文科学系統、男子、4年生)
- ・他学科への編入や授業を見る機会が非常に少ない。変えようと思っている専攻分野が本当に自分の適性にあったものか判断ができない。他大学等に変更しようか考えた時、友人関係や通学の事等が不安に。転学科や編入学に関する情報があまりにも不足しているので決心ができない。(理工学系統、男子、2年生)

### 専攻を変更した後の課題

ここまでは、どちらかというと制度や高校、大学などの学校側の課題が中心であったが、以下では学生側の事情に注目してまとめてみよう。

進路変更を躊躇する学生のなかには、変更後に専門の授業にきちんとついていけるかという不安を抱えている者がいる。また、4年での卒業が困難になり、留年する可能性が高いという懸念をもっているケースも多い。実際に進路を変えてしまえば、再度元に戻ることも難しいだろう。そのため、専攻を変更したあとにどのような課題が存在するのかを理解し、解決の道筋をつけておかなければ、進路変更もなかなか難しいということになる。これは、学生側の情報収集の努力の問題ともいえるが、大学側が学部・学科の情報を提供し、相談機能を充実させることでも改善が図れるだろう。

- ・授業についていけるかどうか、学費等の問題。(人文科学系統、女子、1年生)
- ・実際に専攻を変えてそこに対応できるかどうか不安だったので結局変えなかった。(人文科学系統、男子、4年生)
- ・単位取得の関係で留年しなくてはならなかったこと。(人文科学系統、男子、4年生)
- ・編入後の単位取得が大変で、5年もかかって卒業しなければいけないのでやめた。(人文科学系統、女子4年生)
- ・今更文系から理系に変わると、授業についていくのが大変だと思った。(社会科学系統、女子、1年生)
- ・単位が…。他学科専門の単位を一からとらなければいけない…。(教育学系統、女子、1年生)
- ・変えたら、単位を取りなおすのに時間がかかる。それだけならまだしも、大学によっては留年までしないと単位の履修に追いつかなくなる可能性がある。(理工学系統、男子、1年生)
- ・学部の変更には、留年が必要なことがわかり、あきらめた。(理工学系統、女子、2年生)
- ・変更後の授業についていける自信がなかった。(理工学系統、女子、2年生)
- ・また入試を受けなければならないことが辛い。大学での実際の授業内容等はやってみないとわからないので変更後の分野が自分にあうかどうか心配。(理工学系統、男子、3年生)
- ・大学を4年で卒業できなくなるのでやめた。(農水産学系統、女子、2年生)
- ・専攻を変える時の面接とテストを受けるか迷った。大学1年の終わりだったが、1年間学んだ授業は役に立たず、新たに授業を受け直す必要があると知ってあきらめた。(農水産学系統、女子、4年生)

### 経済的な負担

次に、経済的な負担の大きさが進路変更を困難にしているという指摘である。進学した大

学内部に希望の学部がなかったり、転部・転科の制度がなかったりすると、大学の再入学を考えなければならない。在学する大学に支払った学費も無駄になる可能性が高く、こうしたことを懸念して進路変更ができないケースも多く存在するようである。

- ・経済面。新たに大学を受けようと思ったら、また予備校や受験費などで親に負担をかけてしまい、死にものぐるいで高校で勉強しなかった科目を勉強する覚悟もなかった。(人文科学系統、女子、2年生)
- ・もう一度受験しなおしたりするにはお金がかかるので、家庭のことを考えると気が引ける。(社会科学系統、男子、2年生)
- ・教育学部の数学科から(進路選択で諦めた)薬学部に変更しようかと本当に悩みましたが、学費の面などから、今度こそ本当に諦めがつかしました。(教育学系統、女子、1年生)

#### 周囲の反対、周囲への配慮

経済的な負担に大きく関連しているのが、親の反対や親への配慮である。学費を支払ってくれている親を配慮して、進路変更をあきらめる者もいる。また、親以外にも、高校の教員や大学の担当教官の意見を聞いて、変更を思い留まる者もいる。

- ・商業学校所属(文系)だったが、私は工学部を希望していました。工学部へ変更しようと思いましたが、学校、先生から断固反対され、進学をゆるしてもらえませんでした。(社会科学系統、女子、1年生)
- ・両親の反対があり、大変だった。(理工学系統、男子、3年生)
- ・親に迷惑がかかること。(理工学系統、女子、1年生)
- ・誰に相談していいかわからなかった。親は高いお金をはらっているし、教授は続けろと説得するので。(理工学系統、女子、2年生)
- ・もう3年間経過してしまっているし、親に授業料等々払ってもらっているので、社会に出るのが遅くなってしまうのも厳しい。(理工学系統、男子、3年生)
- ・再度、受験する資金面、時間などを考えると変えられなかった。親を説得できる言葉がなく、それほど想いが強くないと考えたため。(理工学系統、女子、4年生)
- ・周囲の人の目や金銭的な問題が気になって変えられない。(医歯薬看護学系統、女子、1年生)
- ・変えなかった。というか変えることは不可能に近いような…。1回入ってしまった学校だし、学費(しかも極端に高い!!)を親に出してもらっている身だから。(医歯薬看護学系統、女子、3年生)

#### 現状の肯定

進路変更を躊躇する要因の一つに、現在までに積み上げてきたことを否定できないという思い・感情が存在する。進路変更によって、今まで努力してきたことや取得した単位などが無に帰することもあろう。そうしてまで進路を変更しようという強い思いがない限り、なかなか変更を実現することは難しいようである。

- ・今まで勉強してきたものをやめるのはもったいないから。(人文科学系統、女子、3年生)

- ・今まで取得した単位がほとんど無駄になることと転部試験を受けるための準備が面倒だったこと。(社会科学系統、女子、3年生)
- ・今までの勉強がむだになるのではないかと思った。(理工学系統、男子、1年生)
- ・今やっていることも面白そうだったし、友達もたくさんいたから。(理工学系統、男子、4年生)

### 就職の問題

次に、就職に関連した問題がある。これは、理系学生に多い回答である。たとえば、文系への進路変更を考えたとしても、就職が困難になる可能性があるため、そのまま理系に籍を置くというケースである。大学生にとって就職難が続いており、他に関心が移っていたとしても、就職のために進路変更は不利と判断することはあるだろう。

また、逆に、文系系統の学部の回答のなかに、就職を考えると理系に変更したいが、苦手な教科があるために難しいといった記述もみられた。

- ・編入は就職活動との兼ね合いの難しさから断念。(教育学系統、男子、1年生)
- ・就職のことを考えると、理系のほうが良いことがわかっていたので。(理工学系統、女子、1年生)
- ・変えた後の勉強はまた1から始まるから大変！ 文系に変えると就職が難しくなる。(理工学系統、男子、2年生)
- ・「職業」につながるかを考えた時、あまり現実的でないと思ったので。(理工学系統、女子、2年生)
- ・経済に興味があったが、経済学部に入っても、あまり稼げないと思いあきらめ、薬剤師にした。(医歯薬看護学系統、女子、4年生)

### 自己理解の不足

最後に、自己理解の不足である。現在の専攻も、変更先の専攻も、自分に適しているかどうか分からないので、進路変更を思いとどまるというケースである。進路変更を希望しているかどうかを問わず、自分が選択した専門領域が自分に向いているのかどうかという悩みを抱える学生は、一定の割合で存在しているものと推察される。進路変更を希望する者に対する情報提供や相談機能の充実もさることながら、まずは大学に入学した時点で、その専門領域で何が学べるのか、その学問のどの点が自分に向いていて、自分の進路希望を実現するためにどのようなルートがあるのかといったことを考える機会を設けてはどうだろうか。

- ・もし専攻を変えたら、その分野が本当に適しているのかわからなかった。もしかしたら授業がづらいから逃げているだけかも、などとなやんだ。(理工学系統、男子、1年生)
- ・大学に入って自分は理系ではないと気づき、また今の専攻もやりたいことではなかったが、本当に文系なのか、自分が何をやりたいのかわからず結局変えられなかった。(理工学系統、女子、2年生)
- ・適性がないことで悩み、今の専攻から逃避しようと思ったが今の学部(勉強)以外考えることができず変えなかった。自分がこのまま看護師になっていいのか、続けていいのか悩んだときに、教員(=看護師としての大先輩にあたる人たち)に、相談することができなくて、一人で悩んだ。(医歯薬看護学系統、女子、4年生)

以上、大学入学後の進路変更を妨げる要因について検討してきた。ここからは、次のような課題が浮き彫りになっていると考える。

第一に、実際に専攻の変更をするかどうかを問わず、進路に悩んでいる学生は多く存在する。大学は、こうした学生に対する相談や情報提供の充実をすることが望ましい。

第二に、専攻の変更を柔軟に認めるとすれば、必要な制度を充実させる必要がある。具体的には、学内の編入試験、学外からの転入試験の充実、それら試験に関する情報の開示、受け入れ側の学部・学科の情報の開示、進路変更後の科目履修のサポートや補償教育、奨学金の整備などである。

第三に、高校教育における課題である。進路変更に際して、特定の科目が苦手である、履修していないなどの理由によって断念する学生が多く存在した。これらは、高校時代に必要となる科目を履修していないことが原因として起きていることが多い。文系コースであれば、入試に必要な最小限の理科科目しか履修していないため、理系への変更が困難になっている。今後はいっそう、学際的な学問領域が多くなり、学部・学科を超えた研究課題も増えるものと考えられる。そのような状況では、進路変更を柔軟に認めたり、複数の専攻を履修したりといったことを奨励する必要も出てこよう。しかし、高校段階で明確な文理分けをしていることが、そうした学問間の流動性を阻害する可能性がある。

以上についての具体的な解決策や改善策を考えることが、今後の課題である。

### 3 . 大学卒業後の進路選択について

前節まで、大学生自身のこれまでの進路選択結果と、その経験を踏まえたうえでの進路選択の時期に対する考えを、さまざまな属性ごとに検討してきた。この節では大学卒業後の進路、すなわち大学卒業後の職業選択についての意識を検証する。進路観や自己理解は学年によって異なることが想定されるため、ここでは学年ごとの違いを確認したうえで、性による違い、文系 - 理系の違い、学部系統ごとの違いなどの属性別分析を行う。そのうち、希望する業種・職種や就職先を決めるときに重視することについて、同様の切り口で分析していきたい。

#### ( 1 ) 希望する進路

最初に、大学卒業後の希望進路についてみてみよう。なお、すでに進路が決定している者は、決定している進路先について回答してもらっている。

今回の調査対象者全体の結果を、**図3 - 3 - 1** に示した。もっとも多い回答は、「民間企業」(42.0%)であり、次いで「まだ決まっていない」(15.2%)という結果となった。さらに、「教員」「公務員」「進学」などの回答が、それぞれ1割前後となっている。

次に、学年別での集計結果を、**図3 - 3 - 1** に示した。これをみると、学年が上がるとともに「民間企業」の比率が高まる傾向にあり、1～2年生で3割台だったのが、3～4年生では5割前後になる。およそ半数が、「民間企業」希望者、もしくは決定者である。このほか、「進学」を希望する者も、学年が上がるとともに増加する傾向がみられた。反対に、顕著に減少するのは「まだ決まっていない」の比率で、1年生(22.2%)や2年生(20.5%)で多く、3年生(9.6%)や4年生(5.8%)で少ない。学年が上がるにつれて卒業後の希望進路が固まってくるといえよう。

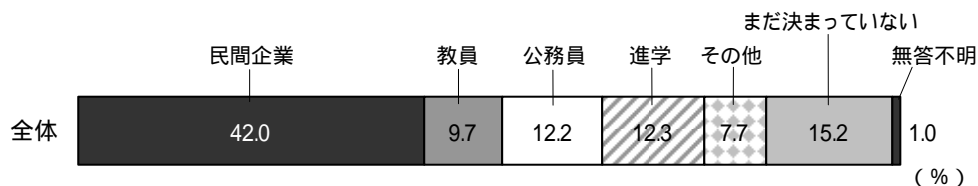
さらに、性別での違いを、**図3 - 3 - 1** に示した。これをみると、男子に「進学」希望者が多く、女子に「民間企業」希望者が多い様子が見られる。

それでは、文系学生と理系学生で希望進路にどのような違いがみられるのだろうか。**図3 - 3 - 1** に示したように、特徴として理系学生に「進学」希望が多い(文系 5.2% < 理系 19.0%)ことがわかる。このために、理系学生は「民間企業」「教員」「公務員」などの比率が、若干低めになっている。



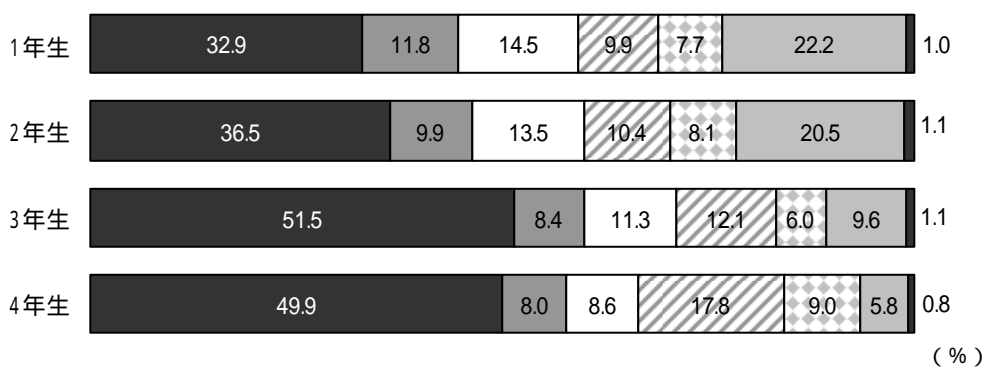
図3-3-1 希望する進路

全体



\* 進路が決定している者は、決定している進路先について回答している。

学年別



性別



文理別



\* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

\* 進路が決定している者は、決定している進路先について回答している。

さらに、こうした状況を詳しくみるために、男女それぞれについて文理別結果を図3-3-1に示した。ここからは、いずれも「民間企業」を多く選択していることがわかるが、相対的にみたとき、男子の文系学生に「公務員」が、男子の理系学生に「進学」が多い様子がうかがえる。女子の文系学生はもっとも「民間企業」を希望する比率が高いという特徴があるが、女子の理系学生は比較的さまざまな進路に希望が散らばっている。

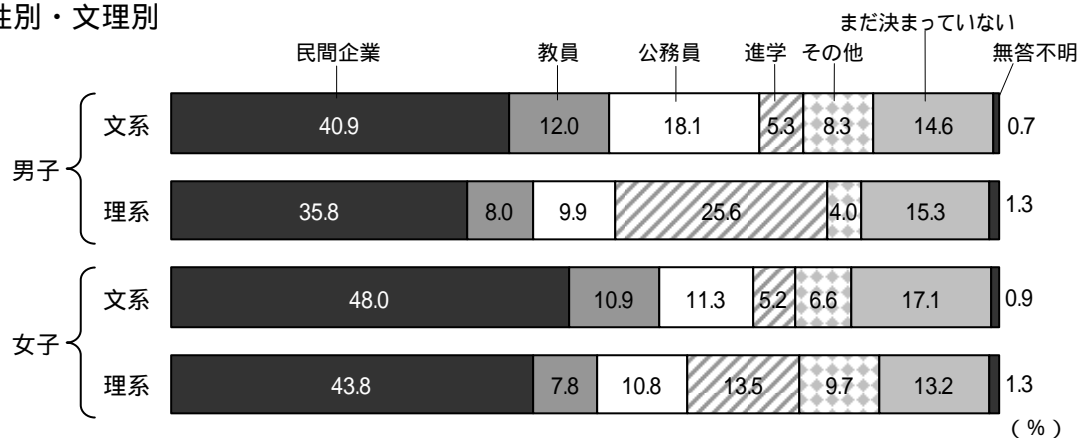
これを学部系統ごとに示したのが、図3-3-1である。特徴としては、社会科学系統で「公務員」(20.6%)、教育学系統で「教員」(60.0%)、理工学系統と農水産学系統で「進学」(それぞれ24.9%、19.6%)、医歯薬看護学系統で「その他」(18.5%)の占める比率が高いことなどが目を引く。一方で、「まだ決まっていない」とする回答が人文科学系統(18.8%)、農水産学系統(17.1%)で目立った。

この結果を、調査時点(1~2月)では多くの学生が卒業後の進路を確定させていると考えられる4年生に限ってみていくことにしよう。図3-3-1に示されているように、いずれの学部系統においても「まだ決まっていない」とする回答が大幅に減少し、代わって人文科学系統、社会科学系統では「民間企業」、理工学系統、農水産学系統では「進学」の比率が高まっている。なお、教育学系統と医歯薬看護学系統では学部系統全体の集計結果と、ほぼ同様の結果となった。

それぞれの学部系統にみられる特色は、一方を大学教育の特徴(学問領域の内容や身につけた諸能力、資格や免許など)によって決定され、もう一方を労働市場の環境(雇用や定員の多さなど)によって決定されるものと考えられる。

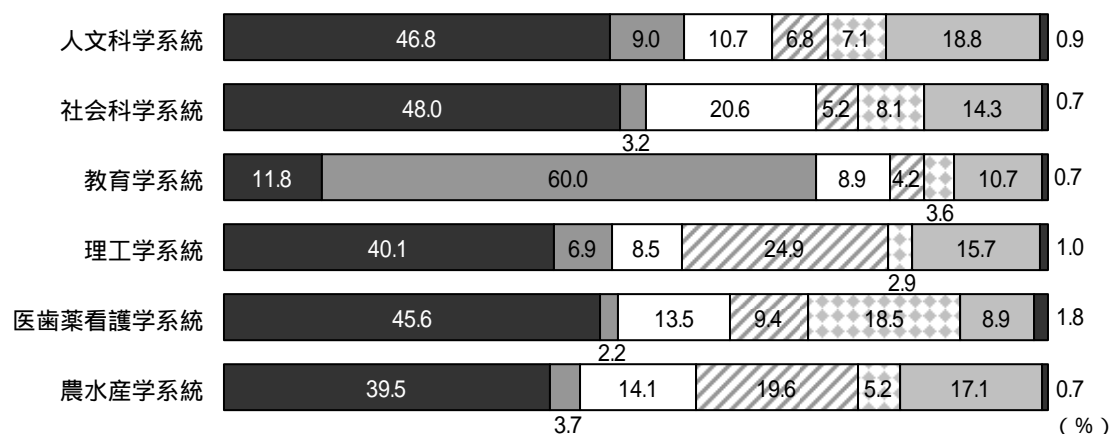
図3-3-1 希望する進路（続き）

性別・文理別



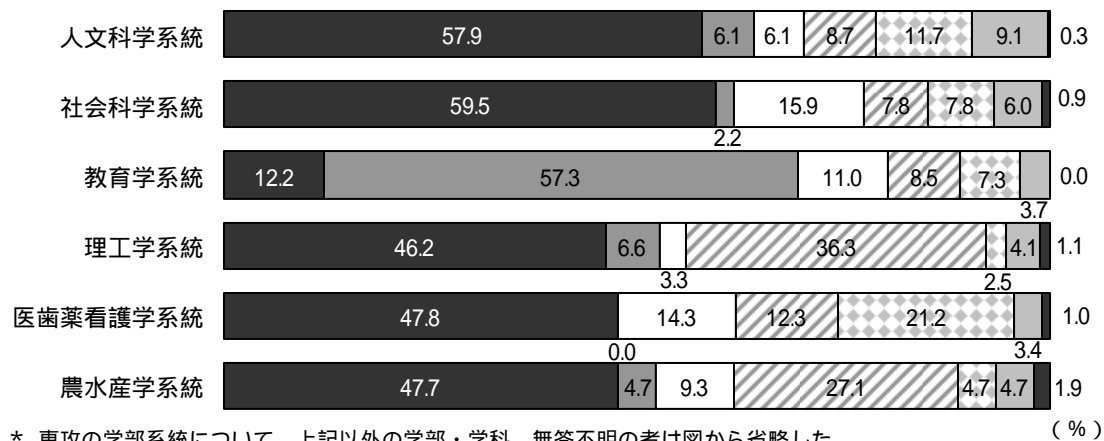
\* 専攻の文理別について、「文系と理系の間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。  
 \* 進路が決定している者は、決定している進路先について回答している。

学部系統別



\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。  
 \* 進路が決定している者は、決定している進路先について回答している。

学部系統別（4年生）



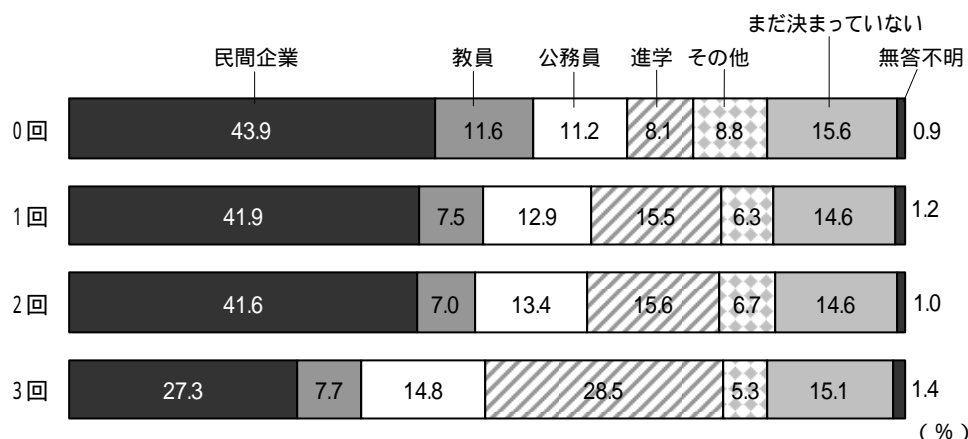
\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。  
 \* 数値は4年生のものである。  
 \* 進路が決定している者は、決定している進路先について回答している。

それでは、COE採択回数別にみたとき、希望する進路はどのように変わるのだろうか。その結果を、図3-3-2に示した。これを見ると、COE採択回数が多い大学ほど希望する進路で「進学」の比率が高くなり、反対に「民間企業」が低くなる傾向がみられる。

とくに、図3-3-2に示したように、理工学系統ではその傾向が顕著である。「民間企業」の希望者は採択回数「0回」では44.9%なのに対して「3回」では21.6%と少なく、「進学」希望者は「0回」17.6%に対して「3回」41.7%であった。ちなみに、数は少なくなるが、ほぼ進路が決定したと思われる4年生に限って、理工学系統で「3回」採択された大学に在学する学生の進路希望をみると、およそ半数（47.6%、該当学生42人中20名、図表省略）が「進学」を選択している。研究に重点を置いている大学では、理工学系統の学生の半分が大学院に進学している様子が見える。

図3-3-2 希望する進路（COE採択回数別）

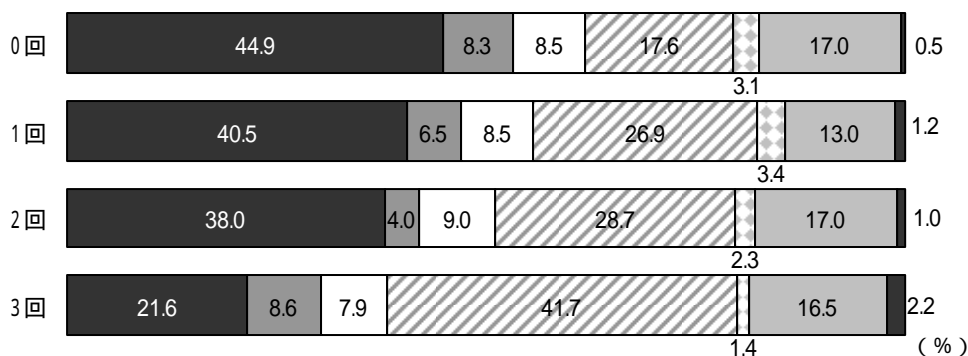
全体



\* COE採択回数は、回答者が所属する大学の過去3年（平成14～16年）のCOE採択回数を示す。

\* 進路が決定している者は、決定している進路先について回答している。

理工学系統



\* 数値は理工学系統に進学した学生のもの。

\* 進路が決定している者は、決定している進路先について回答している。

## (2) 希望する業種

さて、大学卒業後に希望する進路としては「民間企業」が選択される比率がもっとも高かった(図3-3-1 参照)が、では、民間企業への就職を考えている大学生はどのような業種を希望しているのであろうか。この点を明らかにするために、希望進路として「民間企業」を選択した大学生に対して、希望する業種をたずねた結果をみていこう。表3-3-1は、全体、性別、文理別の結果を示したものである。

全体の回答として多かったのは、「製造業」(35.4%)、「情報通信業」(25.2%)、「医療・福祉業」(22.2%)であった(ただし、「製造業」については内訳となる7項目を累積した比率であり、分析対象の全体の6.1%が「製造業」から2つの項目を選択している。以下で、「製造業」の数値をみるときは、この点に留意する必要がある)。

また、性別では、男子で「製造業」(男子43.6% > 女子30.0%)、「金融・保険業」(男子14.6% > 女子7.4%)の比率が高く、女子では「医療・福祉業」(男子9.5% < 女子30.6%)が高い結果となった。

さらに、文理別では、文系で「情報通信業」(文系33.2% > 理系17.3%)、「サービス業」(文系25.4% > 理系4.3%)、「金融・保険業」(文系18.6% > 理系2.0%)、「卸売・小売業」(文系15.0% > 理系3.1%)などの比率が高く、理系では「医療・福祉業」(文系8.9% < 理系31.9%)、「製造業」(文系21.6% < 理系51.7%)が高い結果となった。

このような状況をより詳しくみるために、表3-3-2で男子の文系学生、男子の理系学生、女子の文系学生、女子の理系学生の4分類で、希望する業種を示した。

まず、それぞれの特徴として、男子の文系学生では「金融・保険業」(25.5%)、「運輸業」(14.4%)などを希望する比率が高く、男子の理系学生では「製造業(機械、精密機器、電子部品など)」(24.5%)、「製造業(自動車、航空機、船舶など)」(17.1%)を希望する比率が高かった。また、女子の文系学生で「サービス業」(29.6%)、女子の理系学生で「医療・福祉業」(44.4%)を希望する比率が高かった。このように文系学生と理系学生で特定の業種を志向する傾向がみられることから、大学生たちは就職を希望する際に、専攻する専門領域との連続性を踏まえた業種を選択していると考えられる。

表3 - 3 - 1 希望する業種（全体・性別・文理別）

（％）

	全体	性別		文理別	
		男子	女子	文系	理系
「民間企業」希望者の比率	42.0	38.1	45.0	44.8	40.2
建設業	5.7	5.7	5.8	1.7 <	9.5
製造業	35.4	43.6	30.0	21.6	51.7
食料品、飲料、たばこ、薬品、化粧品など	15.2	11.7	17.5	10.2	21.7
繊維、衣料、家具、木製品など	2.3	2.0	2.5	1.7	2.4
紙・パルプ、石油、プラスチック、ゴムなど	2.4	3.2	1.8	1.2	3.9
鉄鋼業、金属製品、非鉄金属製品など	1.0	1.6	0.6	0.5	1.4
自動車、航空機、船舶など	4.8	9.3	1.9	2.2	8.0
機械、精密機器、電子部品など	7.4	13.4	3.5	3.3	12.6
その他(貴金属、楽器、玩具、事務用品など)	2.3	2.4	2.3	2.5	1.6
電気・ガス・水道業	1.9	3.1	1.1	1.4	2.7
情報通信業	25.2	27.9	23.4	33.2	17.3
運輸業	5.6	9.6 >	2.9	8.9 >	2.8
卸売・小売業	9.0	10.1	8.3	15.0	3.1
金融・保険業	10.2	14.6 >	7.4	18.6	2.0
不動産業	2.5	3.9	1.6	3.2	1.8
飲食・宿泊業	4.5	2.9	5.5	6.6	2.8
医療・福祉業	22.2	9.5	30.6	8.9	31.9
サービス業	14.4	12.3	15.7	25.4	4.3
その他	11.1	11.3	11.0	12.5	10.5

\* 「『民間企業』希望者の比率」は、卒業後の希望進路をたずねた項目で「民間企業」を選択した者の比率を示す。

\* 希望の業種については、「民間企業」を選択した者のみが回答している。

\* 希望する業種を2つまで選択。

\* 「製造業」は、「食料品、飲料、たばこ、薬品、化粧品など」以下の7種の業種の合計を示す。

\* は性別、文理別で10ポイント以上差があったもの、< >は5ポイント以上差があったものを示す。

\* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は表から省略した。

表3-3-2 希望する業種(性別・文理別)

(%)

	全体	男子		女子	
		文系	理系	文系	理系
「民間企業」希望者の比率	42.0	40.9	35.8	48.0	43.8
建設業	5.7	2.0 <	10.3	1.5 <	8.9
製造業	35.4	19.7	71.2	22.9	38.7
食料品、飲料、たばこ、薬品、化粧品など	15.2	6.9	17.3	12.4	24.6
繊維、衣料、家具、木製品など	2.3	2.0	1.8	1.5	2.8
紙・パルプ、石油、プラスチック、ゴムなど	2.4	1.3	5.4	1.1	3.0
鉄鋼業、金属製品、非鉄金属製品など	1.0	0.7	2.6	0.5	0.7
自動車、航空機、船舶など	4.8	2.9	17.1	1.7	1.9
機械、精密機器、電子部品など	7.4	3.5	24.5	3.1	4.7
その他(貴金属、楽器、玩具、事務用品など)	2.3	2.4	2.4	2.6	1.1
電気・ガス・水道業	1.9	1.8	4.6	1.1	1.3
情報通信業	25.2	32.2 >	22.5	33.9	13.7
運輸業	5.6	14.4	> 5.2	5.1	1.2
卸売・小売業	9.0	16.2	3.2	14.1	3.1
金融・保険業	10.2	25.5	2.2	13.8	1.9
不動産業	2.5	5.5	1.8	1.5	1.9
飲食・宿泊業	4.5	3.5	2.0	8.8	3.4
医療・福祉業	22.2	5.5 <	13.5	11.1	44.4
サービス業	14.4	19.3	4.6	29.6	4.2
その他	11.1	13.1	9.7	12.1	10.9

\* 「『民間企業』希望者の比率」は、卒業後の希望進路をたずねた項目で「民間企業」を選択した者の比率を示す。

\* 希望の業種については、「民間企業」を選択した者のみが回答している。

\* 希望する業種を2つまで選択。

\* 「製造業」は、「食料品、飲料、たばこ、薬品、化粧品など」以下の7種の業種の合計を示す。

\* は性ごとの文理別で10ポイント以上差があったもの、< >は5ポイント以上差があったものを示す。

\* ○は、文系男子、理系男子、文系女子、理系女子のなかでの最高値を示す。

\* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は表から省略した。

それでは、学部系統ごとにみたとき、希望する業種はどのように異なるのだろうか。この点を検討するために、表3-3-3で学部系統別の数値を示した。

特徴が強く表れていたのは、理工学系統の「製造業」(69.0%)、農水産学系統の「製造業」(77.4%)、医歯薬看護学系統の「医療・福祉業」(96.0%)などで、これらの比率は際立って高い。また文系の学部系統では共通して「情報通信業」の比率が高く、さらに、社会科学系統では「金融・保険業」(33.4%)を選択する学生が多かった。なお、教育学系統では「情報通信業」(50.9%)の比率が高かったが、この学部系統については「民間企業」希望者の比率が低いことに留意する必要がある。

以上みてきたように、特定の学部系統と業種には密接な関連があり、学生たちは専門領域での学習や経験がより生かせる業種を志向している様子がうかがえる。



表3-3-3 希望する業種（学部系統別）

（％）

	全体	人文学系統	社会科学系統	教育学系統	理工学系統	医歯薬看護学系統	農水産学系統
「民間企業」希望者の比率	42.0	46.8	48.0	11.8	40.1	45.6	39.5
建設業	5.7	1.4	2.3	1.9	15.8	0.5	6.9
製造業	35.4	19.3	25.5	35.8	69.0	8.1	77.4
食料品、飲料、たばこ、薬品、化粧品など	15.2	10.1	10.9	13.2	17.1	7.9	62.3
繊維、衣料、家具、木工品など	2.3	1.1	2.3	1.9	2.4	0.0	4.4
紙・パルプ、石油、プラスチック、ゴムなど	2.4	0.8	1.1	1.9	6.2	0.0	5.7
鉄鋼業、金属製品、非鉄金属製品など	1.0	0.8	0.4	1.9	2.6	0.0	0.6
自動車、航空機、船舶など	4.8	1.9	3.4	5.7	14.4	0.0	1.9
機械、精密機器、電子部品など	7.4	2.2	5.1	5.7	23.2	0.2	1.9
その他（貴金属、楽器、玩具、事務用品など）	2.3	2.5	2.3	5.7	3.0	0.0	0.6
電気・ガス・水道業	1.9	0.9	1.7	0.0	4.8	0.0	1.9
情報通信業	25.2	35.7	28.7	50.9	27.5	0.7	5.0
運輸業	5.6	7.8	10.2	3.8	5.0	0.0	1.9
卸売・小売業	9.0	14.5	16.4	9.4	2.2	0.9	5.7
金融・保険業	10.2	10.6	33.4	1.9	2.4	0.2	3.1
不動産業	2.5	2.0	4.9	3.8	2.6	0.0	1.3
飲食・宿泊業	4.5	9.0	3.6	11.3	1.1	0.0	7.5
医療・福祉業	22.2	12.5	4.2	5.7	5.0	96.0	6.9
サービス業	14.4	31.2	16.4	26.4	4.5	1.9	7.5
その他	11.1	13.1	10.4	15.1	11.5	2.8	19.5

\* 「『民間企業』希望者の比率」は、卒業後の希望進路をたずねた項目で「民間企業」を選択した者の比率を示す。

\* 希望の業種については、「民間企業」を選択した者のみが回答している。

\* 「製造業」は、「食料品、飲料、たばこ、薬品、化粧品など」以下の7種の業種の合計を示す。

\* 希望する業種を2つまで選択。

\* ○ は50%以上のもの、○ は20%以上のものを示す。

\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。

それでは、希望する業種は、学年によって変化がみられるのだろうか。ここでは、学年推移を検討していくことにするが、学年間の比較をするにあたって次の点に留意した。

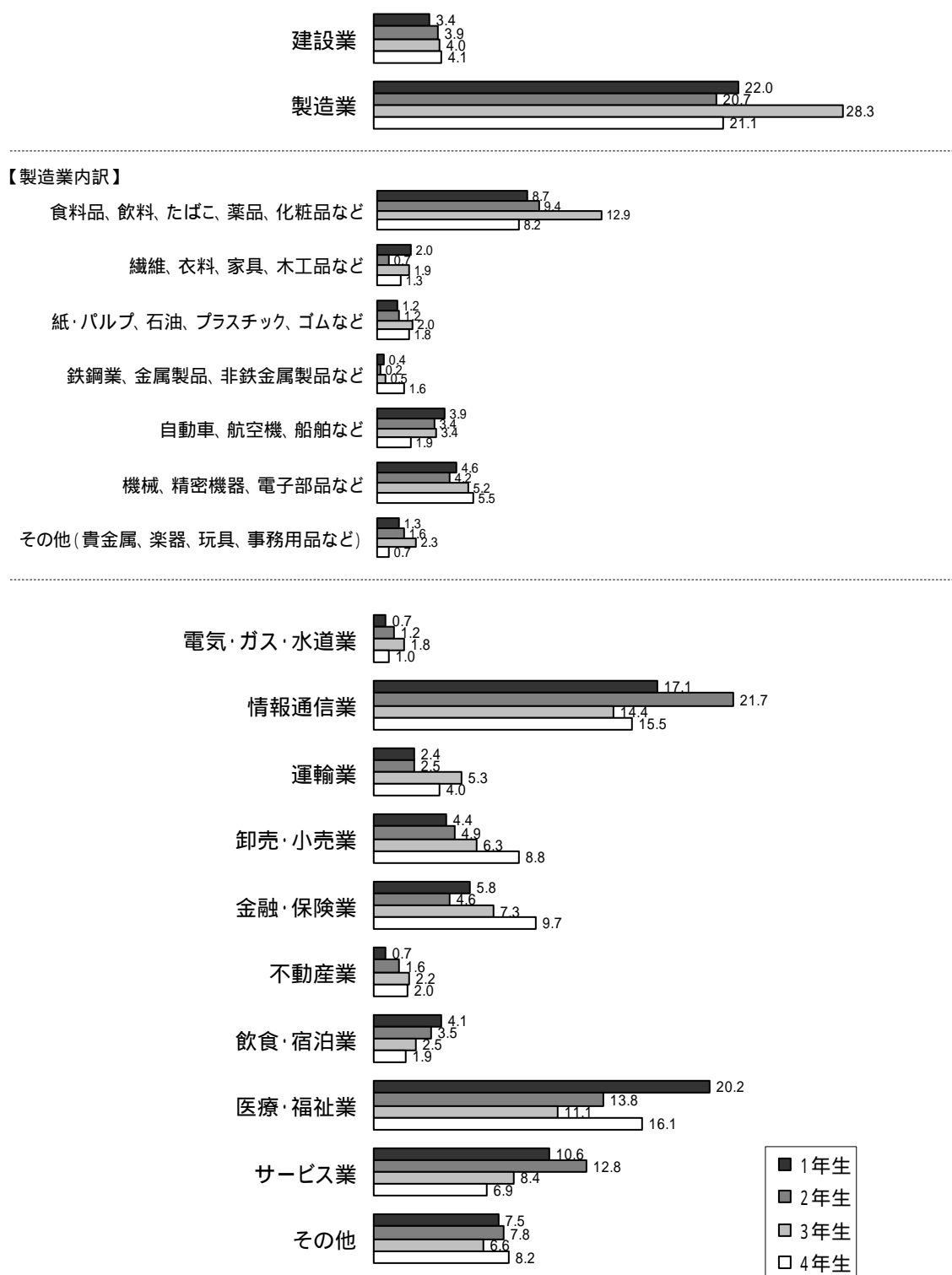
調査では、18項目のなかから希望するものを2つまで選択してもらっている。ただし、就職先が決まっている学生には、その就職先について回答するよう指示している。したがって、就職活動が終わっている4年生は、決定している就職について記入している可能性が高い。このことを裏づけるように、選択数の平均値は、1年生 1.52 2年生 1.58 3年生 1.70 4年生 1.18 と推移している。このために、どうしても4年生の数値（選択比率）が低くなってしまう。この点を解決するために、学年ごとの選択比率を選択数の平均値で割って、指数化した。そのため、ここで示されている数値は、その業種が選択された比率を示すものではなく、学年による変化をみるための指標であることに注意していただきたい。

さて、以上を踏まえて、**図3 - 3 - 3**をみてみよう。ここからは、学年が上がるとともに希望が増える業種と減る業種があることがわかる。希望が増える傾向にあるのは、「金融・保険業」（1年生 5.8 ポイント 4年生 9.7 ポイント、以下同様）、「卸売・小売業」（4.4 ポイント 8.8 ポイント）などである。一方、希望が減る傾向にあるのは、「医療・福祉業」（20.2 ポイント 16.1 ポイント）、「サービス業」（10.6 ポイント 6.9 ポイント）、「飲食・宿泊業」（4.1 ポイント 1.9 ポイント）などである。また、相対的に希望者が多い「製造業」「情報通信業」は、学年による変動が大きく、2～3年生で一時的に人気が高くなる様子がみられる。

民間企業への就職は、労働市場における新卒者の採用数に規定されるところが大きい。そのため、大学入学時点では希望者が少なくても、市場における採用数が多いことによって学生たちの関心を集め、徐々に人気が高まっていくような業種がある。反対に、採用数が少ないことで、あきらめや関心の低下を引き起こし、希望者が減っていく業種もあるようだ。

さらには、就職に関する情報収集や実際の就職活動を経験することで、学生自身の意識が変わることもあるだろう。仕事の内容や待遇、その業種の将来性などを具体的に考えることで、単なる人気には左右されない選択をするようになるものと考えられる。

図3-3-3 希望する業種（学年別）



\* 数値は、選択された比率（%）を選択合計数の平均値で割った指数である。  
 \* 希望の業種については、「民間企業」を選択した者のみが回答している。  
 \* 「製造業」は、「食料品、飲料、たばこ、薬品、化粧品など」以下の7種の業種の合計を示す。  
 \* 希望する業種を2つまで選択。

### (3) 希望する職種

業種に続いて、職種について検討しよう。民間企業への就職を考えている大学生は、どのような職種を希望しているのだろうか。まず、「民間企業」を希望する大学生に対して希望する職種をたずねた結果を、表3-3-4に示した。

これをみると、全体として多かったのは、「営業」(21.9%)、「事務」(19.4%)、「研究開発」(17.1%)、「調査企画」(16.5%)である。さらに性別でみると、男子で比率が高いのは、「営業」(男子28.7%>女子17.5%)、「マーケティング」(男子15.5%>女子8.7%)、「研究開発」(男子22.3%>女子13.7%)、「情報処理」(男子14.6%>女子8.6%)などである。一方、女子に希望が多いのは、「事務」(男子13.5%<女子23.3%)であった。

次に、文系と理系の違いを確認してみると、文系学生に多いのは、「調査企画」(文系25.7%>理系7.2%)、「営業」(文系36.1%>理系10.3%)、「事務」(文系33.9%>理系6.1%)、「マーケティング」(文系19.2%>理系2.6%)である。もう一方の理系学生では、「研究開発」(文系2.9%<理系32.6%)、「生産・品質管理」(文系1.8%<理系12.7%)、「設計・施工」(文系1.0%<理系12.8%)、「検査・分析」(文系0.9%<理系12.9%)などが多い。

表3-3-4 希望する職種(全体・性別・文理別) (%)

	全体	性別		文理別	
		男子	女子	文系	理系
「民間企業」希望者の比率	42.0	38.1	45.0	44.8	40.2
研究開発	17.1	22.3	> 13.7	2.9	32.6
調査企画	16.5	17.9	15.5	25.7	7.2
生産・品質管理	7.2	8.3	6.5	1.8	12.7
生産技術	4.8	8.8	> 2.1	0.5	< 9.6
情報処理	11.0	14.6	> 8.6	6.3	< 14.5
営業	21.9	28.7	17.5	36.1	10.3
設計・施工	7.1	9.6	5.5	1.0	12.8
検査・分析	6.7	5.7	7.5	0.9	12.9
調剤	4.2	1.8	5.9	0.3	< 8.7
事務	19.4	13.5	< 23.3	33.9	6.1
マーケティング	11.4	15.5	> 8.7	19.2	2.6
その他	29.1	20.2	35.0	31.4	> 23.6

- \* 「『民間企業』希望者の比率」は、卒業後の希望進路をたずねた項目で「民間企業」を選択した者の比率を示す。
- \* 希望の業種については、「民間企業」を選択した者のみが回答している。
- \* 希望する職種を2つまで選択。
- \* は性別、文理別で10ポイント以上差があったもの、< >は5ポイント以上差があったものを示す。
- \* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は表から省略した。

職種に対する希望の状況を詳しくみるために、ここでは、男子の文系学生と理系学生、女子の文系学生と理系学生の4分類に基づいて、数値を確認しよう。表3-3-5をみると、男子の文系学生では、「営業」(47.2%)、「調査企画」(28.8%)、「マーケティング」(25.1%)を希望する比率が高く、理系学生では、「研究開発」(42.9%)、「設計・施工」(19.3%)、「情報処理」(18.9%)、「生産技術」(18.5%)が高かった。また、女子の文系学生では、「事務」(41.6%)を希望する比率が高く、理系学生では、「検査・分析」(15.2%)、「調剤」(12.4%)が高かった。

このように、文系 - 理系の違いによって、希望する職種が大きく異なることがわかる。希望する業種(表3-3-2参照)について検討した際も、同じように文系 - 理系の違いにより希望が異なる状況を確認した。このことから、専門領域で身につけた能力と業種・職種によって求められる知識・スキルなどの合致状況を踏まえたうえで、大学生が就職先を考えていることがわかる。ただし、性による違いも見逃せない。特定の業種や職種に対する志向は性によって大きく異なっており、「男性だから」「女性だから」という理由で就職を考える傾向があることもみてとれる。資質や能力ではなく、性が特定の業種・職種への就職を阻害する要因になっているとすれば、いかにそうした状況を改善するか検討すべき課題といえよう。

表3-3-5 希望する職種(性別・文理別) (%)

	全体	男子		女子	
		文系	理系	文系	理系
「民間企業」希望者の比率	42.0	40.9	35.8	48.0	43.8
研究開発	17.1	3.3	42.9	2.6	25.8
調査企画	16.5	28.8	6.2	23.7	7.7
生産・品質管理	7.2	2.2	13.9	1.5	12.0
生産技術	4.8	0.7	18.5	0.5	3.8
情報処理	11.0	8.4	18.9	4.8	< 11.6
営業	21.9	47.2	11.9	28.4	9.1
設計・施工	7.1	0.7	19.3	1.2	< 8.5
検査・分析	6.7	1.8	< 9.7	0.3	15.2
調剤	4.2	0.4	3.2	0.2	12.4
事務	19.4	22.8	3.2	41.6	8.1
マーケティング	11.4	25.1	3.6	15.2	1.9
その他	29.1	25.7	13.5	35.2	30.4

- \* 「『民間企業』希望者の比率」は、卒業後の希望進路をたずねた項目で「民間企業」を選択した者の比率を示す。  
 \* 希望の業種については、「民間企業」を選択した者のみが回答している。 \* 希望する職種を2つまで選択。  
 \* は性ごとの文理別で10ポイント以上差があったもの、< >は5ポイント以上差があったものを示す。  
 \* ○は、文系男子、理系男子、文系女子、理系女子なかの最高値、下線は最低値を示す。  
 \* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は表から省略した。

次に、学部系統ごとの集計結果を、表3-3-6に示した。それぞれの学部系統の特徴として、次のような点があげられる。

まず、人文科学系統は、「事務」(36.6%)が多く、「営業」(30.5%)、「調査企画」(25.4%)などの比率も高めである。社会科学系統は、「営業」(43.4%)が多く、「事務」(33.4%)に続いて「マーケティング」(28.7%)が多いのが特徴となっている。教育学系統は、「調査企画」(37.7%)がとくに高い。一方、理工学系統では「研究開発」(43.0%)が多くなっていて、「情報処理」(24.0%)と「設計・施工」(23.7%)が続く。「研究開発」(41.5%)が多いのは農水産学系統も同様であるが、「生産・品質管理」(37.1%)と「検査・分析」(20.1%)の比率が高いことは理工学系統と異なる。医歯薬看護学系統は、「調剤」(24.4%)が多く、「その他」(59.8%)が選択される比率も高かった。医療・福祉系の職業で該当項目がないと判断した場合、「その他」を選択しているのだろう。

表3-3-6 希望する職種(学部系統別) (%)

	全体	人文科学系統	社会科学系統	教育学系統	理工学系統	医歯薬看護学系統	農水産学系統
「民間企業」希望者の比率	42.0	46.8	48.0	11.8	40.1	45.6	39.5
研究開発	17.1	3.0	3.6	9.4	43.0	10.0	41.5
調査企画	16.5	25.4	25.3	37.7	7.8	0.7	16.4
生産・品質管理	7.2	2.3	3.0	7.5	12.3	0.7	37.1
生産技術	4.8	0.5	0.4	0.0	15.4	0.0	11.9
情報処理	11.0	6.1	10.4	15.1	24.0	0.0	1.9
営業	21.9	30.5	43.4	15.1	10.1	4.0	19.5
設計・施工	7.1	1.7	0.6	1.9	23.7	0.2	4.4
検査・分析	6.7	0.9	1.3	1.9	10.4	12.1	20.1
調剤	4.2	0.0	0.6	0.0	1.0	24.4	0.6
事務	19.4	36.6	33.4	24.5	6.4	0.9	11.3
マーケティング	11.4	13.9	28.7	13.2	2.6	0.2	3.1
その他	29.1	35.7	20.2	34.0	10.6	59.8	9.4

\* 「『民間企業』希望者の比率」は、卒業後の希望進路をたずねた項目で「民間企業」を選択した者の比率を示す。

\* 希望の業種については、「民間企業」を選択した者のみが回答している。

\* 希望する業種を2つまで選択。

\* ○は50%以上のもの、◯は20%以上のものを示す。

\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。

続けて、学年による推移を確認しよう。ここでも、学年によって平均選択数が異なっているため、学年間の比較をするにあたって、希望する業種（図3-3-3参照）と同様に以下のような処理を行った。

調査では、12項目のなかから希望するものを2つまで選択してもらっている。ただし、就職先が決まっている学生には、その就職先について回答するよう指示している。したがって、就職活動が終わっている4年生は、決定している就職について記入している可能性が高い。職種は業種と異なり、就職が決まった時点では決定せず、入社後の配属によって決まることも多い。このため、4年生でも2つを選択しているケースはある。しかし、一部では、就職先の決定によって自動的に職種が決まるケースもあろう。こうしたことを裏づけるように、選択数の平均値は、1年生 1.62 2年生 1.66 3年生 1.76 4年生 1.39 と推移している。このように学年によって選択数が異なることを考慮して、学年ごとの選択比率を選択数の平均値で割って、指数化した。そのため、ここで示されている数値は、その職種が選択された比率を示すものではなく、学年による変化をみるための指数であることに注意してほしい。

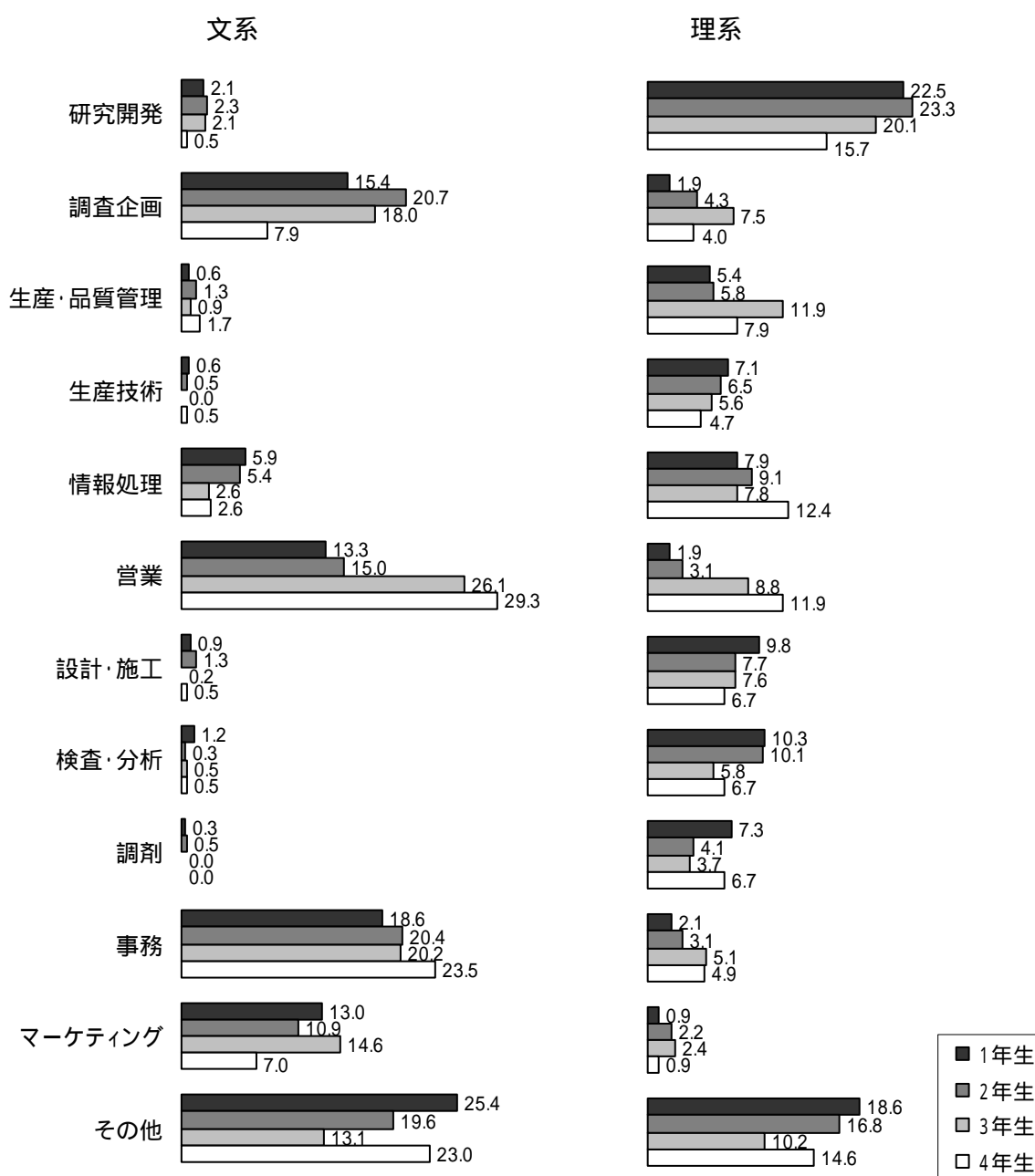
以上を踏まえて、図3-3-4をみてみよう。なお、傾向が文系と理系で大きく異なるため、ここでは文理別のデータを示してある（指数化にあたっては、文系・理系それぞれの平均選択数で割っている）。

ここからは、学年が上がるとともに希望が増える職種と、反対に減少する職種があることがわかる。もっとも増加率が大きいのは、「営業」（文系1年生 13.3 ポイント 4年生 29.3 ポイント、理系1年生 1.9 ポイント 4年生 11.9 ポイント）である。文系では「事務」（文系1年生 18.6 ポイント 4年生 23.5 ポイント）、理系では「情報処理」（理系1年生 7.9 ポイント 4年生 12.4 ポイント）なども増加する。これは、労働市場のなかでも採用数の多さに準じて、希望が増えていくのだろう。

一方、希望が減る職種としては、文系では「調査企画」（文系1年生 15.4 ポイント 4年生 7.9 ポイント）、「マーケティング」（文系1年生 13.0 ポイント 4年生 7.0 ポイント）などがあり、理系では「研究開発」（理系1年生 22.5 ポイント 4年生 15.7 ポイント）などがある。希望が下がる項目は、いずれも学生たちが憧れをもつ職種とみることができよう。

あくまでも仮説であるが、就職活動に向けて職業・産業の知識・情報を得ていく過程で、大学生はイメージ先行で調査、企画、研究系の職種を希望する。しかし、就職活動などの体験を通してこれらの職種で求められる能力要件の高さや少ない採用枠を実感し、4年生にかけて希望する比率が低下するのではないだろうか。

図3 - 3 - 4 希望する職種（文理別・学年別）



\* 数値は、選択された比率（%）を選択合計数の平均値で割った指数である。  
 \* 「民間企業」を選択した者のみが回答している。  
 \* 希望する業種を2つまで選択。  
 \* 専攻の文理別について、「文系と理系の間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

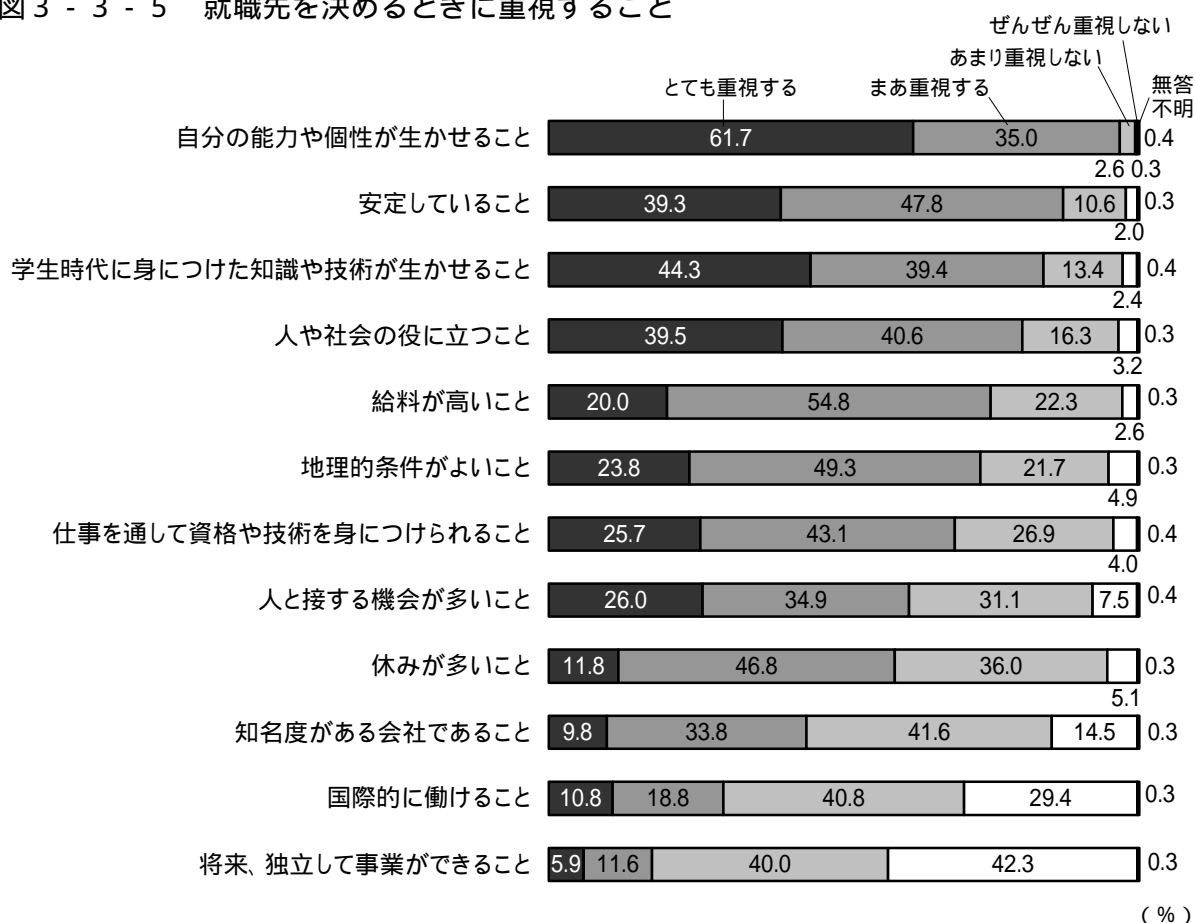


(4) 就職先を決めるときに重視すること

これまで、大学生の希望進路先と希望する業種、職種をそれぞれ検証してきた。ここでは、そうした就職先を決めるときに、大学生たちはどういうことを重視しているのかをたずねた結果を検討していきたい。就職を目の前にした彼らが職業に求めることとは、一体どのようなものなのだろうか。なお、この項目は、「民間企業」希望者に限らず、全員にたずねている項目である。

最初に、大学生が就職先を決めるときに重視することについて、調査対象者全体の数値を図3-3-5に示した。もっとも重視されている観点は「自分の能力や個性が活かせること」(96.7%、「とても重視する」と「まあ重視する」の合計、以下同様)である。次いで、「安定していること」(87.1%)、「学生時代に身につけた知識や技術が活かせること」(83.7%)、「人や社会の役に立つこと」(80.1%)と続いている。その一方で、「知名度がある会社であること」(43.6%)、「国際的に働けること」(29.6%)、「将来、独立して事業ができること」(17.5%)などは相対的に低い結果となった。

図3-3-5 就職先を決めるときに重視すること



次に、就職先を決めるときに重視することについて、性による違いを表したのが図3 - 3 - 6である。全体に、性差はそれほど大きくなく、「自分の能力や個性を生かせること」「安定していること」「学生時代に身につけた知識や技術を生かせること」「人や社会の役に立つこと」などの観点は、男女ともに重視していることがわかる。

差が生じている項目に注目すると、男子は、「知名度がある会社であること」(男子47.4% > 女子40.6%、「とても重視する」と「まあ重視する」の合計、以下同様)を重視する傾向があって、大企業志向が強い。また、「将来、独立して事業ができること」(22.8% > 13.2%)も、優先順位は低いですが、男子に支持されている項目である。

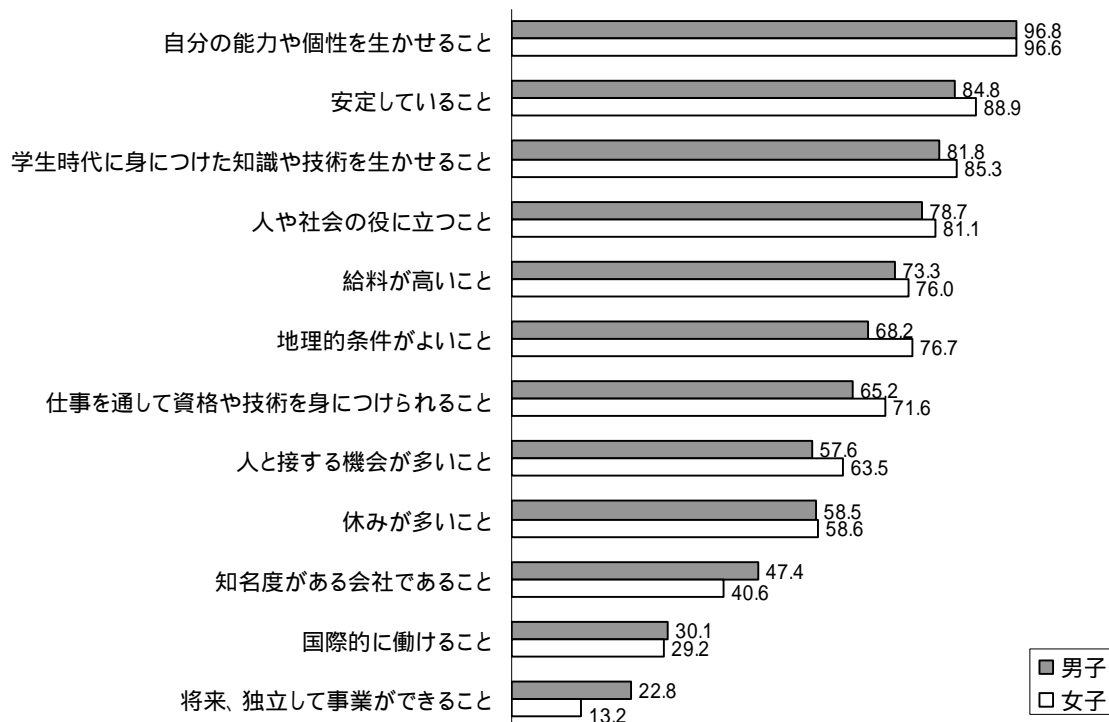
それに対して、女子は、「地理的条件がよいこと」(68.2% < 76.7%)を重視している学生が多く、自宅から通える職場であることなどを考慮している様子が見える。また、「仕事を通して資格や技術を身につけられること」(65.2% < 71.6%)が高いのは、大学進学の原因などで一貫して女子に資格取得志向が強かった傾向と共通している。さらに、「人と接する機会が多いこと」(57.6% < 63.5%)の比率が高く、女子は人との関係を重視する姿勢も強いことがわかる。

続いて、文系と理系の違いについて、図3 - 3 - 7から確認しよう。これをみると、重要度が高い項目は文系、理系ともに同様であり、両者の傾向は大きくは異なる様子が見える。ただし、いくつかの項目で差が生じている。

文系学生に多いのは、「人と接する機会が多いこと」(文系67.6% > 理系53.9%、以下同様)と「国際的に働けること」(35.0% > 25.5%)である。文系学生は理系学生に比べて、人と接する職業を望んでいる。また、「国際的に働けること」が重視されているのは、人文科学系統に外国語関係や国際関係の学部が含まれているためだと考えられる。

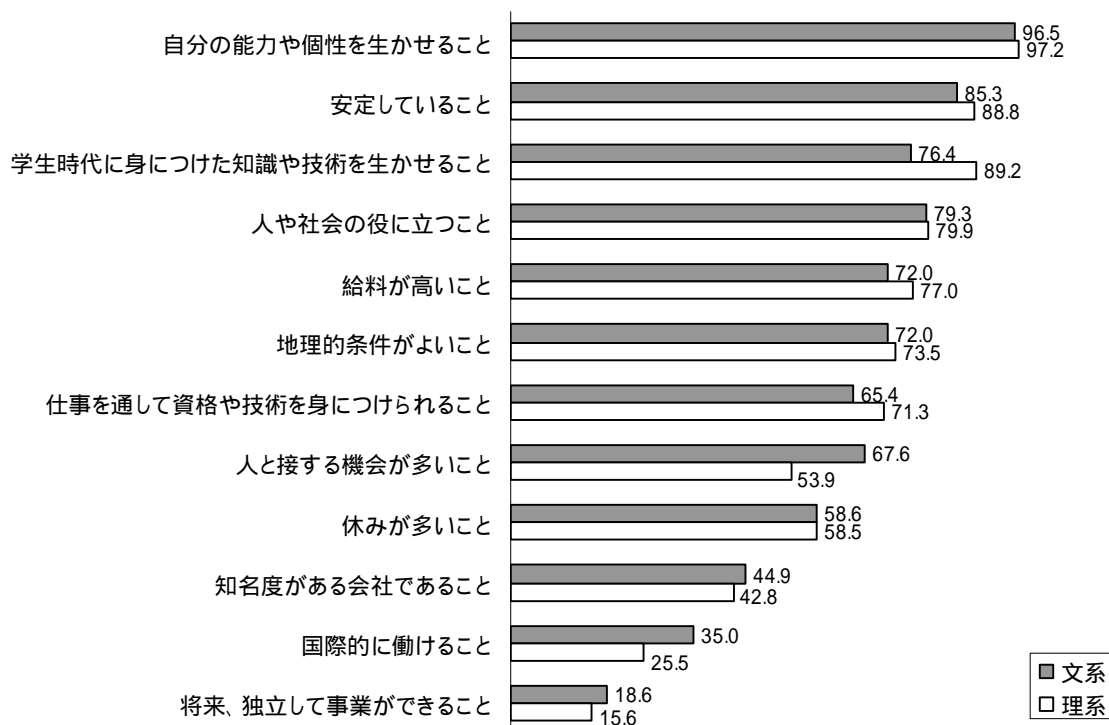
一方、理系学生に多いのは、「学生時代に身につけた知識や技術を生かせること」(76.4% < 89.2%)、「給料が高いこと」(72.0% < 77.0%)、「仕事を通して資格や技術を身につけられること」(65.4% < 71.3%)などであった。理系学生は、学生時代に身につけた知識や技術が生かせることや、職場でもそうした専門性を伸ばすことができるかどうかを、強く意識しているようである。

図3-3-6 就職先を決めるときに重視すること（性別）



\* 数値は、「とても重視する」と「まあ重視する」の合計 (%)。

図3-3-7 就職先を決めるときに重視すること（文理別）



\* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

\* 数値は、「とても重視する」と「まあ重視する」の合計 (%)。

さらに、男子、女子のそれぞれについて、文理別の集計結果を表3 - 3 - 7に示した。ここからは、次のような特徴が明らかになっている。

第一に、「学生時代に身につけた知識や技術を生かせること」「仕事を通して資格や技術が身につけられること」といった技術獲得を重視する志向は、理系学生に強いが、そのなかでも女子の理系学生がもっとも重視している。

第二に、「人と接する機会が多いこと」という対人志向は文系学生に強いが、とくに女子の文系学生に顕著である。また、男子の理系学生は、職業を決めるにあたって、こうした人との接触の機会をあまり重視しない傾向がある。

第三に、「知名度がある会社であること」といった大企業志向は、男子の理系学生に強く、同じ理系でも女子には強くない。女子の理系学生は、医療系の職業を中心にして資格や免許を活用しながら就職先を決めることが特徴的に現れているものと推察される。

第四に、「将来、独立して事業ができること」を重視する比率は、文系 - 理系と性の違いを問わずもっとも低い。そのなかでは男子の文系学生のおよそ4人に1人が「重視する」と回答している。独立志向は、男子の文系学生に高いようだ。

表3 - 3 - 7 就職先を決めるときに重視すること（性別・文理別）

(%)

	全体	男子		女子	
		文系	理系	文系	理系
自分の能力や個性を生かせること	96.7	96.9	97.1	96.2	97.4
安定していること	87.1	82.0	< 87.3	88.1	90.0
学生時代に身につけた知識や技術を生かせること	83.8	75.5	87.9	77.1	90.4
人や社会の役に立つこと	80.1	79.3	77.6	79.3	81.6
給料が高いこと	74.8	69.2	< 76.9	74.3	77.2
地理的条件がよいこと	73.1	66.4	69.6	76.5	76.6
仕事を通して資格や技術を身につけられること	68.8	62.0	< 68.3	68.1	< 73.7
人と接する機会が多いこと	61.0	66.6	49.4	68.3	57.6
休みが多いこと	58.5	57.2	59.7	59.8	57.6
知名度がある会社であること	43.6	43.8	< 50.3	45.9	> 36.7
国際的に働けること	29.6	30.3	29.7	38.7	22.2
将来、独立して事業ができること	17.4	24.0	21.2	14.2	11.1

\* 数値は、「とても重視する」と「まあ重視する」の合計。

\* は性ごとの文理別で10ポイント以上差があったもの、< >は5ポイント以上差があったものを示す。

\* ○は、文系男子、理系男子、文系女子、理系女子のなかでの最高値、下線は最低値を示す。

\* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は表から省略した。

では、就職先を決めるときに重視することは、学生が在籍している学部系統によって異なるのであろうか。その結果を、表3-3-8に示した。

全体的に、医歯薬看護学系統で「重視する」という回答比率が高い項目が多く、「学生時代に身につけた知識や技術を生かせること」「仕事を通して資格や技術を身につけられること」などの技術獲得を重視する志向、「人や社会の役に立つこと」「人と接する機会が多いこと」などの他者への貢献を重視する志向、「安定していること」「給料が高いこと」などの安定を重視する志向がみられた。こうした志向は、医療系の職業のイメージに類似している。

人文科学系統は、「国際的に働けること」が相対的に多く、外国語学や国際学系統の学部を含んでいるためと考えられる。また、社会科学系統は、「知名度がある会社であること」「将来、独立して事業ができること」が高く、ビジネス志向が強い様子が見える。教育学系統は、医歯薬看護学系統と同様に他者への貢献を重視する傾向は強いものの、技術獲得や報酬を重視する志向は弱い。理工学系統と農水産学系統は、他の学部系統に比して顕著に数値が高い項目がなく、「人と接する機会が多いこと」の比率が低いことが共通している。

表3-3-8 就職先を決めるときに重視すること（学部系統別）

（％）

	全体	人文科学系統	社会科学系統	教育学系統	理工学系統	医歯薬看護学系統	農水産学系統
自分の能力や個性が生かせること	96.7	97.0	95.9	96.7	97.6	95.2	97.3
安定していること	87.1	85.2	86.4	88.4	87.8	92.8	83.6
学生時代に身につけた知識や技術が生かせること	83.7	76.8	75.2	87.3	85.3	97.6	85.6
人や社会の役に立つこと	80.1	77.6	80.9	84.8	74.9	93.2	78.4
給料が高いこと	74.8	72.1	75.3	66.8	75.3	87.4	67.8
地理的条件がよいこと	73.1	74.6	71.0	63.0	72.8	79.9	69.7
仕事を通して資格や技術を身につけられること	68.8	64.7	67.5	55.8	70.1	78.7	68.3
人と接する機会が多いこと	60.9	66.4	64.7	77.9	44.5	77.2	45.4
休みが多いこと	58.6	59.3	62.2	48.9	59.9	60.7	54.1
知名度がある会社であること	43.6	41.7	54.4	24.1	47.9	40.8	32.8
国際的に働けること	29.6	39.5	30.6	20.8	28.5	24.8	21.6
将来、独立して事業ができること	17.5	14.1	27.1	9.2	16.9	13.8	13.4

\* 数値は「とても重視する」と「まあ重視する」の合計。

\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。

\* ○ は全体の平均値よりも5ポイント以上、◎ は10ポイント以上高いものを示す。

\* 一重下線は全体の平均値よりも5ポイント以上、二重下線は10ポイント以上低いものを示す。

ところで、表3 - 3 - 8では、理工学系統、農水産学系統において、「人と接する機会が多いこと」の比率が低いほかは、顕著な特徴がみられなかった。これは、両学部系統において大学院への「進学」希望者が24.9%、19.6%と高く（図3 - 3 - 1 参照）職業に対する明確なイメージをもちえていないためかもしれない。

そこで、大学卒業後の希望として「進学」を選択した学生が、就職先を決めるにあたりどのようなことを重視しているのかを確認しよう。表3 - 3 - 9に示したように、人文科学系統、社会科学系統、教育学系統の3系統は、「進学」希望者が少ないため、「文系学部系統」としてひと括りにした。

結果をみると、医歯薬看護学系統で「重視する」比率が高い項目が多いのは、全体（表3 - 3 - 8参照）の傾向と同様である。ただし、「仕事を通して資格や技術が身につけられること」（医歯薬看護学系統全体78.9% > 同系統進学希望者69.7%、「とても重視する」と「まあ重視する」の合計、以下同様）を「重視する」という回答は少なくなっている。

理工学系統で顕著なのは、「人や社会の役に立つこと」（理工学系統全体75.2% > 同系統進学希望者71.1%）、「人と接する機会が多いこと」（44.7% > 36.9%）といった他者への貢献や接触の機会を重視する傾向が一段と低くなっている点である。職業を通じて社会貢献をしようという志向が弱いことは、気になる傾向である。さらに、「休みが多いこと」（60.0% < 63.1%）といった実利的な志向や「知名度がある会社であること」（48.0% < 52.8%）といった大企業志向などが強く表れている。

農水産学系統の「進学」希望者は、「人と接する機会が多いこと」（農水産学系統全体45.5% > 同系統進学希望者39.2%）を「重視する」比率が低いのは、理工学系統と同様である。しかし、「給料が高いこと」「休みが多いこと」「知名度がある会社であること」など実利的な志向や大企業志向は、他系統の「進学」希望者よりも弱いことがわかる。

表3-3-9 就職先を決めるときに重視すること（学部系統別、進学希望者）（％）

	大学院進学 者全体	文系学部 系統	理工学 系統	医歯薬 看護学 系統	農水産 学系統
自分の能力や個性を生かせること	98.5	98.2	98.7	98.9	97.5
安定していること	84.9	80.6	87.4	92.1	81.0
学生時代に身につけた知識や技術を生かせること	90.3	90.6	88.4	97.8	89.9
人や社会の役に立つこと	77.0	82.9	71.1	91.0	78.5
給料が高いこと	75.5	71.8	77.8	87.6	69.6
地理的条件がよいこと	72.4	66.5	73.2	77.5	70.9
仕事を通して資格や技術を身につけられること	72.0	68.8	74.0	69.7	69.6
人と接する機会が多いこと	47.7	64.1	36.9	64.0	39.2
休みが多いこと	57.3	52.9	63.1	55.1	51.9
知名度がある会社であること	45.5	37.6	52.8	38.2	40.5
国際的に働けること	37.8	38.2	38.7	39.3	34.2
将来、独立して事業ができること	21.1	27.1	20.6	19.1	11.4

\* 数値は「とても重視する」と「まあ重視する」の合計。

\* 数値は、大学卒業後の進路の希望をたずねる設問で「進学」を選択した者（726名）のものである。

\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。

\* 「文系学部系統」は、人文学部系統（94名）、社会科学系統（57名）、教育学系統（19名）を合わせた数値である。

\* ○は全体の平均値よりも5ポイント以上、◎は10ポイント以上高いものを示す。

\* 一重下線は全体の平均値よりも5ポイント以上、二重下線は10ポイント以上低いものを示す。

続けて、就職先を決めるときに重視することについて、学年による変化をみていこう。図 3 - 3 - 8 は、文系と理系のそれぞれを示している。

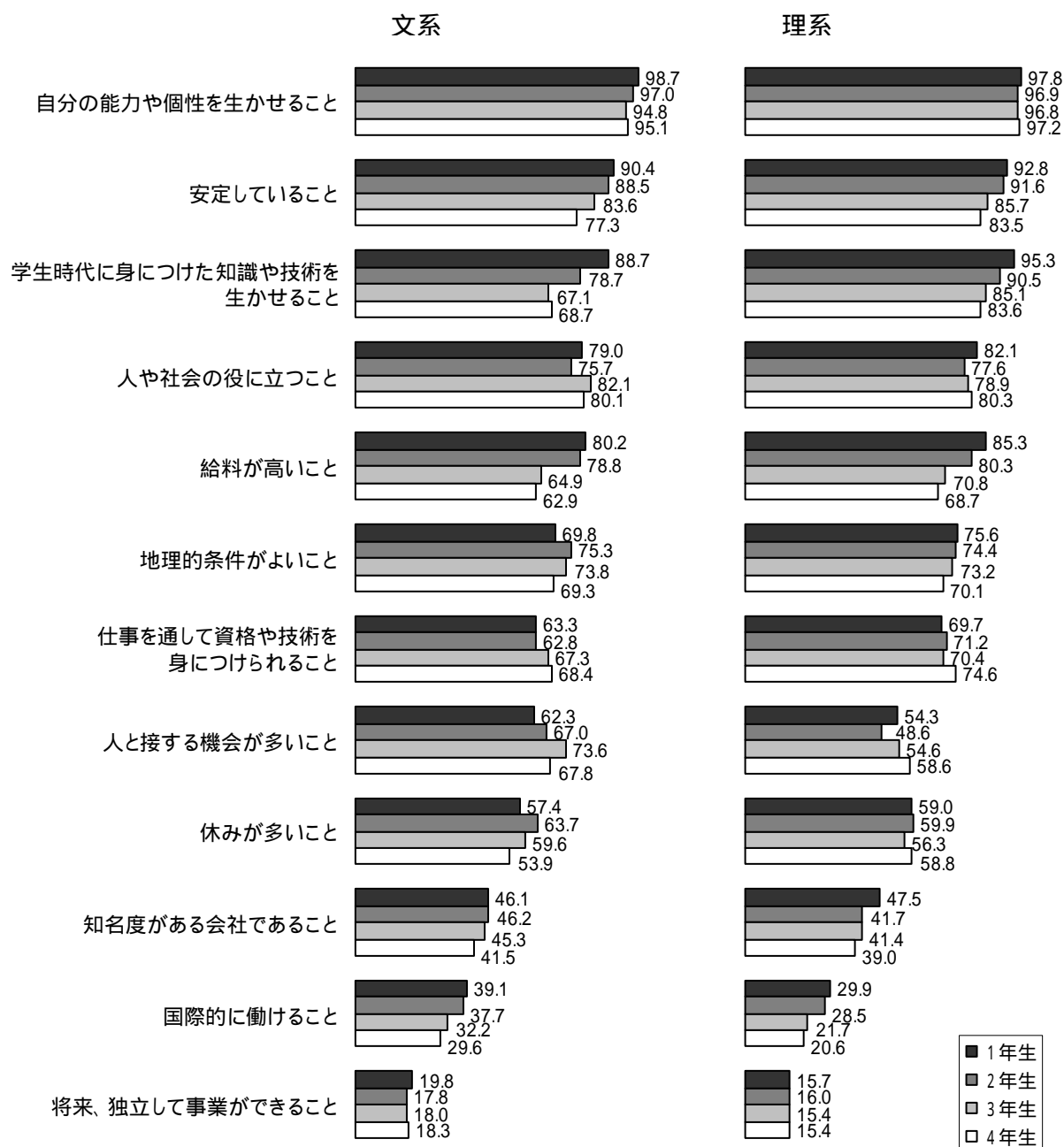
文系、理系ともに、いずれの学年も「自分の能力や個性を生かせること」をもっとも重視しており、自分の力を発揮できるかどうか最大の基準であることに変化はない。しかし、学年が上がり、就職がより具体的になっていくにつれて、増減がみられる項目がある。

学年が上がるにつれて「重視する」(「とても重視する」と「まあ重視する」の合計、以下同様) 比率が高まるのは、「仕事を通して資格や技術を身につけられること」(文系 1 年生 63.3% 4 年生 68.4%、理系 1 年生 69.7% 4 年生 74.6%) であり、職業のイメージが具体化するにつれて、職業を通じての自己成長を求めるようになっている。

しかし、総じて比率が低くなる項目が多い。「安定していること」(文系 90.4% 77.3%、理系 92.8% 83.5%)、「給料が高いこと」(文系 80.2% 62.9%、理系 85.3% 68.7%)、「知名度がある会社であること」(文系 46.1% 41.5%、理系 47.5% 39.0%) など、安定性や報酬などの待遇、大企業志向などは、学年が上がるとともに重視しなくなる傾向がみられる。就職の難しさや職業についての現実的な情報に触れるにつれて、夢や希望的な観測が弱まっていく様子うかがえる。さらに、「学生時代に身につけた知識や技術を生かせること」(文系 88.7% 68.7%、理系 95.3% 83.6%) が、とくに文系で大きく減少する。大学教育で身につけた能力と産業界が求める能力に、学生自身が格差を感じている可能性があるのではないだろうか。



図3-3-8 就職先を決めるときに重視すること（文理別・学年別）

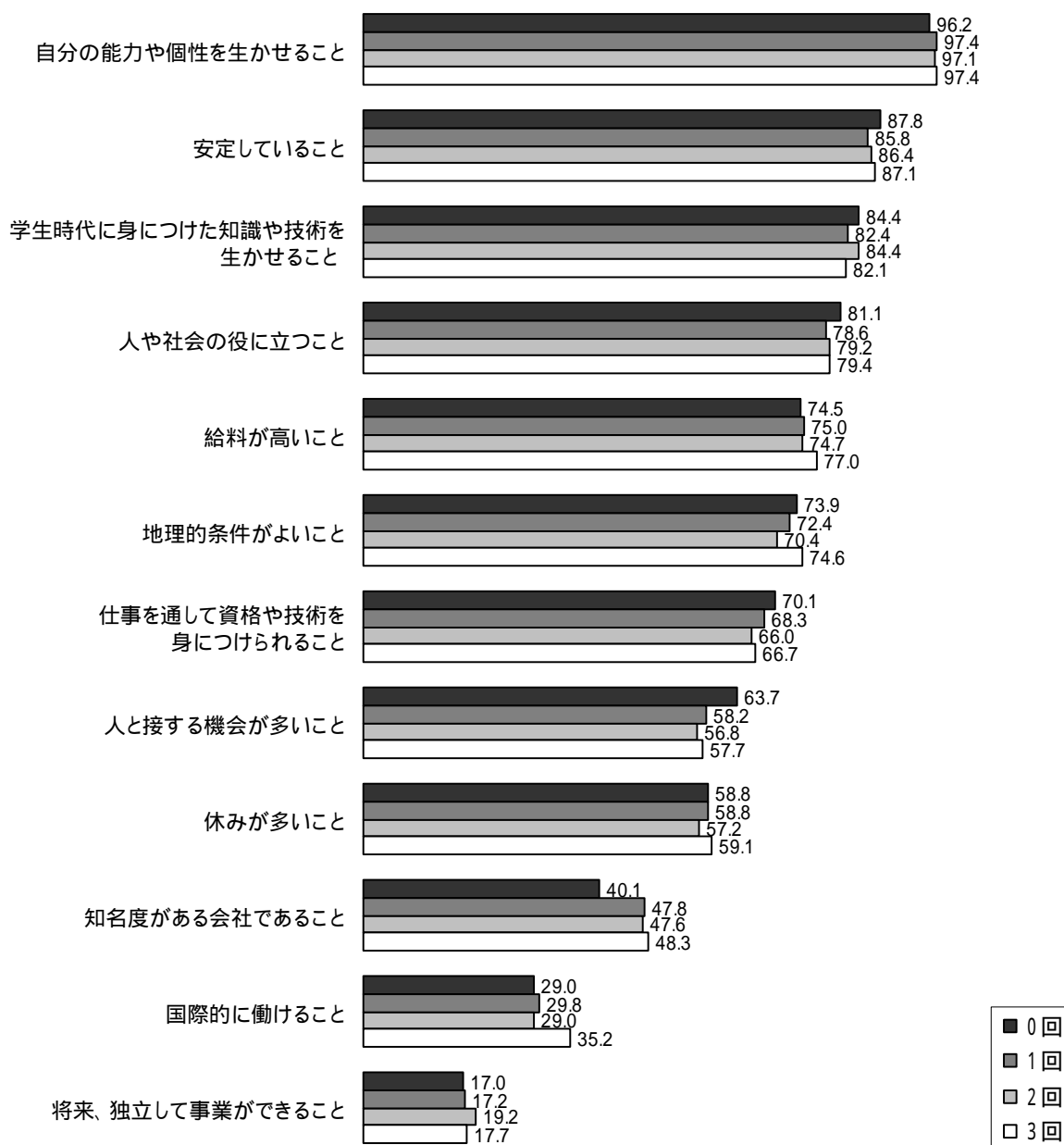


\* 専攻の文理別について、「文系と理系の間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

\* 数値は「とても重視する」と「まあ重視する」の合計（%）

さらに、就職先を決めるときに重視することについて、COE採択回数別に違いがみられるかを確認した。図3-3-9に示されているように、採択回数が「0回」の大学で「知名度がある会社であること」の肯定率が低く、採択回数が「3回」の大学で「国際的に働けること」が高かったが、全体としてはあまり大きな差はなかった。相対的に実学的な教育に重きをおいている「0回」の大学に在籍する学生も、研究に重きをおいている「3回」の大学に在籍する学生も、就職にあたって重視することはあまり変わっていない。

図3-3-9 就職先を決めるときに重視すること（COE採択回数別）



\* 数値は「とても重視する」と「まあ重視する」の合計（％）

\* COE採択回数は、回答者が所属する大学の過去3年（平成14～16年）のCOE採択回数を示す。

## (5) 就職を決めるときに重視すること - 主成分分析

ここでは、就職先を決めるときに重視することを構造的に把握するために、主成分分析によって抽出された4つの成分について、属性別に平均値を確認していこう。表3-3-10は、12の質問項目について主成分分析を行った結果である。

まず、「成分1」では、「給料が高いこと」「安定していること」「休みが多いこと」「知名度がある会社であること」「地理的条件がよいこと」など、就職するうえでの条件面が成分となっている。実利的側面が判断材料になっていることから、**実利志向 因子**と名づけることにする。次に、「成分2」は「人や社会の役に立つこと」「人と接する機会が多いこと」から成り、人とかかわりを基準としていることから **対人志向 因子**と名づけよう。続いて、「成分3」は、「将来、独立して事業ができること」「国際的に働けること」から成っていて、独立や国際的な働き方を重視していることから **独立志向 因子**と名づける。また、「成分4」の「学生時代に身につけた知識や技術を生かせること」「自分の能力や個性を生かせること」「仕事を通して資格や技術を身につけられること」は本人の技術や能力面から構成されているため、**能力志向 因子**と名づける。

表3-3-10 就職先を決めるときに重視すること（主成分分析）

	成分1	成分2	成分3	成分4
	実利志向 因子	対人志向 因子	独立志向 因子	能力志向 因子
給料が高いこと	<b>0.71354</b>	-0.12984	0.15016	0.15860
安定していること	<b>0.68522</b>	0.28853	-0.23249	-0.00159
休みが多いこと	<b>0.67191</b>	-0.23643	0.03339	0.07369
知名度がある会社であること	<b>0.62310</b>	0.17972	0.22298	-0.15480
地理的条件がよいこと	<b>0.61520</b>	0.01132	-0.03146	0.02819
人や社会の役に立つこと	0.01021	<b>0.82450</b>	0.00571	0.18953
人と接する機会が多いこと	-0.02770	<b>0.78138</b>	0.19601	0.08585
将来、独立して事業ができること	0.02851	-0.04967	<b>0.81935</b>	0.10657
国際的に働けること	0.03473	0.24491	<b>0.75542</b>	0.04217
学生時代に身につけた知識や技術を生かせること	0.07642	0.11092	-0.08450	<b>0.80277</b>
自分の能力や個性を生かせること	-0.08093	0.06877	0.15784	<b>0.72106</b>
仕事を通して資格や技術を身につけられること	0.24108	0.19033	0.29437	<b>0.41594</b>

\* 因子抽出法：主成分分析

\* 回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法（5回の反復で回転が収束）

それでは、それぞれの志向を構成する因子得点の平均を、さまざまな属性別にみることによって、就職で重視されることを構造的にとらえていこう。

最初に、**図3-3-10** は、性別に示した結果である。これをみると、男子に 独立志向 が強く、マイナスとなった女子との格差が大きい。また、女子は 対人志向 が強めに表れている。

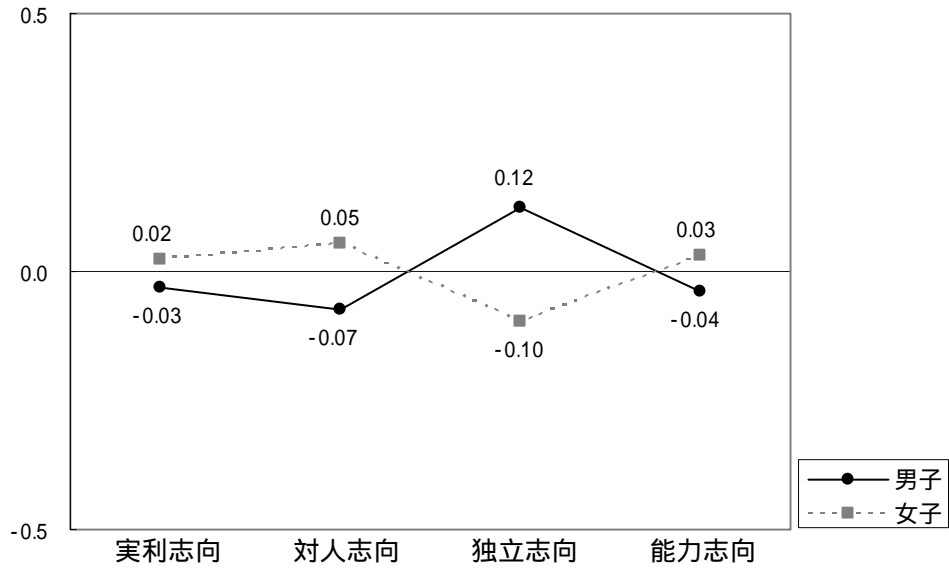
次に、**図3-3-10** で、文系と理系の違いを示した。文系では 独立志向 対人志向 がプラスとなり、特に 独立志向 で理系との格差が大きい。一方の理系では 能力志向 実利志向 がプラスとなり、とくに自分の能力をより生かそうとする 能力志向 で、文系との格差が大きい傾向が示された。

さらに、学部系統ごとの特徴を確認しよう。**図3-3-10** は、文系の学部系統の特徴を示している。人文科学系統は、総じて平均的なプロットを描いているが、能力志向 がやや弱い様子が表れている。社会科学系統は、能力志向 を除く3つの志向がプラスとなり、とくに 独立志向 が強い様子が表れている。ちなみに、能力志向 は全学部系統を通じてもっとも低くなった。教育学系統は、対人志向 能力志向 がプラスとなり、とくに人のかかわりを重視する 対人志向 が強く表れている。しかし 実利志向 独立志向 とともに全学部系統を通じてもっとも低く、待遇などの条件を重視したり、独立や国際的な仕事を考えたりする傾向は弱い様子が示されている。

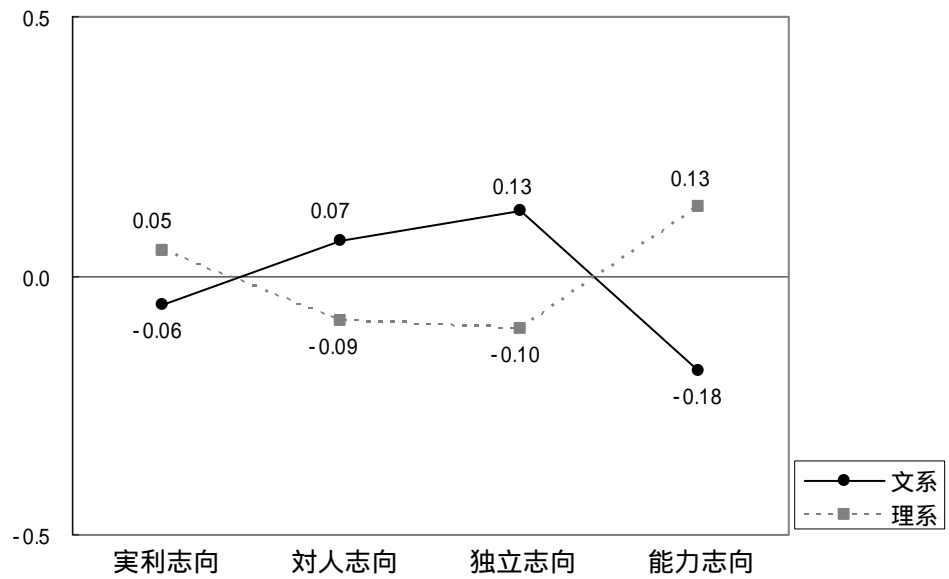
次に、**図3-3-10** から、理系の学部系統を概観しよう。理工学系統は、対人志向 がマイナスとなり、全学部系統を通じてもっとも低くなった。それ以外については、平均的な数値を示している。一方、医歯薬看護学系統は、独立志向 のみマイナスとなったが、他の志向はいずれも全学部系統を通じて高くなった。表3-3-8にみたように、この学部系統は就職にあたってさまざまなことを重視していることが表れている。また、農水産学系統では 能力志向 のみ変わらずにプラスとなったが、他の志向はすべてマイナスとなった。この学部系統は、就職にあたってあまり多くのことを基準にしないで決定していることがわかる。

図3-3-10 就職を決めるときに重視すること(因子得点)

性別



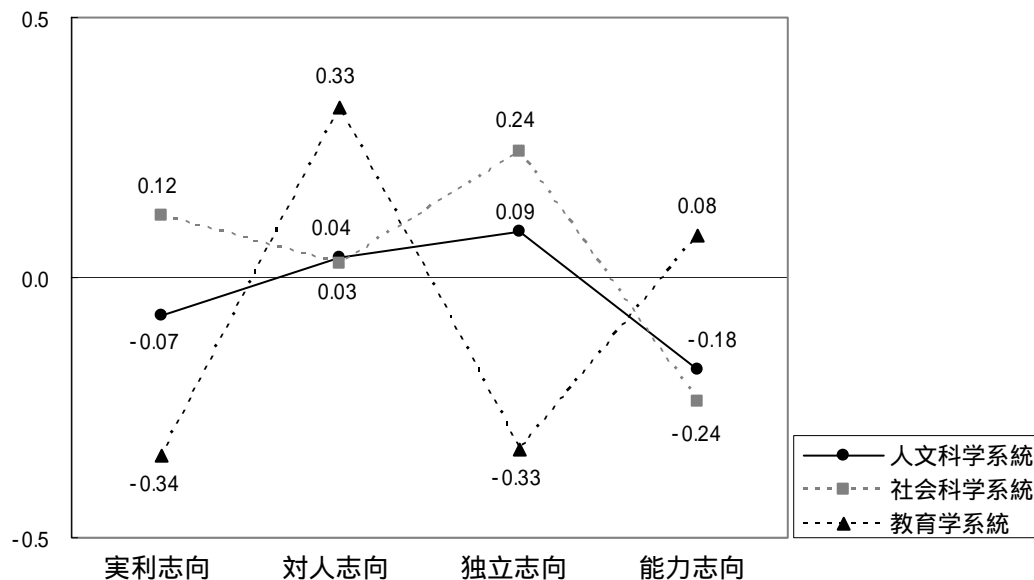
文理別



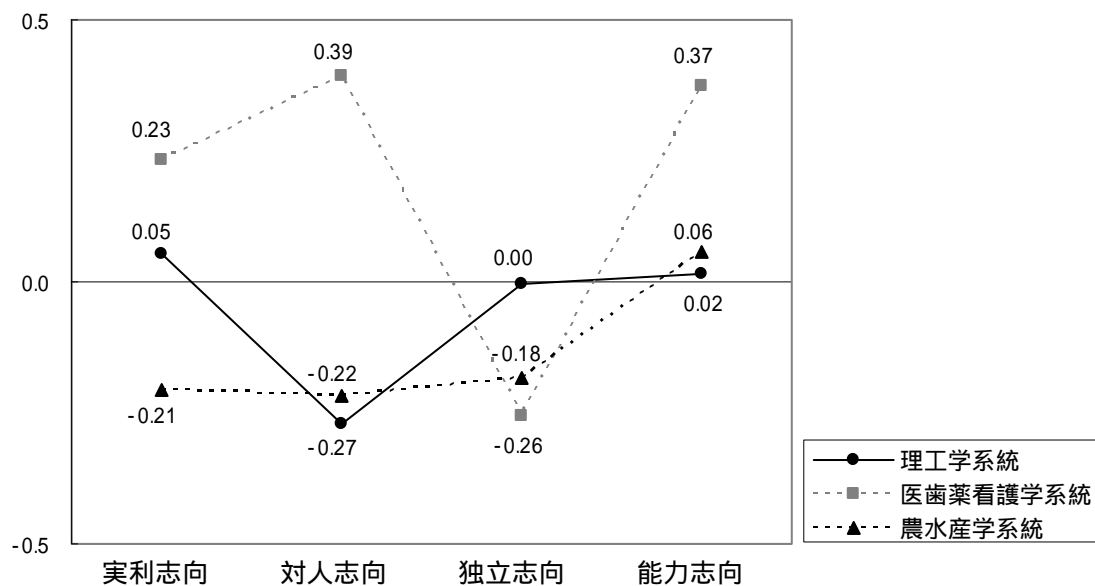
\* 専攻の文理別について、「文系と理系の間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

図3 - 3 - 10 就職するときに重視すること(因子得点)(続き)

文系学部系統別



理系学部系統別

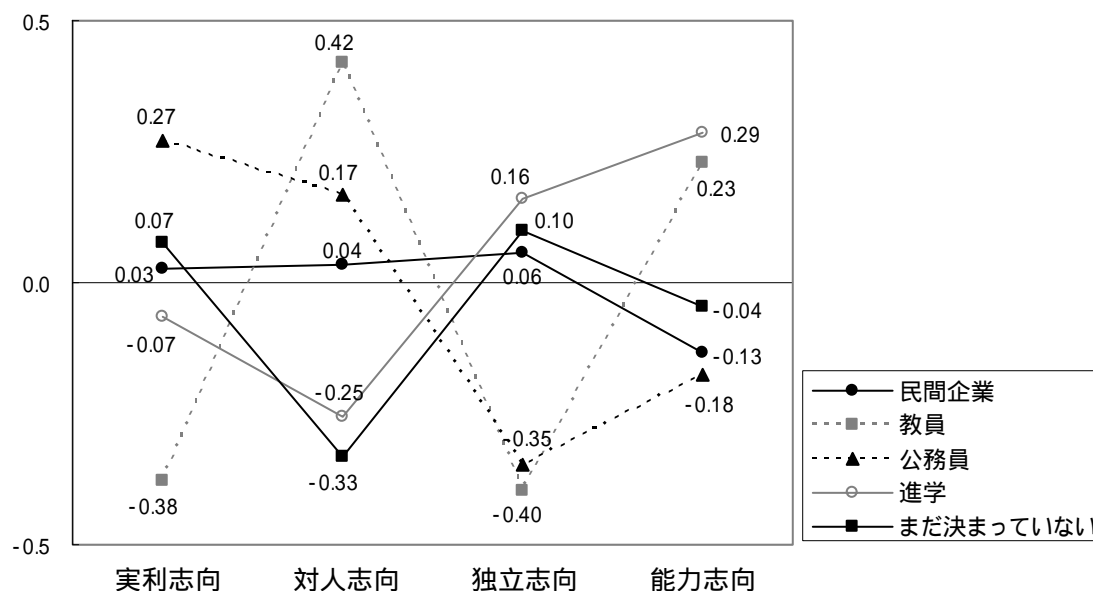


\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

さらに、属性ごとの平均値の比較の最後として、卒業後の希望進路ごとの特徴をみてみよう。  
**図3 - 3 - 10** に示したように、「民間企業」を希望している者は、能力志向 でマイナスになっているが、それ以外は平均的である。「教員」希望者は、対人志向 能力志向 が大きくプラス、実利志向 独立志向 が大きくマイナスであり、教育学系統の学生と同じ傾向を示した。「公務員」希望者は、実利志向 対人志向 が強く、待遇面などの条件や人とのかかわりを重視する傾向が表れているが、独立志向 能力志向 がマイナスで、独立して仕事をしたり、自分の能力を発揮したりすることは強くは望んでいない様子がみえる。「進学」希望者は、能力志向 独立志向 はプラスとなり、また 対人志向 のマイナスが強いことが目立つ。対人関係を重視しない姿勢は、理工学系統や農水産学系統に進学希望者が多いためと推察される。なお、「まだ決まっていない」と回答した学生は、対人志向 のマイナスが強く、就職にあたって他者への貢献や人とのかかわりなどは望んでいない様子がうかがえる。

図3 - 3 - 10 就職するときに重視すること(因子得点)(続き)

卒業後の希望進路別



\* 大学卒業後の進路希望について、「その他」と無答不明の者は図から省略した。

## (6) 職業に関する意識

これまで、大学生が就職を決めるにあたって重視することを、さまざまな角度から分析してきた。それでは、大学生は卒業後の進路に対して、具体的な目標設定や自分自身の適性の把握をどの程度行っているのだろうか。また、職業や産業に対してどの程度の知識・情報を持ち合わせているのか。本章の最後に、これらの進路観や自己理解の程度について概観することにする。

まず、職業に関する意識などについてたずねた6項目について、調査対象となった大学生全体の集計結果を、**図3-3-11**に示した。「あてはまる」「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計、以下同様)という回答がもっとも多かったのは、「希望する職業がある」で78.7%であった。全体の8割近くが希望する職業をもっていると回答している。この結果は、希望する進路についてたずねた**図3-3-1**と一致している。また、「将来についてはっきりとした目標をもっている」とする回答も65.3%であり、6割以上の大学生は職業選択を中心に将来への目標設定に対して前向きであるといえる。

しかし、「自分にどのような能力・適性があるか知っている」という自分自身の適性の把握ができているとする回答は、数値がやや低くなり59.3%である。さらに、「とてもあてはまる」という強い肯定が12.3%にとどまっており、目標設定はできているが現在の自分自身の能力・適性の把握に関しては十分ではない様子もうかがえる。

続いて、職業や産業の知識と理解に関連する3項目が並んでいる。「職業に関する情報の集め方がわかる」(49.3%)、「希望する職業について十分な知識をもっている」(44.3%)、「最近の産業の動向について知識をもっている」(26.1%)などは、「あてはまる」が半数を下回っていることがわかる。希望とする職業や目標が設定できている割合に対して、職業自体の知識・情報を把握している程度は低い結果となった。目標とする職業はあるものの職業や産業に対する十分な知識を持ち合わせていないこと、さらには職業に関する情報の集め方がわからないとする回答が目立つことから、限られた知識や情報のなかから希望する職業を考えている大学生が相当数存在する可能性が考えられる。

それでは、このような進路観や自己理解は、学年によってどの程度異なるのだろうか。

**図3-3-12**で、学年別の集計結果を示した。学年ごとにみると、各項目で肯定する割合は4年生でもっとも高くなっている。とくに、「希望する職業について十分な知識をもっている」(1年生35.5% 4年生61.5%)、「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計、以下同様)、「職業に関する情報の集め方がわかる」(1年生39.1% 4年生64.7%)の2項目は1年生との格差が大きい。これは、就職活動を通して実際に情報収集を行うことにより、その方法を理解し、知識を獲得できた学生が多いことを示している。また「自分にどのような能力・適性があるか知っている」(1年生52.7% 4年生70.0%)も格差が大きいことから、学年があがるにつれて自分自身の能力や適性を把握する程度も深まっているといえよう。



図3-3-11 職業に関する意識

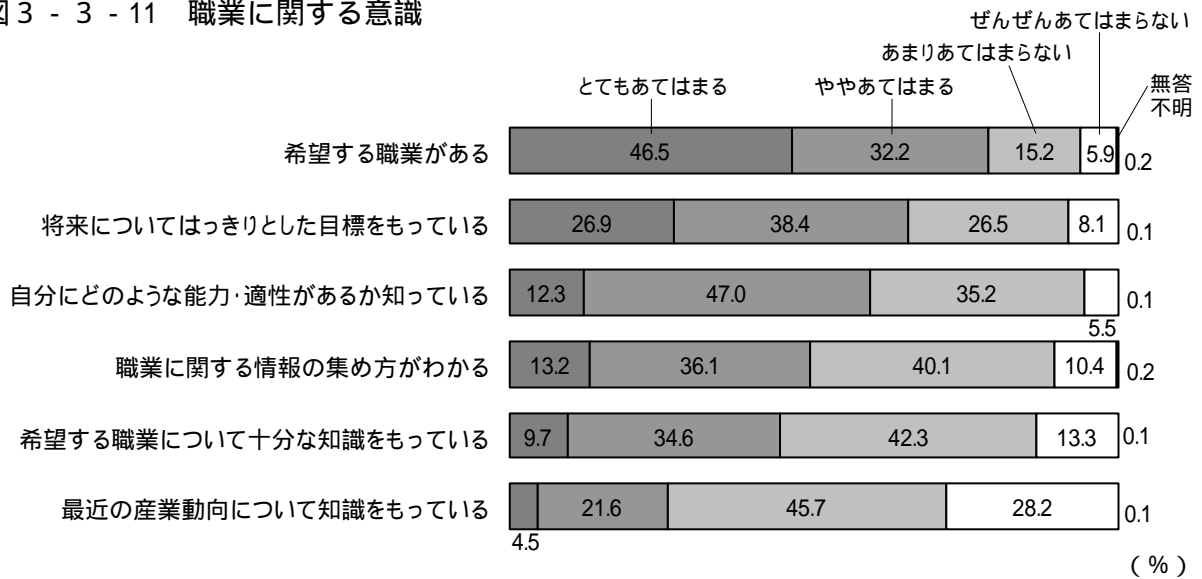
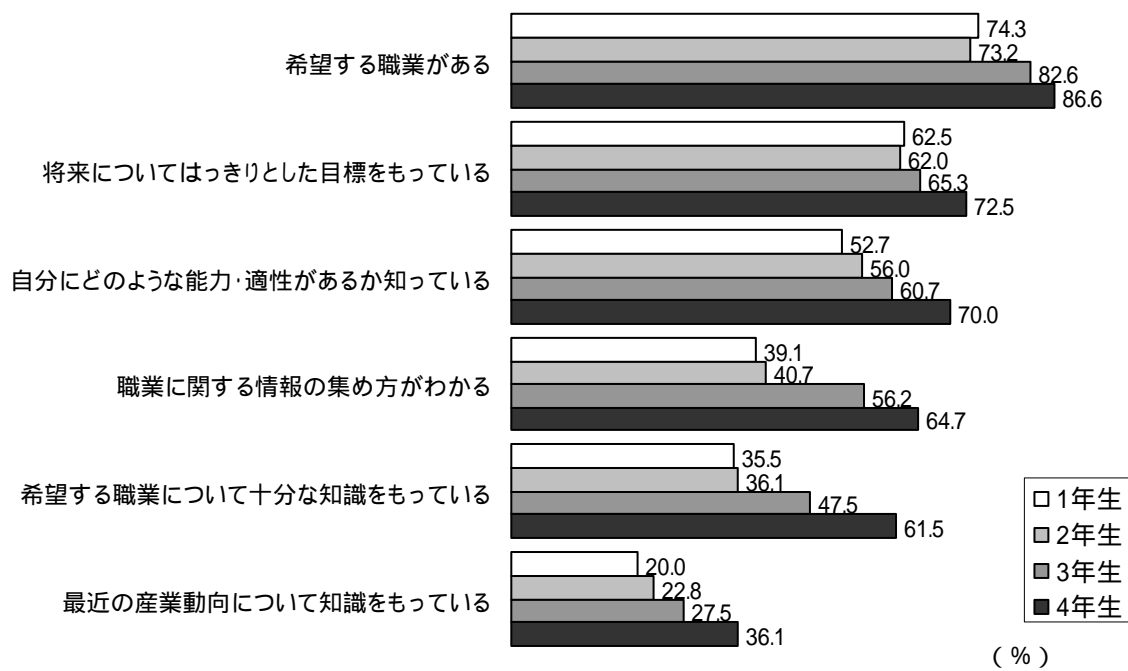


図3-3-12 職業に関する意識（学年別）



\* 数値は、「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計。

それでは、進路観と自己理解は、文系学生と理系学生の間で違いがみられるのだろうか。  
表3 - 3 - 11 は、性別に文系 - 理系の差を示したものである。ここから、次のようなことがわかる。

第一に、男子の文系学生は、「職業に関する情報の集め方がわかる」「最近の産業動向について知識をもっている」などの比率が相対的に高く、職業や産業に関する知識と情報の集め方を理解している傾向が読み取れる。これに対して、男子の理系学生は、こうした職業に関する知識を、あまり把握していないようである。彼らは、大学院への進学希望者が多いため、就職活動などで職業や産業動向の理解を深める機会が文系学生に比べ少ないものと考えられる。

第二に、女子についてしてみると、理系学生で「希望する職業がある」「将来についてはっきりとした目標をもっている」「希望する職業について十分な知識をもっている」などの比率が高く、将来の目標と希望する職業についての知識は備わっている様子が見えてくる。それに比べると、産業動向全般についての知識などは少ないようだ。このことは、女子の理系学生が、産業動向にあまり影響されない特定の職業・職種を希望しているためであろう。

表3 - 3 - 11 職業に関する意識（文理別・性別）

(%)

	全体	男子		女子	
		文系	理系	文系	理系
希望する職業がある	78.7	79.7 > <u>74.5</u>	75.5 < <u>83.3</u>		
将来についてはっきりとした目標をもっている	65.3	64.7	62.5	60.6 < <u>69.5</u>	
自分にどのような能力・適性があるか知っている	59.3	<u>62.9</u>	60.1	58.5	<u>55.2</u>
職業に関する情報の集め方がわかる	49.3	<u>52.7</u> > <u>42.9</u>	50.5	50.3	
希望する職業について十分な知識をもっている	44.3	46.7 > <u>37.4</u>	42.1 < <u>47.9</u>		
最近の産業動向について知識をもっている	26.1	<u>39.3</u> > 31.4	20.6	<u>16.3</u>	

- \* 数値は「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計。
- \* 「文系と理系の中間」「その他」は表から省略した。
- \* < > は5ポイント以上の差があったもの。
- \* ○ は文系男子、理系男子、文系女子、理系女子のなかでの最高値、下線は最低値を示す。

次に、こうした職業に関する意識を、学部系統ごとに示した。表3-3-12からは、教育学系統と医歯薬看護学系統で「あてはまる」と回答する比率が高い項目が多いことがわかる。同じ理系分野でも、理工学系統、農水産学系統と、医歯薬看護学系統では、大きく傾向が異なっている。それでは、学部系統ごとに特徴をみていこう。

まず、人文科学系統では、「希望する職業がある」「将来についてはっきりとした目標をもっている」「希望する職業について十分な知識をもっている」などの比率が低く、文系学部系統のなかでも将来の目標や職業についての知識が十分でない様子が見える。社会科学系統も人文科学系統と同様に、「将来についてはっきりとした目標をもっている」はさほど高くない。しかし、「最近の産業動向について知識をもっている」が他の学部系統に比して著しく高く、一般的な産業動向に関する知識をもっている学生は多いようである。

教育学系統と医歯薬看護学系統は、傾向が似ている。「最近の産業動向について知識をもっている」を肯定する比率は低いが、それ以外の項目（希望する職業や将来の目標、自己理解、職業についての知識などに関する項目）では、いずれも高い肯定率を示している。これは、大学教育と職業の連続性が強く、職業のことを明確に意識しているためであろう。

さらに、理工学系統と農水産学系統では「職業に関する情報の集め方がわかる」「希望する職業について十分な知識をもっている」が低く、とくに農水産学系統では「自分にどのような能力・適性があるか知っている」の肯定率も低かった。この二つの系統は、大学院への進学希望者が多いことから、職業に関する意識が相対的に低くなっていると考えられる。

表3-3-12 職業に関する意識（学部系統別）

（％）

	全体	人文科学系統	社会科学系統	教育学系統	理工学系統	医歯薬看護学系統	農水産学系統
希望する職業がある	79.0	<u>73.3</u>	75.9	<u>87.6</u>	<u>72.5</u>	<u>96.1</u>	76.9
将来についてはっきりとした目標をもっている	65.1	<u>58.3</u>	59.4	<u>77.4</u>	58.9	<u>89.0</u>	<u>54.9</u>
自分にどのような能力・適性があるか知っている	58.9	58.0	57.4	<u>69.7</u>	54.7	<u>66.9</u>	<u>45.7</u>
職業に関する情報の集め方がわかる	50.3	48.1	52.2	<u>54.5</u>	<u>42.6</u>	<u>63.7</u>	<u>43.5</u>
希望する職業について十分な知識をもっている	44.9	<u>38.2</u>	43.5	<u>58.7</u>	<u>32.6</u>	<u>74.1</u>	<u>31.2</u>
最近の産業動向について知識をもっている	26.0	22.1	<u>42.7</u>	<u>19.3</u>	26.6	<u>20.0</u>	<u>16.4</u>

\* 数値は「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計。

\* 大学卒業後の希望進路を「進学」と回答したものは除外した（「全体」の数値も同様）。

\* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。

\* ○ は全体の平均値よりも5ポイント以上、◎ は10ポイント以上高いものを示す。

\* 一重下線は全体の平均値よりも5ポイント以上、二重下線は10ポイント以上低いものを示す。

それでは、COE採択回数により、職業に関する意識は異なるのだろうか。表3-3-13で、COE採択回数別の結果を示した。ここからは、採択回数が多い大学ほどいずれの項目も肯定率が低下し、「希望する職業がある」「最近の産業動向について知識をもっている」を除く項目で顕著な差がみられた。とくに「職業に関する情報の集め方がわかる」では、採択回数「0回」の大学と「3回」の大学で、13.0ポイントの差が開いている。これは、大学が提供するサービスとして、採択回数が少ない大学では職業に関する情報提供を積極的に行っていることを反映しているためだろう。一方、相対的に研究を重視する姿勢が強い採択回数の多い大学では、職業に対する情報提供にあまり積極的ではない可能性が高い。

ただし、こうした傾向は、COE採択回数が多い大学に在籍する学生に大学院への進学希望者が多く、学生側のニーズとして就職支援への要求が弱いことが影響している可能性がある。そこで、大学卒業後の希望進路をたずねる質問で「進学」と回答したものを分析から除外した結果を表3-3-14に示した。これをみると、大学院への進学希望者を除いても、COE採択回数が少ない大学で肯定率が高く、多い大学で低い傾向がみてとれる。COE採択回数の多い大学では、進学を希望していない学生に対しても、職業に対する情報提供が十分ではない様子が見えてくる。

表3 - 3 - 13 職業に関する意識（COE採択回数別）

（％）

	全体	COE採択回数			
		0回	1回	2回	3回
希望する職業がある	78.7	80.5	77.5	76.2	74.2
将来についてはっきりとした目標をもっている	65.3	68.1	63.4	61.5	<u>57.6</u>
自分にどのような能力・適性があるか知っている	59.3	60.2	59.3	58.1	<u>53.8</u>
職業に関する情報の集め方がわかる	49.3	52.7	48.0	<u>43.5</u>	<u>39.7</u>
希望する職業について十分な知識をもっている	44.3	47.8	41.4	39.5	<u>35.9</u>
最近の産業動向について知識をもっている	26.1	25.3	27.0	28.3	23.9

\* 数値は「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計。

\* 下線は全体の平均値よりも5ポイント以上低いものを示す。

表3 - 3 - 14 職業に関する意識（COE採択回数別、進学者を除く）

（％）

	全体	COE採択回数			
		0回	1回	2回	3回
希望する職業がある	79.0	80.1	77.6	77.0	77.9
将来についてはっきりとした目標をもっている	65.1	67.2	63.6	61.2	<u>59.5</u>
自分にどのような能力・適性があるか知っている	58.9	59.5	58.9	58.0	<u>53.8</u>
職業に関する情報の集め方がわかる	50.3	52.9	49.1	<u>44.8</u>	<u>42.1</u>
希望する職業について十分な知識をもっている	44.9	47.7	42.6	40.5	<u>37.1</u>
最近の産業動向について知識をもっている	26.0	25.1	26.5	29.2	23.7

\* 数値は「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計。

\* 大学卒業後の希望進路をたずねる質問で「進学」と回答したものを分析から除いている（「全体」の数値も同様）。

\* 下線は全体の平均値よりも5ポイント以上低いものを示す。

次に、本章の第1節で確認した「専攻分野を意識した時期」や「職業を意識した時期」と、本節でみている「職業に関する意識」に関連があるのかを確認しよう。表3-3-15は、「専攻分野を意識した時期」と「職業に関する意識」の関連をみたものである。これをみると、早い段階から専攻分野を意識した学生ほど全体的に肯定率が高く、とくに「将来についてはっきりとした目標をもっている」「希望する職業について十分な知識をもっている」では大学入学後に専攻分野を意識した学生と比べ倍近い結果となった。なお「最近の産業動向について知識をもっている」は、専攻分野を意識した時期での違いはみられなかった。

ただし、こうした傾向は、女子の理系学生や医歯薬看護学系統に在学する学生に顕著にみられる傾向であり、特定の専攻分野の学生の数値が全体の数値に影響を与えている可能性もある。そこで、理工学系統に限って傾向をみたのが、表3-3-16である。ここからも、早い段階から専攻分野を意識した学生ほど「希望する職業がある」「将来についてはっきりとした目標をもっている」「自分にどのような能力・適性があるか知っている」の肯定率が高くなる様子がみられ、表3-3-15に示した全体傾向と同様の結果になった。理工学系統は専攻分野を意識する時期がやや遅めである(図3-1-5 参照)ものの、早い段階から専攻分野を意識した学生はそれだけ職業に関する意識も高いことがうかがえる。

以上の結果から、大学の専攻分野について比較的早期に意識することは、職業に関する意識や自己理解を促進する可能性が高いことがわかる。

表3-3-15 職業に関する意識（専攻分野を意識した時期別）

（％）

	全体	専攻分野を意識した時期				
		小・中学校時代	高校1年生	高校2年生	高校3年生	大学入学後
希望する職業がある	79.0	88.5	84.3	78.2	74.1	64.8
将来についてはっきりとした目標をもっている	65.1	80.7	74.1	64.3	56.4	40.1
自分にどのような能力・適性があるか知っている	58.9	69.2	60.0	60.5	53.6	45.4
職業に関する情報の集め方がわかる	50.3	58.6	51.3	49.9	47.4	41.8
希望する職業について十分な知識をもっている	44.9	58.6	53.0	43.5	36.9	29.6
最近の産業動向について知識をもっている	26.0	23.1	27.3	26.3	26.5	26.0

- \* 数値は「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計。
- \* 大学卒業後の希望進路をたずねる質問で「進学」と回答したものを分析から除いている（「全体」の数値も同様）。
- \* ○は全体の平均値よりも5ポイント以上、◎は10ポイント以上高いものを示す。
- \* 一重下線は全体の平均値よりも5ポイント以上、二重下線は10ポイント以上低いものを示す。

表3-3-16 職業に関する意識（専攻分野を意識した時期別、理工学系統）

（％）

	理工学系統全体	専攻分野を意識した時期				
		小・中学校時代	高校1年生	高校2年生	高校3年生	大学入学後
希望する職業がある	72.5	86.0	79.8	69.8	67.9	59.3
将来についてはっきりとした目標をもっている	58.9	73.4	68.3	59.3	51.8	35.6
自分にどのような能力・適性があるか知っている	54.7	67.8	58.2	55.7	49.5	44.1
職業に関する情報の集め方がわかる	42.6	52.4	41.8	41.8	41.3	39.0
希望する職業について十分な知識をもっている	32.6	39.9	40.4	30.2	28.6	32.2
最近の産業動向について知識をもっている	26.6	25.9	25.5	26.6	27.3	28.8

- \* 数値は「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計。
- \* 数値は理工学系統の学生のものである。
- \* 大学卒業後の希望進路をたずねる質問で「進学」と回答したものを分析から除いている（「全体」の数値も同様）。
- \* ○は理工学系統全体の平均値よりも5ポイント以上、◎は10ポイント以上高いものを示す。
- \* 一重下線は理工学系統全体の平均値よりも5ポイント以上、二重下線は10ポイント以上低いものを示す。

「専攻分野を意識した時期」に続いて、「職業を意識した時期」と本節でみている「職業に関する意識」に関連があるのかを確認しよう。表3 - 3 - 17 は、「職業を意識した時期」別に、職業に関する意識をみたものである。

まず、「希望する職業がある」「将来についてはっきりとした目標をもっている」「自分にどのような能力・適性があるか知っている」「希望する職業について十分な知識をもっている」の4項目で、早い段階から職業を意識した学生ほど肯定率が高いことがわかる。ただし、数値の変化の仕方に注目すると、小・中学校時代 高校時代 大学入学後と漸減したのち、職業を「まだ考えていない」学生で大きく低下するという推移を示している。

また、「職業に関する情報の集め方がわかる」「最近の産業動向について知識をもっている」の2項目では、小・中学校時代、高校時代、大学入学後の各段階で差がないか、かえって大学入学後に意識した学生の肯定率が高い結果になっている。

こうした結果から、3つの指摘ができる。

第一に、将来の目標や自己理解などは、早期に職業を意識した学生ほど明確である。しかし、第二に、職業に関連する情報収集や一般的な知識は、職業を意識した時期が遅くなくても大きな問題はないようである。そして、第三に、現時点で職業を意識していることが何より重要であり、職業について「まだ考えていない」と回答する学生は将来の目標や自己理解、職業に関する知識や情報収集などにおいて大きく遅れをとっている。

ところで、表3 - 3 - 17 に表れている傾向も、大学教育と職業に関連の強い学部系統にみられる特徴であり、特定の専攻分野の学生の数値が全体の数値に影響を与えている可能性がある。そこで再び、理工学系統に限って傾向をみたのが、表3 - 3 - 18 である。ここからは、全体(表3 - 3 - 17)とほぼ同様の結果が得られている。ただし、「自分にどのような能力・適性があるか知っている」は、小・中学校時代、高校時代、大学入学以後の間で差が見られない点は、全体の傾向と異なっていた。

以上を概括すると、理工学系統の在学者に限っても、現時点で職業を意識していることが重要であることがわかる。加えて、将来の目標設定を促進するうえでも、早期に職業を意識することはプラスに作用することが確認できる。



表3-3-17 職業に関する意識（職業を意識した時期別）

（％）

	全体	職業を意識した時期			
		小・中学生時代	高校時代	大学入学後	まだ考えていない
希望する職業がある	79.0	91.9	89.9	85.9	35.6
将来についてはっきりとした目標をもっている	65.1	83.4	77.9	64.8	21.2
自分にどのような能力・適性があるか知っている	58.9	68.5	62.8	62.3	35.5
職業に関する情報の集め方がわかる	50.3	57.6	52.3	58.5	26.5
希望する職業について十分な知識をもっている	44.9	63.0	52.1	45.8	8.7
最近の産業動向について知識をもっている	26.0	24.2	25.4	34.0	18.3

\* 数値は「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計。

\* ○ は全体の平均値よりも5ポイント以上、◎ は10ポイント以上高いものを示す。

\* 一重下線は全体の平均値よりも5ポイント以上、二重下線は10ポイント以上低いものを示す。

表3-3-18 職業に関する意識（職業を意識した時期別、理工学系統）

（％）

	理工学系統全体	職業を意識した時期			
		小・中学生時代	高校時代	大学入学後	まだ考えていない
希望する職業がある	71.6	90.6	84.7	83.2	32.4
将来についてはっきりとした目標をもっている	58.2	79.9	70.6	64.5	23.5
自分にどのような能力・適性があるか知っている	55.3	63.1	60.4	64.7	35.1
職業に関する情報の集め方がわかる	40.3	44.3	43.7	49.8	24.7
希望する職業について十分な知識をもっている	31.3	45.0	39.3	36.0	8.7
最近の産業動向について知識をもっている	26.9	27.2	28.6	31.5	20.3

\* 数値は「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計。

\* 数値は理工学系統に進学した学生のものである。

\* ○ は全体の平均値よりも5ポイント以上、◎ は10ポイント以上高いものを示す。

\* 一重下線は全体の平均値よりも5ポイント以上、二重下線は10ポイント以上低いものを示す。